
とある魔術と情報操作(データオペレーション)

kame

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

データオペレーション
とある魔術と情報操作

【Nコード】

N86990

【作者名】

kame

【あらすじ】

データオペレーション
『情報操作』というすべての物にある情報を

結合して作り出したり、結合を解除して物体を消したりという能力を手に入れた人物はとあるの世界で新たな命を受けて生きていく。

僕の性別を間違わないでください。

起きて…起きて…起きてください！

「ん。ここは？」

少女は目を覚ました。

少女は髪がショートボブであり、黒髪黒眼である。
身長は大体、160ぐらいである。

「やっと起きましたね。」

甘ったるい声が聞こえてきた。

少女が声のする方を向くと、そこには少女がいた。

少女は一瞬戸惑ったが声を掛けることにした。

「起きたけど、ここはどこですか？」

それを少女は戸惑うこともなくすぐに答えた。

「ここ？」

ここは、神の客間。

転生候補者がくる場所だよ。」

（転生候補者？

もしかして目の前の少女は神なのか？

てことは僕は転生するの？

その前に僕はいつしんだんだ。」

「なあ。

僕って死んだのか？」

「はい。死にましたね。」

「確か僕は寝ていたはずなんだけど……」

「ああ。」

そうだったね。」

「どうして僕は死んだの？」

そして神（仮）は言いどもった。

「……………すみませんでしたあー！。」

急に土下座をした。

「な、何があったの？」

そして神（仮）はポツリポツリと話出した。

この話の中で分かった事はこの少女は神ではなく天使だということ。

あの全知全能の神ゼウスと人間の耐久力がどこまであるかを調べるために人間に色々なものをぶつけていた。

始めは石やタライなどだが少女にぶつける時はヒートアップしてしまい、ついつい小形の隕石をぶつけてしまい、少女の身体は木っ端微塵だそうだ。

つまりは神々の遊びに巻き込まれたようだ。

「あー理解は出来たけど納得ができない。」

「あははあゝ。

そうですか。

納得しなくてもいいのですが

貴女を別世界ですが転生させたいと思います。」

「元の世k「元の世界は無理ですよ。」なんで。」

「規則ですから。」

（その所はテンプレなんだな。）

「転生時にお付けする能力の方は『データオペレーション情報操作』で良いでしょうか？」

「『データオペレーション情報操作』ってなに？」

「言葉の通り情報を操作出来るんですよ。」

「どついつ事？」

「え〜と

例えばここには空気があるじゃない？」

少女は頷く。

「この空気の成分、酸素、窒素、二酸化炭素などあるでしょ？
普通は見えないでしょ？」

「ただど能力を使うとこの空気の成分が見えるようになるんだ。
それにそれだけじゃない。」

「この空気の成分を変えられるんだ。」

「窒素をヘリウムガスにとかね。」

「へえーそれだけじゃないんでしょう？」

少女は聞く。

「当たり前だよ。」

「この能力は変化させれるのは空気だけじゃない。
物体の情報も変えられるんだ。
例えばあの箱を見てて。」

「いつの間にか現われた箱があった。」

「『範囲指定』箱、情報連結を解除。』」

「天使が咄くと箱は粒子となって消え去った。」

「ほえー。」

「『箱、情報連結。』」

天使がまた呟くと光の粒子が集まり元の箱が現われた。

「これは…」

少女はこの光景を見た事がある。

否、これは消滅したり出現したりしたのは箱ではなく、人間やナイフだが…

しかもその光景は『現実（3次元）』ではなく『アニメ（2次元）』で見たのだ。

「これが…。」

「そう。」

『涼宮ハルヒの憂鬱』ででてきた『長門有希（対有機生命体コンタクト用インターフェイス）』の力だよ。」

「本当ですか！？」

「うん。」

流石に人を情報連結を解除できないようにはするけどね。」

「おつしや〜

一回死んで良かったかも。」

少女は、本気で喜んでいる。

「なつとくして頂いたようなので、早速送りたいと思います。いいですか？」

「ああokok。
いつでもどうぞ。」

「それでは幼児時代は辛いと思いますので3歳ぐらいに記憶が戻るようにしておきます。」

「ああ。」

「それでは、いつてらっしやうい。
あっそうそう、性別は女の子でよかったですね?」

急に少女の足元に穴があいた。

「僕は男だよ?」

「えっ?」

少女否、少年は穴に落ちて行く。

少女・・・いや少年は一見すると女だけど実際は男だった。

「ごめんなさああああい。」

少年が落ちた穴に向かって天使は叫んだが少年には聞こえていなかっただろう。

学園都市は脳を開発します。

「ここは・・・」

暗い部屋の中で少女が目を覚ます。

「うつ。」

急に少女が頭を抑えて苦しみだす。

すると少女の頭に記憶がよみがえってきた。

「はあはあはあ。」

ああ僕は転生したのか・・・。」

この少女は元々別世界の人間だったがこの世界に転生してきたという経歴を持っている。

元少年の少女は真っ暗な部屋の中で自分の身体を確認した。

「小さいな・・・そしてやっぱり女の子か・・・。」

小さいのは当たり前である。3歳児なのだから。

「そしてここは・・・。」

すると頭の中に記憶が出てくる。

「ここは・・・今の僕の家か。」

そして僕の名前は上条優^{かみじょうゆう}・・・

あれ？上条ってやっぱりあの上条？優は僕の前の名前だし・・・。」

部屋の扉が開かれた。

「あらあら起きたのかしら？優ちゃん。」

女の人が部屋の電気をつけながら入ってきた。

（この人は？

ああ僕のお母さんか・・・。）

「うん。ママおはよう。」

優は違和感の無いように記憶を呼び覚ましながら母親に言った。

「もうそろそろご飯ですよ。」

そして母親は優を抱えて居間に向かった。

そこには3歳上のツンツン頭の男の子がいた。

（え？）

また優は記憶をまさぐる。

そこには、自分の兄の記憶もある。

しかもその記憶の通りならばこの兄は上条当麻^{かみじょうたつま}である。

「あらあら当麻さんはもう席についているのかしら？」

「母さんお腹すいた。」

（やはり・・・僕は当麻の妹に転生してしまったのか・・・。
てか当麻に妹なんていなかったよな・・・。）

優は上条家の存在しない当麻の妹として転生したのだった。

その後海外に出張に行っておりいない父親抜きでご飯を食べた。

そして当麻と遊んでいると玄関のチャイムが鳴った。

「はいはい。」

すると上条詩菜は玄関かみじょうしいなに出て行った。

「あらあら今日でしたかしら？」

なにやら玄関から話が聞こえてくる。

「君が当麻君かい？」

なにやら詩菜がつれてきたいかにも研究員という男性が当麻に話しかけた。

「は、はい。」

「君には今から学園都市に来てもらうよ。」

そして当麻はその研究員に連れられて学園都市に向かっていった。

「ねえママ。

なんで泣いてるの？」

優は詩菜が涙を流しているのを見て、今年相応の子のフリをして聞いてみた。

実際は泣いている詩菜の理由も分かっているが・・・。

「あらあらなんて涙がでるのかしら？」

当麻が学園都市に行ってから6年がたった。

当麻は幼稚園での苛めなどの原因で学園都市に行ったが優はそういつたこともないので

学園都市に行くのが遅かった。

「優ちゃんはこれから学園都市に行くことになりました。」

いよいよ優が学園都市に行く日がきてしまった。

原作開始まで多分あと3年。

そしてそのまま詩菜と話すことも無く

学園都市の研究員の女の人に連れられて学園都市に連れて行かれた。

（情報操作）

「優ちゃんは今日から学園都市で超能力の勉強をしてもらいます。よろしいですか？といっても拒否権はないんですけどね。」

女性が何かを話しかけてきていたが優は自分の思考に夢中でまったく聞いていなかった。

そうしている間に学園都市の前まで来ていた。

（やはりそうだ。

ここは『とある魔術』の世界だ。）

優の目の前には、高さ5メートル・厚さ3メートルのぐらゐの壁が見えており、一つの大きな門に向かって車が進んで行くのが見える。

そのまま車は学園都市の内部に向かって進んでいく。

「さあここが学園都市です。

今から優ちゃんには超能力者になるための開発を受けてもらいます。

」

すると優は研究所に連れて行かれた。

データオペレーション

（自分に情報操作ってできるのか？）

優は長門が自分の身体を治していることを思い出した。

優は研究所で『能の開発』というものを受けた。

だが優は能力を発現させたが、完璧には使わずに大体LV3ぐらいの情報の書き換えをした。

「君はLV3だ。」

そして研究者は優に言った。

それが優の故意だと気付かずに・・・。

優は研究所で能力をわざとセーブしたのだ。

そしてついでにこの研究所のデータを自分の能力で読み取って過去の能力開発者を覚えた。

その中には上条当麻かみじょう とうまの名前もあった。

そのまま優は寮の位置を記した地図を貰いその研究所を後にした。

アクセラレータとのファーストコンタクト。

優は渡された地図を頼りに寮に辿り着いた。

この寮は女子用であるためか結構きれいに掃除をされていた。

この寮・・・『柵川学校女子第二寮』はとても部屋が広い。

トイレ、キッチン、バス付きなのはもちろんの事3LDKと広いのだ。

「うおお。」

優の部屋についてからの第一声はそれだった。

（まずは・・・。）

目の前にある、自宅（上条家）から先に送っておいた荷物を片付けることにした。

外の景色が暗くなり、寮の各部屋からいい匂いが漂いだした頃、優は部屋の掃除を終えた。

能力を使えば一発で終るものなのだが・・・。

（今日はご飯作る時間もないし・・・食べに行こう。）

優は外出を決めると近くのファミレスに向かった。

(・・・)

なんで込んでるの?)

ファミレスは込んでいた。

学園都市は完全寮制である。

そのためご飯を作ることの出来ない学生はファミレスなどに外食するのである。

もちろん寮に食堂があるところは外食なんてしないのだが、食堂がある寮なんてものはいいところの学校にしかないのである。

優は運よく空いている4人席に座ることが出来た。
この席が空いている席の最後の席だといっておく。

「お客様すみませんが、相席よろしいでしょうか?」

優が座り何を頼むかを考えていると店員が話しかけてきた。
別に断る理由もないので優は了承した。

「お客様こちらです。」

優の前に相席のお客が座った。

優は何のメニューにするかいまだに迷っておりメニューにかじりついている。

「すまねエが、俺にもメニューをくれ。」

相席の相手が優が独占しているメニューを求めた。

「あ、はい。」

優はここで始めて相席の相手を見た。

そこには髪は白く肌までも白いアルビノの少年か少女か分からない人物がいた。

（え。もしかして一方通行^{アクセラレータ}？）

そう紛れも無い一方通行がいた。

「ああ？俺の顔になアんかついてエんのか？」

つつい優は一方通行の顔を凝視してしまっていたようだ。

「え。い、いやなんでもないです。」

一方通行は気にすることもなく店員を呼ぶベルをならした。

「ご注文はお決まりでしょうか？」

「ハンバーグ。」

一方通行は店員に言った。

「お客様はお決まりでしょうか？」

店員は優に聞いてきた。

「あっじゃあ私もハンバーグで。」

優は一人称を僕ではなく、私にしていた。

自分で変えた訳ではなく、詩菜に変えるように言われたのだった。

優はハンバーグが来るまで、一方通行と話してみることにした。

「ねえ。私の名前は上条優って言うんだ。
あなたのお名前は？」

優は知っているが聞かずに言うത്怪しまれるので一回聞いておくことにした。

アクセラレータ
「一方通行。」

（あっ・・・アクセラレータの本名ってなんなんだ？）

「それって本名？」

「いやア。」

ほんとオの名前なんてエわすれたぜエ。」

「そうなの・・・。
私が付けようか？」

「ああ？」

「田中太郎。」

アクセラレータが睨んできた。

「ぎゃあ睨まないでえ〜。」

「別にイ睨んでなんてねエよ。
だがそれはねエンじゃねエか？」

（いや絶対貴方は睨んでました。）

「うゝん・・・。」

じゃあ高町なのは。」

優はネタに走った。

確かに性格は一方通行だろう。

「それは女の名前じゃねエか。」

（一方通行って『魔法少女リリカルなのは』知っているのか・・・。

）

「あはは。

じゃあ高町恭也。」

これまたリリカルなのはネタで・・・。

「おいおい。

俺は御神の剣^{けん}なア^{みかみ}んて使えねエよ。」

（やっぱり知ってるし・・・。）

実はこの『とある魔術』の世界でも『魔法少女リリカルなのは』は
放映されていた。

「でも悪かアねエな。」

だがアクセラレータには意外と好評のようだ。

（名前かア、アソコ（研究所）じゃだれも俺の名前読んでくれなか
アだな。）

そこに店員が2人分のハンバーグを持って現れた。

2人してハンバーグにがつつく。

「おい。

店員さん。こっちにお冷たのんます。」

優達の座った席の横の席の関西風の男が店員にお冷を頼んでいる。

そして店員はその机にお冷を持っていきこうとすると・・・。

途中の席のいかにも不良って奴に足を引っ掛けられて・・・転んだ。
しかも持っているお冷は優とアクセラレータに向かって中身をぶち
まけながら飛んでくる。

2人はまったくそんなのに気が付かずにハンバーグにがつついてい
る。

アクセラレータにお冷が降り注ぐが・・・常時展開している反射に
よって一方通行そのものにはかからなかった。

一方、優はそのままお冷をかぶってしまった。

「つ、つめたつ。」

「あっお客様す、すいません。」

店員は謝ってくる。

「うう。」

「おおい。大丈夫かア？」

アクセラレータが聞いてくる。

「うう。」

『対象、水、情報連結を解除。』

すると優の髪や服から水分子がどんどん分解し光の粒子となっていく。

そのまま優のぬれた髪や服はぬれる前の状態になった。

「おつ。能力者だったのか。」

「まあね。」

「あつお客様。」

すみません。すみません。」

店員はいまだに謝ってくる。

大人の女性が9歳児に謝っているのはどうもシュールだ。

「ああまだ半分あったのに・・・。」

優に水がかかったのだが食べていたハンバーグにもかかってしまっていた。

ハンバーグにはアクセラレータもかぶってしまったている。

優がハンバーグの情報連結を解除してしまうとハンバーグの水分までなくしてしまう。」

「す、すいません。」

新たに作り直してきます。」

店員はあわてたように厨房に戻っていく。

「ねえアクセラレータ。」

「ああなんだ？」

「この状況を作り出したのって・・・。」

優は店員が転んでから大声で笑っている転ばした不良とその取り巻きを見る。

「あいつらだよね？」

「ああ。」

「許せる？」

「いやア後でぼこる。」

アクセラレータは想像していた通りの言葉を返してきた。

「じゃあ私も参加させて。
私もむかついたから。」

「あア。能力者なら問題ねエな。」

どうみてもあの不良達はわざと転ばしたみたいだ。

いまさっきの店員が新しいハンバーグを出してきた。

「店員さん。」

この後時間ある？」

「え？あつはい。」

ありますが……。」

「ちょっとあの不良達「ぼこる」から見に来ない？」

優が店員と話している間にアクセラレータも会話に入った。

「え？あつはい！！」

どうやらあの不良達にはこの店員もイラついてたようだ。

新たに出てきたハンバーグを食べつつ優とアクセラレータはどういう風に痛めつけようか考えている。

不良達が出て行くとするタイミングでハンバーグを食べ終わり、不良の少し後を優とアクセラレータ、仕事を切り上げた店員がおっ。

不良が裏路地に入っていた。

「さあ一方的な暴力って物を見せてあげようじゃない。
アクセラレータいこう。」

「ああ。今日は予定もねエし遊ばしていただきましょうか。」

「ふふふ。」

「楽しみですね。」

店員はいつの間にか鉄パイプを持っている。
はたから見たら怖い光景だろう・・・。

小学3か4ぐらいの少女と性別が分かりにくい白い人物は不気味に
口を吊り上げて笑っているし、
その傍らには20歳代の女性が鉄パイプを持って不良のあとを追いかけるのだ。
シユールすぎる・・・。

アクセラレータとのファーストコンタクト。(後書き)

アクセラレータの性格は原作よりも優しいです。

もう『絶対能力進化(レベル6シフト)』の実験は始まっています。

口調は・・・気にしないでください・・・。

不良さんにげてええええ

「ぎゃあああああああ。」

路地裏から不良達の叫び声が聞こえてくる。

道行く人がその裏路地を覗き込むがその裏路地は見る事が出来ない。

なぜか新たにそこには壁が出来ているからだ。

その壁の中では一方的な暴行が加えられていた。

こうなるのは約10分前にさかのぼらなければならない。

10分前。

不良達を追って優、アクセラレータ、店員は裏路地に進んだ。

「ジャッジメント風紀委員や警備員アンチスキルがきたらめんでエな。」

「なら任せなさい。」

『閉鎖空間情報連結。』

すると裏路地の入り口に壁が現れた。
そして裏路地一帯に不良を巻き込んで新たな空間が生まれた。

「この空間は『空間移動者』もテレポーターしてることが出来ない空間だよ。」

「へエすげエな。」

アクセラレータを先頭に優達は不良のいる場所まで進んでいく。
なぜアクセラレータが先頭なのか・・・ただたんに奇襲などとしてきたときに反射があるため後ろにいる人が安全なだけだ。

「な、なんだ!!」

「この壁は!!」

不良はこの閉鎖空間から出られずにあわてている。

カラン。

優が道に落ちていた缶を蹴飛ばしてしまった。

「誰だ!!」

不良達は優達が追いかけている事に気が付いた。

「確かお前は・・・俺が転ばした店員と水をかぶった奴らか。」

そついった瞬間、取り巻きが笑い出した。

「ああ。そオだなア。」

「あはは。そうだねえ。」

そして私は貴方たちを許しません。
食べ物を粗末にしたのは許すことができません。

途中から優は表情をなくした。

「ぎやははははははは。
なめんじゃねえぞ。」

「返り討ちにしてやる。」

不良のリーダー格は掌に炎の球を作り出して、先頭のアクセラレータに投げつけた。

「ははははは。」

大したことねえな。

アクセラレータに着弾した瞬間……炎がリーダー格に向かって返ってきた。

「なつ。」

そのままリーダー格は燃えた。

その取り巻きがあわてて消しにかかった。

「さアて。問題です。」

「この学園都市で最強とは誰のことというでしょう？」

「も、もしかして……超能力者（レベル5）の頂点？」

不良の一人は恐怖に顔をゆがめながらアクセラレータに言う。

「せエかいでエす。

能力名は『アクセラレータ一方通行』

学園都市230万人の頂点7人のLV5の中の第一位だぜエ。」

「だ、だが、女たちを人質に取ったらどうなる？」

それを言う不良達が優と店員を、囲んだ。

そして優達を殴ってきた。

「俺がさせるとでも才思っている」「私を忘れないでほしいわね。」
のか？」

すると優達を囲んでいた不良は一気に崩れ落ちた。

「ああ？」

「え、『エレクトロマスター電撃使い』？」

アクセラレータと店員は驚いたここには『エレクトロマスター電撃使い』はいないはず
なのだ。

だが優の周りに電撃がまとわりついている。

「な、なめんなあー!!」

不良はろくに狙いもつけずに炎を飛ばしてくる。

アクセラレータは突然の電撃に驚いたが反射をといっていないので気にしていない。

その一発が優と店員に向かってきた。

「『、炎、、を物体に情報結合』」

優が早口で呟くと炎は物体化するまったく外見は変わっていないが・
・。

「店員さん打って。」

すると店員は鉄パイプを振りかぶって・・・打ちました!!
炎は上空に向かって飛んでいく。

「ほおむらあん。」

優はうきうきとした感じに言う。

「ほオむらアんだなア。」

アクセラレータも言う。

なんだか楽しそうだ。

「な!!」

残り一人となった不良のリーダー格は驚く。

「アクセラレータ。気絶させなさい。」

「あア。」

するとアクセラレータは捕らえられないスピードで近づき不良を殴る。

不良はそのまま吹き飛ばされて気絶した。

「どう？

すっきりした？」

優は店員に聞く。

「はい。」

店員の声はとても嬉しそうだ。

「くつくつく。」

そついやア優。

今さっきの電撃はアどうしたんだア。」

「え？

あああれ？

自分を、電撃使い、に情報結合したのよ。

そしたら電撃が使えるようになるのよ。」

これは優なりに見つけたこの『データオペレーション情報操作』の使い方だった。

「へエ。」

「なんだかそれって『ジュアルスキル多重能力』みたいですね。」

「いわれてみれば。」

確かに多重能力者に見えなくも無い。

「優はALV5じゃねエのかア？」

「ううん。」

私はLV3だよ。機械がはじき出した結果はね。」

「ぜってエ手ぬいだろオ？」

優は笑ってごまかした。

その後店員はファミレスから呼び出しがかかりいなくなった。

「ねえ今度会うときのためにアドレス交換しよう？」

優は自分の携帯を出しながらアクセラレータに聞く。

「あア。」

アクセラレータにとってももう一度あってもいいような気がしたので優と交換した。

不良さんにげてええええ（後書き）

アクセラレータ優しいです。

そして優に好意を持っていたりします。

忘れていた主人公設定

忘れていたのでここで主人公紹介をしたいと思います。

名前：上条 優かみじょう ゆう

年齢：原作時は中学一年生。

所属：柵川小学校・中学校。

口調：元は男だったため転生当初は男口調だったが

母親（上条詩菜）によって女言葉に矯正させられた。

容姿：黒髪黒目で髪は伸ばしており（詩菜の意向）腰までであるが、ポニーテールにしている。

身長は高くなく138cmである。

身長とかは関係なく容姿はキョン子（知らない奴はぐぐってくれ。）に良く似ている。

家族構成：父	上条 刀夜 かみじょう とつや
母	上条 詩菜 かみじょう しいな
兄	上条 当麻 かみじょう とつま

能力：情報操作データオペレーション

簡単に言うところとあらゆる情報を見て、操作することが出来る。

モデルは情報統合思念体の能力。
自身の情報を別の能力者に結合（変換）することによつ

て色々な能力を使うことが出来る。

未だに優は気がついていないが自分の演算能力を増やすように必要な情報を結合して

自分が『デュアルスキル多重能力』というように結合（変換）によって『デュアルスキル多重能力』になることが出来る。

その他：アクセラレータ一方通行との面識がありアクセラレータの携帯のアドレスを持つている。

いつのまにやらアクセラレータの『守りたいリスト』に入れられていたりする。

佐天と初春とのコンタクト

「今日からこの柵川小学校に通うことになった上条優です。
よろしくおねがいします。」

優は頭を下げた。

今日は優の柵川小学校3年生への転入の日である。

不良をふるぼっこしてから1週間がたっている。

その間に優はアクセラレータと一緒に遊びに行ったりしていた。
まだ先にこの学園都市に来ている兄（当麻）とはあっていない。

優はクラスを見渡してみる。

そこには・・・原作時よりも相当幼いが初春飾利と佐天涙子^{うちはる かぎり さてん}がいた。

優はクラスの担任がいうままに 初春限定パンツ捲り魔（佐天涙子）
の隣の自分の席に座って、鞆から教科書を取り出す。

そのまま授業に入った。

「『自分だけの現実』とは・・・」
パーソナルリアリティ

教師の授業を優は聞き流しながら授業のノートの端に絵を描いている。

その絵は最近薄くなってきた原作の記憶から引つ張り出してきたゲ
コ太だったりする。

だが絵も描き終えてしまつて特にすることもなく、窓の外を眺めた。
外には液晶ディスプレイの付けられた気球が飛んでいるし、
ゆっくり回り続けている風力発電機もある。

初めて学園都市に来た人なら一度は興味がそそられるものだろう。

（原作に参加するかどうか・・・
それとも原作キャラの友人として静かな生活を送るか・・・。
いやでもアクセラレータとも出会ってしまったし・・・
原作介入は当たり前か・・・。）

ヒューー

するとなにやら風切り音が聞こえてきたので

反射的に自分の周りに一方通行のマネをして反射をかけた。

その反射に飛んできたもの・・・チヨークが跳ね返されて飛ばしてきたであろう教師に向かって飛んでいった。

「え？」

返ってくるとは思っていなかった教師は自分の投げたチヨークの直撃を受けた。

「か、上条！！」

なんだか教師が言っている。

「はい。」

「なんでしょうか？」

「なにをしたんだ？」

「ただ、反射しただけですよ。」

教師は啞然とする。

反射といったら学園都市のLV5の第一位の『アクセラレータ一方通行』の能力の

一つなのだ。

周りの生徒達はそういうことを知らないので凄いとしか思っていない。

「その前に生徒にチョークを投げつけるのは間違いだと思うのですが？」

「上条が外を見ているからだ。」

そうして優と教師が口論をしていると授業終了の鐘がなった。今日はこの授業だけで終了だ。始業式の日なだけはある。

教師が教室から出て行くと生徒達が優の周りに集まってきた。

「ねえねえいまさっきのどうやったの？」

始めに横の席だった佐天が聞いてきた。

「ただ普通に能力を使っただけだよ。」

優は少し微笑みながら佐天に言うと、
なぜだか周りに集まってきていた男子どもが急に赤面をした。

（何？こんな年齢からそんな感情があるの？
最近の子はませてるねえ・・・）

優は客観的視点で見ている。

「ねえねえ何LVなの？」

「ただのLV3よ。
でもこれ以上あげたくない……。」

学園都市の上層部に目をつけられてしまうから。

佐天にはうらやましいような目で見られてしまったが、あげたくないのは事実だ。

「私なんて未だにLV0なんだ……。」

「へえ〜いいんじゃない？
私だってLV0が良かったわよ……。」

優は呟くように言った。

「え？
LV0が良かったって……。」

周りの生徒には聞こえてなかっただろうが一番近くにいた佐天には聞こえていたのだろう聞き返された。

この学園都市は能力LVによって頭のよさが決まってくる。
LVが上がれば優秀といわれちゃはやされるのだ。
だがこの学園都市で無能力者は約6割を占めている。

「だって友達にLVなんて関係ないのに……。」

これは原作の知識が言わせている。
無能力者は能力者を怖がっている。

能力者は無能力者を見下している。
それを乗り越えて友達になっている例は原作での初春と佐天だが現実にはそうはいかないのである。

この数日の間に優はアクセラレータに街を案内してもらっていた。
そのときに見たものは能力者が無能力者を見下し能力者が道を堂々と歩いているが

無能力者は道の端っこを歩いている。
そして路地裏に行くと能力者が無能力者を痛めつけかつあげしている現場によく出会った。

「能力なんて存在しないほうがいいのよ……。」

優は悲しい顔をする。

「じゃ、じゃあ私とお友達になる？えっと……上条さん。」

「はい。」

「私も、私も」

頭に花を乗せた子が優に近づいてきた。
周りの子はどんどん減っていつている。

「ええ。」

改めまして私の名前は上条優です。よろしくね。」

「私は佐天涙子。よろしく。」
そしてこの子が……。」

佐天の言葉を遮って、

「初春飾利です。」

「私のパンツをめくる対象です。」

初春は自分の名前をいい、佐天ははっきりといった。

「分かりました。」

佐天さんと佐天さんのパンツをめくる対象ですね。」

優はにこやかに佐天と初春に言った。

「ち、違います。」

初春は必死に優に言う。

「ははは。」

大丈夫ですって、ちゃんと分かっていますよ。
フラワーアレンジメントさん。」

優はあえてぼける。

「ち、違います!!」

私にはちゃんと初春飾利っていう名前があるんです。」

（うわっ。）

初春いじるの楽しい。）

優は楽しんでいた。

「分かっていますよ。
初春さん。」

「ち、ちがつ・・・いやいいんですそれで。」

「よし。ほんじゃあ遊びに行こう。」

「「おお〜。」」

やっぱりまだ佐天達も小学生なのだ、遊び盛りなのだった。

御坂美琴とのファーストコンタクト

小学5年生になりました。

優が学園都市に着てから早いもので2年がたちました。
そして、

「今日から、夏休みです。」

「あんだ、誰に向かって言ってるのよ？」

「いや、なんだか言わなくてはいけないような気がして……。」

口調から分かる人はいるだろうか……。

優の隣には近い将来『超電磁砲^{レールガン}』の異名を持ち、
学園都市230万人の第3位に君臨する御坂美琴^{みさか みこと}がいる。
こうなったのは数時間前に戻らなくてはならない。

優と佐天、初春は終業式が終わってファミレスで話していた。

小学5年生だけにいるのは学園都市の外では異常だが、この学園都市内では学生が人口の8割を占めるためこういう光景も不思議ではないのだ。

「そうだ。」

初春に優。今日さ面白い掲示板見つけたんだ。」

佐天は、優と初春に携帯のディスプレイを見せる。

「何ですか？」

「まだ都市伝説？」

初春は興味を持ち、優は佐天が毎回話題に持ってくるのは都市伝説が多いので聞いた。

「都市伝説は都市伝説なんだけど。

私も見たんだよ。」

「なにになに？」

優と初春は佐天が見せてくる携帯のディスプレイの画面に映し出されている掲示板を読む。

「『学園都市の土手で電撃が飛び回っている。』」

『学園都市の土手で砂鉄が回っている。』

『たまに大きな雷が落ちる。』

これが都市伝説？」

「でもコレは信憑性があるんだよ。

だって私この大きな雷が落ちるところ見たんだもん。

初春、一緒に見たよね。」

「え、ええ。」

（そんなに大きな雷ならなんで私見てないんだろう……。）

「ねえその時私なにしてた？」

「「寝てた。」」

その雷が落ちたのは授業中だったらしい。

そして優は授業中基本的に寝ている。

それでテストの結果が上の上なのは、前世の知識&原作知識のおかげであった。

だが優は基本的な設定は覚えているが時系列までは『とある魔術の禁書目録』や

『とある科学の超電磁砲』を覚えていない。

「それでその後私はその土手に行ってみたんだけど・・・だれもいなかったんだよ！！

おかしいと思わない？」

「何か証拠があるかも知れませんが、行ってみませんか？」

初春が提案するが・・・

「初春って今日予定あるとか言ってた？」

初春は今日の朝「予定があるんです。」って言っていた様な気がする。

「あつ。忘れてました。」

「そついえば何の予定があったの？」

「今日、風紀委員の説明会があるんですよ。」
ジャッジメント

初春は小学5年から風紀委員になりたいという希望を持っている。

「じゃあ私は初春に付いていこうかな？」

一応私は初春の保護者みたいな感じだし。」

「さ、佐天さん！！違います。」

なんだが初春が文句を言っているが佐天は華麗に無視をした。

「じゃあ私一人で土手に行つて来るわ。」

「手がかり見つけてねえ。私のためにも。」

「あはは。」

優と佐天、初春は別れた。

そして優がその土手に行くと・・・

急に電撃が飛んできた。

優はあわてて自分の前にアンチスキルシールドASSをつくりだした。

このASSは触れた異能の能力はなんでも打ち消してしまうものなのだ。

もっと簡単に言うと当麻の『イマジンプレイカー幻想殺し』を任意で壁状に作成しているのだ。

これぞ情報进行操作することによって出来る技なのであった。

「あ、あんた誰よ!!」

優が電撃の飛んできた方を見るとそこには茶髪の女の子がたっていた。

大体優の一歳年上ぐらいだろうか。

「えっと。

これはどういう状況？」

優が土手を見回すとそこにはあちこちにクレータと黒い砂の塊がある。

「れ、練習してただけよ!!」

少女が吼えるように言う。

「でもこの惨状はまずいんじゃない？」

「うっ。」

流石に悪いとも思っているのだろう。

「はあ仕方がない。

『閉鎖空間情報結合。

破損部分を再構成。』」

御坂美琴 side

最近私はこの土手でLVUPをめざして能力『電撃使い』エレクトロマスターの練習をしている。

私は未だにLV4である。

この土手で練習を始めてから数日がたっている。

「はあはあはあなんであの的に当たらないのよ!!」

私は土手の途中に置いた缶に向かって電撃を放っている。

だが電撃は周りの土を抉るだけで全然缶に当たらない。

途中土手の上まで大きくそれた電撃が通りかかった人にあた・・・
らなかった。

その人物は自分の前になにかしらの壁を作り出して私の電撃を防いだ。

いや無力化したわね。

「あ、あんた誰よ!!」

私の電撃を無力化した人物は私のいる土手を見て、

「えっと。

これはどういう状況？」

と聞いてきた。

「れ、練習してただけよ!!」

つい語尾を強めてしまった。

「でもこの惨状はまずいんじゃない？」

「うつ。」

私は言葉に詰まってしまった。

この土手は私の電撃や最近頑張っている砂鉄剣の影響で大きなクレータなどが数多く出来てしまっている。

掃除ロボがなんとか片付けをしてくれているが大きな穴は修復までに時間がかかる。

私にも環境を大切にすることぐらい分かっているわ。

「はあ仕方がない。

『閉鎖空間情報結合。

破損部分を再構成。』」

すると周りが薄暗くなり、いままで飛び交っていた電磁波などがなくなった。

土手を囲むようにドーム状のなにかで覆われていることが分かるが、周りの反応がないことから

周りからは何も見えていないのだろう。

そして見る見るうちに私の作ったクレータが光の粒子で埋まり、粒子の光が収まると

きれいな芝生が出来た。

私が使って積み重ねていた砂鉄も一旦粒子になり、穴に埋まってく。

「きれい。」

光の粒子が動くさまは物凄くきれいであった。

御坂美琴 side out

そして御坂美琴は優に能力は何かなどと矢継ぎ早に聞いている。

優はつつい現実逃避をしたところで冒頭の文章にもどるのだった。

（ああもう鬱陶しい・・・。）

優はだんだん聞きよってくる美琴が鬱陶しくなってきた。

（、、テレポーター空間移動者、自分に情報結合。）

シュン

空間移動で逃げた。

優は自分の寮から近くのある屋上のフェンスの上に降り立った。
美琴から空間移動で逃げ切ってきたのだった。

（ふう。逃げきつ・・・）

ゴウン

予期せずに優の身体を強風が襲った。

「キ、キャーーーーー。」

優は一息ついていたため瞬時に空間移動者の能力を使うことが出来なかった。

そのまま優の身体は地面に叩きつけられようとした。

「へブツ。」

何かを優は下敷きにして落ちてしまったようだ。

優の下ではツンツン頭の少年が伸びていた。

「え？

げっ当麻……。」

優の小さな呟きは伸びている当麻には聞こえなかった。

兄妹にもかかわらず優と当麻は学園都市で未だに会ったことが無かったのだった。

理由としては優が当麻のいそうなところに行くとその直前に当麻は不幸なこと（不良に追いかけられたり、犬に追いかけられたし）が起こつて遠くに行くのだった。

そのまま放置してもまずいと思うが当麻はテレポートさせることが『イマジンプレイカー 幻想殺し』のせいで、出来ないのだった。

しかたなく、優は空間移動者の情報を解除し、念動力者の情報を結合して

対象を当麻の身体として当麻全体を浮かせながら自分の寮に当麻を連れ帰ったのだった。

当麻は一瞬浮くことには浮くが『イマジンプレイカー 幻想殺し』の能力で能力を消され

るので

演算を絶え間なくしなくてはいけないので疲れてしまった・・・。

「ご飯をたかる兄

「うつ。ここは……。」

当麻は見知らぬ部屋のベッドの上で目が覚めた。

その部屋は自分が住んでいる寮に比べたら大きく

部屋のもが綺麗に片付けられている。

タンスの上には大きな熊のぬいぐるみが置かれている。

このぬいぐるみは優の誕生日に佐天と初春が送ってくれたものだ。

それぐらいだがそれだけでこの部屋が女の子の部屋だということが分かる。

それ以外はいたってシンプルな家具しかない。

ガチャ。

「あっお兄ちゃん起きた？」

誰かが入ってきた。

当麻が扉のほうを見てみるとそこには水枕を持った

ずいぶん変わっているが小さい頃の面影が残っている、優が立っていた。

「ゆ、優？」

当麻がこの学園都市にいるはずのない優を見て驚いている。

「あはは。

驚くよね。

だって私がこの学園都市にいるんだし。」

「え？あ、あ？
な、なんで？」

当麻は優が学園都市に來ていることを聞いていない。

優は父（刀夜）や母（詩菜）には当麻に学園都市に行くことは自分で言うから言わなくていい。

と言っており、両親とも当麻に伝えていなかったし、優も教えていなかった。

当麻の不幸を遠くから見て助けに行つてそこで初対面を果たすつもりだったのに、

自分が当麻の不幸の原因となつてしまった。

まさかビルの屋上から風にあおられて当麻の上に落ちてしまうとは思つていなかった。

「実はもう2年前から学園都市にいたけどな。」

「な、なんで教えてくれなかったんだよ。」

「だって街端であつたりしたらおもしろそうじゃん。」

あえて本当のことを言わない。

「そんな理由で俺に会わなかっただなんて……。」

「あはは。

それにしても久しぶりだね。

8年ぶり？」

確か優が3歳の時に学園都市に來たはずなので現在優は11歳　　つ

まり8年ぶりなのだ。

それまで一度も会わなかったが年賀状などで写真つきで送ってきたりしたので顔は知っていた。

「ああそうだな。

優も大きくなつて。」

「そうだよ。

私も大きくなるよ。

そうだ。お兄ちゃん夜ご飯食べて帰る？」

当麻が気絶をしている間にお昼ご飯の時間は過ぎてしまっていた。もう夜ご飯の時間が近くなつてきている。

「食べさせてくれるのか？」

今月はもう上条さん宅にはお金が無いのです。」

「いいよ。

それに私も上条だからね？」

お金がないってどうしたの？」

多分当麻は人助けに服でも破いて新たに服を買ったからお金がないのだろうか？

まだ暴飲暴食シスターさんは当麻の寮に来ていないはずだから食費にはあまりかからないはずである。

まだ月末ではない7月の中半であるしお金にはあまり困らないはずである。

「いや……。

布団干そうとしたら、机の角に足打ちつけてよろけてしまって携帯

を踏み碎いて

銀行のキャッシュカードを踏み碎いて・・・財布にあるお金も携帯を買いなおしたのでなくなったのです。はい。」

あいかわらずの当麻は不幸体質であつた。

「はぁ・・・キャッシュカードの再発行には時間がかかるし、どうせならカードの再発行までここに食べに来る？」

どうせ兄妹だし変な気は起こさないだろう。

「いいのか!？」

「別にいいよ。」

「でも俺が食べにきてここの食費は・・・。」

当麻は自分が食べに来ることとここの食費は大丈夫なのか聞いてきた。

「ああ。安心して私LV3だから学園都市から奨学金もらえてるし。」

この学園都市の学生は奨学金や補助金などで生計を立てている。能力が高いほど奨学金の金額が多くなってくる。

優が以前アクセラレータに聞いた奨学金の金額はうん百万と聞いた。それが学園都市の第一位の奨学金なのだ。

LV3の奨学金でもうん十万はあるので一人分食費が増えた分は問題ない。

「へえ優ってLV3なのか・・・。」

俺なんかLV0だから全然奨学金もらえないし・・・。」

「いいじゃん・・・。」

『イマジンプレイカー
幻想殺し』があるんだから。」

優は呟くように言った。

「ああ。でも能力判定されないからなあ・・・
ってなんで優が幻想殺しを知っているんだ？
俺は言っていないはずなんだが・・・？」

確かに当麻は優に自分が『イマジンプレイカー
幻想殺し』を持っていることを言ったこ
とはない。

優は原作知識で言ってしまったのだ。

「えっと。」

そ、それは・・・。」

優は言葉に詰まってしまった。

「まあいいか。」

噂かなんかで聞いたんだろ？」

「え？あうん。そうそう噂で聞いたんだよ。」

優は苦し紛れに言った。

「そつだよな。」

当麻はそれで納得したようだ。

そして優は夕食を作り Dining キッチンに入る。

当麻は食卓についてテレビを見ている。

そこにはぬいぐるみなどまったく女の子らしさというものがない。趣味がどうにも前世と一緒にできてきているのは仕方の無いことだと思う。

一応椅子は佐天や初春、アクセラレータがたまに食べにくるので4つおいてあるし、結構部屋は広い。

食卓とは別にその部屋には2人掛けのソファが二つ置いてありそのソファが囲むようにテレビが置かれている。

テレビの横に学園都市で出た最新型ゲーム機が置かれている。

もう一つの部屋は私室としてデスクトップパソコンなどの優の趣味のものが置かれている部屋だったりする。

この『柵川学校女子第二寮』は柵川小学校・中学校での高能力者が住んでいる。

優はLV3の中でも結構ランキングの高い能力者なのだ。

それに柵川小学校・中学校は能力開発には力を注いでいるがそこまで結果の出ていない学校なので

LV3あれば十分高能力者である。

なので学校の意思で高能力者には広い寮が与えられているのだった。そして優には家族が4人住んでも問題ないような部屋が与えられていたのだった。

「さて、おいしいものでもつくろうかな。」

優はエプロンをつける。

（なにつくろうかな・・・。

そうだ！！

中華料理でも作ろう。

チャーハンと餃子でも作ろうかな？）

優は冷蔵庫の中身を見ながらレシピを思い出す。

そのまま手際よく料理を始めた。

その辺の学生は優が学園都市にきた初日のようにファミレスやコンビニの出来物にほとんどの食事を頼っている。

無能力者でもぎりぎりだがそのくらいの生活は出来るだけのお金をもらえるのだった。

その分LV3の奨学金をもらえる優だがつつい料理をしてしまうのだ。

学園都市に来るまで家では料理をしていたし、前世でも料理をしていたので食べにいくという習慣がなかったのだ。

人より少々だがレシピの数も前世の記憶が多い。

優の手は段々スピードが出てくる。

餃子の皮を作って餃子を作る。

そして餃子を焼いた後軽くフライパンを洗ってチャーハンを作る。

一つのフライパンを使い回しするのは2つもフライパンを洗うのが面倒だからだ。

「完成。」

「うんめええええ。」

優の部屋に当麻の声が響き渡る。
当たり前だろう。

チャーハンと餃子は、優が前世から料理の中でも極めた料理なのだった。

「いつでも食べに来ていいよ。
お兄ちゃん。」

優の部屋にはアクセラレータがよくご飯を食べに来るので当麻がいつ来ても問題は無い。
いつも夕飯は量を多めに作るのでだれが食べに来ても問題はない。
あまったら次の日の学校の弁当にするから……。

「ありがとうな。
助かったよ。」

優。それじゃあ明日もくるわ。」

「うん。
気をつけてね。」

当麻は帰っていった。

妹にご飯をたかりに来る兄……一般世間はどうみるだろうか？

美琴のLVUP

「いたいた。

見つけたわよ!!」

優が買い物をした帰りについて先日聞いた声が優を呼び止めた。

「え?もしかして・・・。」

優が呟きながら振り返るとそこには先日みた、御坂美琴がそこにいた。

「あんた。私と勝負しなさい!!」

美琴はまったく優の都合を聞かずに勝負しろといってきた。

「いやよ。

練習には付き合ってあげるけど勝負はしないわよ?」

先日のいきなり飛んできた電撃はどう見積もってもLV4ぐらいの威力しかなかったのだ。

いまは美琴がLV1からLV5にあがるまでの途中なのだろう。

優は勝負はしたくないし、どうせなら美琴がLVUPするのを見てみたい。

「そうじゃなくて勝負しなさい!!」

「そんなんじゃ私には勝てないわよ?」

優はあえて美琴を挑発してみる。

「やってみないと分からないじゃない!!
だから私と勝負しなさい。」

やっぱり勝負の方におおってしまったようだ。

「はぁ・・・。」

仕方ないか・・・。

勝負してあげるわよ。

でもその前に名前を覚えてくれない？

私の名前は上条優ね。」

いままで優は原作知識として御坂美琴をしっていたが、
いまだに本人の口から自己紹介をしていなかった。

「私の名前は、御坂^{みさか}美琴^{みこと}よ。」

そして優と美琴は、先日2人が出会った土手に来た。

「とりあえず風紀委員^{ジャッジメント}と警備員^{アンチスキル}が来たらやばいから。

『閉鎖空間情報結合。』」

すると土手は別の世界になる。

学園都市中に飛び回る電磁波はまったく入ってこず、周りからは土手には誰もいないように見える。

地形などがまったく一緒な異世界にきたとでも考えたらいいだろう。
この閉鎖空間は優が任意で中に入れる人物を選ぶことが出来る。

「こ、これは何をしたのよ？」

美琴があわてたように聞いてくる。

「隔離したのよ。」

「ここならいくら暴れても問題ないから。」

「なっ。」

もちろんこんな能力を持つ人は優以外、学園都市にいない。

「それじゃあ始めようか。」

優はちよつとけだるそうな顔をして美琴から空間転移テレポートで離れた。

「行くわよ!!」

美琴は今の自分が出せる最大出力で電撃を優に向けて飛ばした。ちよつと狙いの優から外れてしまった。だがまだあたる軌道である。

「『ASS情報結合。』」

優は呟くだけでその電撃を無効化した。

「なんで防ぐのよ!!」

「防がなきゃ死んじゃうでしょ!!」

今は優は『電撃使い』エレクトロマスターの能力を情報結合していないので電撃は致命傷だ。

「次はこっちからいくよ？」

美琴は構える。

「『、光剣、情報結合。』」

すると優の手に光が集まり、その光の剣、某ビームサーベルに見える。

「な、なによ。それ！！」

美琴は急いで砂鉄剣を作り出し優のおろす光剣に対抗する。

だがうまく磁場を操ることが出来ずにもろい砂鉄剣になってしまい、簡単に優の光剣に断ち切られてしまう。

それだけでなく光剣に触れた砂鉄は溶けていく。

その光剣は美琴の目の前で紙一重でとまるが、少し髪が焼けてしまった。

「降参する？」

優は美琴に降参するように言った。

美琴は普段なら降参しないところだが、ここまで圧倒的なので自分は勝つことが出来ないと初めて諦めてしまった。

「こ、降参よ。」

だからその剣を降ろしてくれない？」

いまだに光剣は美琴の髪を少しづつ焼いている。
優は右手に持った光剣を分散させた。

「おつかれさま。」

髪焼いちやってごめんなさいね。
今治すからね。

『再構成情報結合。』

すると美琴の焼けた髪の毛が戦闘前に戻った。

「な、なにをしたのよ？」

「ただ情報をつなげただけだよ。」

「よく分からないんだけど？」

優の能力は説明のしにくいものなのだ。

「えっと・・・、すべてのものを操れるでいいかな・・・。」

「なによそれ・・・。」

「見たほうが分かりやすいかな？」

（『、空間転移、情報結合。』）

シュン。

優は美琴から10mはなれたところにテレポートした。

「え？」

（情報結合解除。

『、電撃使い、情報結合。』）

優は腕を前に出して腕と腕の間に電撃をバチバチさせた。

「うそ・・・テレポ―トにエレクトロマスター？
デュアルスキル
もしかして多重能力者？」

「違う違う。」

私は普通の能力者だよ。

データオペレーション
『情報操作』だよ。」

「聞いたこと無いわね。」

どんな情報でも操作できるのよね？

私の能力値も操作できるの？」

「やったことはないから分からないけど出来る思う。
でもお勧めはしないよ？」

能力は自分であげなくちゃ全く嬉しくないでしょ？」

「確かにね。」

「じゃあひとつ教えてあげようか。」

電撃を飛ばすときの演算式、間違えてるよ。」

優は電撃が飛んできたときに電撃の電流値や電圧そして美琴の演算

式を能力を使って見ていた。

その演算式は間違っており、この演算式のまま演算して電撃を飛ばしたら命中率も下がってしまう。

「え？

嘘っ？というかなんで演算式が分かるのよ！！」

「だってそれも私の能力なんだもん。」

しばらく美琴と演算式を考え、実演をし、分かれようとしたところで美琴が提案をした。

「上条さん。」

美琴は優が年下だといくら言っても上条さんと言ってきたので優はそのままにしている。

「なに？」

「上条さんの能力って何の情報でも操れるんですよね？」

「そうだよ？」

だから私は自分の能力情報をいじってテレポーターにもなれるしエレクトロマスターにもなれるよ。」

「多重能力は演算能力が足りないから多重能力者になれないんだよ

ね？」

「はい。」

「ということは情報操作で演算能力を上げてからだったら多重能力者になれるんじゃない？」

「・・・あつ。」

今まで優には気が付かなかった事だった。

これだったら多重能力者になることができる。

これによって、優がこれから使う能力がほとんど多重能力になるのだった。

多重能力になったとしても、使うのは空間^{テレポート}転移ぐらいだったが・・・。

2人揃うと事件体質。

優は無事に小学6年生になった。
時間の進みが早いのは特に目立った事がないから飛ばしているだけである。

「おい。
アクセラレーター。」

優は手を振りながら駅前で立っている、白髪の少年アクセラレーターに向かって行く。

そしてアクセラレーターの背中に飛び付く。
普通はこんな事は出来ない。
それはアクセラレーターが常時張っている『反射』ではじかれてしまうからだ。

しかし、優なら身体全体にASSを張ってからアクセラレーターに飛び付くのでアクセラレーターの反射を無能力化して飛び付くのである。

「おい。おい。
そんなことできンのおめエだけだぜ。」

「能力をほいほい無力化できるのがいたら困るわ。」
現在能力を無力化出来るのは、優と当麻ぐらいしかいないだろう。

「それより行くぞオ。」

今日は、アクセラレータと水族館に行くのだ。

水族館が開店するのと優が6年生にあがったのを記念して、アクセラレータが誘って来たのだ。

そういえば優とアクセラレータが出会ってから3年が経っている。だが二人は付き合っている訳ではない。

アクセラレータは付き合ってもいいが――こっち側（学園都市の裏）に来て欲しくない。

優は未だに前世の男の感覚があるので恋愛感覚というのがくるってしまっている。

優とアクセラレータは電車に乗って水族館に向かっていく。

「あっ上条さん。」

「やっほー上条さん。」

昨日聞いた声が聞こえてきたのでその方向を見てみると佐天と初春がいた。

「あれ？」

2人とももしかして新しく出来た水族館行くんじゃない？」

「そうだよー。」

「そうですよ。」

もしかして上条さんもですか？」

「はい。」

ところで今日は初春は風紀委員ジャッジメントの勉強は大丈夫なのですか？」

初春は今はジャッジメントの研修を受けている。

ジャッジメント風紀委員になるには、

九枚の契約書にサインして、十三種の適正試験と4ヶ月に及ぶ研修を突破しなければならない。

初春は契約書にサインは終ったが今は十三種の適正試験の勉強中なのだ。

（多分初春は、一点突破なんだろうなあ・・・。）
もちろん情報分野の一点突破だ。

「もしかして横にいるのは優の彼氏かな？」

佐天は優の横にいるアクセラレータを見ながら言う。

「彼氏がゝそんな者ではないです。」

「ああ。ちげエな。」

だが佐天は食いついてくる。

優ばかりに来るので優は困ってしまっている。

「アクセラレータ。たすけて。」

「すまねエ。無理だ。」

最後の希望の初春に視線を向けると、

「え？恋人じゃないんですか？」という顔をしていて優の視線に気がついていない。

そのまま電車は水族館に向かって来る。

「お二人ともお幸せに。」

佐天は別れ際にいつてきたのでちよつと気まずくなってしまったが
気を取り直して優とアクセラレータは水族館に入っていた。

優ははぐれないように反射を手だけ消したアクセラレータと手を繋いでいる。

それはさながら恋人のようだった。

最もアクセラレータが優を連れているので『幼女愛玩者^{ロリコン}』に見えて
しまうのだが…。

しかし何故かこの二人の行く所には事件が付きまとう。

「動くな!!」

水族館に武装した集団が侵入してきた。

しかも優達が昼食を食べていたレストランにだ。

「はア。いつ俺は事件体質になったんだア？」

「わからない。」

一人の時は事件といった物には出会わないのだが二人の時はよく出会っている。

「ヒヤッハー。」

俺達には武器があるんだ！！
能力者なんて怖くねえぜ。」

銃を乱射する。

なんだか荒っぽいが使っている銃は学園都市製の最新装備だし、服装は駆動鎧だ。
バードスーツ

それに動きがなんだか軍隊っぽい。

「もしかしてあれはこの軍隊なのかア。」

アクセラレータの指摘は間違っていない。

優が能力を使って携帯のネットを通して学園都市の上層部の情報を盗みみたら、最新装備をそろえた部隊が反乱を起こして能力者狩りをしているという情報があった。

（無力化させないと誰か殺させそうだなあ…。）

今もレストランにいて優共々人質になっている人の真横を銃弾が飛んで行く。

いつ被弾してもおかしくは無い。
なぜ能力者狩りをしているかは分からないが行動不能にはやくしな

いと危ない。

アクセラレータは思い切り知らん振りをしているし……。

「アンチスキル
警備員です。」

抵抗せずにおとなしく投降しなさい。」

意外と^{アンチスキル}警備員の到着が早い。

きつと上層部から言われたのだろう。

「けっ教師の集まりなんて怖くねえぜ!!」

犯人たち、軍隊は警備員にむかつて銃を乱射する。
それによって何人かの警備員が倒れる。

（これ以上被害は広げたくないし……。

多分私が動けばアクセラレータも動いてくれるかな？

、演算能力、情報連結。

そして、多重能力者、情報連結。）

優はこれで多重能力者になった。

（さあとりあえず戦力外の一般客を逃がさなきゃ……。）

優はそう思うと同時に『^{ムーブメント}座標移動』を使う。

この能力は結標淡希の持つレベル4の空間移動系能力であり、
接触すら必要なく能力を発動できるので離れた一般客も逃がす。

『^{テレポーター}転移能力者』は転移させることが出来なかったが仕方がない……。

自分で安全なところに移動してもらおう。

「な!!」

テレポーターでもいるのか!!」

男どもが驚いている。

アクセラレータは優がやったことが分かっているのか優を見ている。

「アクセラレータ手伝って。

でも殺しはやめてね。」

「チツ。めんでエな。」

そういつても手伝ってくれるアクセラレータは優しいのだろう。

「さあ貴方たちは私の休暇の邪魔をしてくれたのを分かっているの
でしょうね?」

「ったくよオ。

俺の休暇を邪魔してくれてエ分かってンだろうなア?」

優とアクセラレータは怒気を全く隠さずに言う。

「え?」

その怒気に含まれた殺気に気が付いた男たちは微妙に引くが、
自分の装備を確認して優とアクセラレータを見据えた。

まず男たちの銃が火を噴いた。

ト
ト
ト
ト
ト
ト
ト
ト

だがそれは2人には全く関係のないことだった。
2人して能力を使い銃弾を無効化する。

アクセラレータはいつも通り『反射』でベクトルを操作して反射の方向を変え天井に銃弾を反射する。

優はバリアをはる。

このバリアに触れたものはすべて光の粒子に分解される。

「なに？」

銃弾が効かないなんて・・・。

もしかして・・・『アクセラレータ一方通行』？」

男たちは銃弾が効かない相手に見覚えがあつたのだろうか。

「だ、だつたらあつちの少女はなんなんだ？」

あつちが銃弾を無効化してるぞ！！」

男たちはあわてる。

「『外部流出系情報すべて遮断。』」

優はいまからすることを色々な人に見られたくないのですべての流出情報を遮断する。

別に物を操作するだけではなくこついった映像や音声情報まで操れるのだ。

レストラン全体には男たちによって外部の視線が入らないようにされている。

「こつちから行きます。」

すると優は電気をバチバチと放電する。

「『電撃使い』？
エレクトロマスター

だ、だがこの駆動鎧には電撃対策が……。』
バワードスーツ

「『対象、駆動鎧、情報連結解除。』
バワードスーツ

すると駆動鎧は光の粒子になって消え去り
男たちはその下に着ていた服だけになった。
そして優は男たちに電撃を放ち、気絶させた。

「はあ。アクセラレータ逃げよう。
アンチスキル
多分、警備員に色々聞かれて面倒だから。』

優はテレポートの準備をしながら言う。

「ああ。

てか俺いらなかったじゃねエか。』

「保険だよ。保険。』

そしてアクセラレータは常時展開の反射を切って優と手をつないで
テレポートをした。

優とアクセラレータは水族館のイルカショーの所に現れた。

「はい。到着。」

さきほどの事件があつたので今はイルカショーを中止されている。

「帰るかア。」

特にもう何もすることが無いので帰ることにする。

佐天と初春はこの混乱で帰ってしまったようだ。

銀行は定休日なら郵便局だ。(前書き)

優はもうほとんど原作を覚えていません。

銀行は定休日なら郵便局だ。

「さあて、たまにはご飯でも食べに行こうかな。」

優は久しぶりの外食をしようと思い。

携帯と財布だけを持ってファミレスに行こうと考えていた。
だが……。

「あっお金が全然ない……。」

優の財布の中身は全然入っていなかった。

最近の食品を買う時はクレジットカードを使っているので
普通の紙幣や硬貨が無かったのだ。

ファミレスに行くより先に銀行に行かなくてはいけないことになったので、

優は銀行に向かっていつている。

（何食べようかな？

ちよっとあの 苦瓜と蝸牛の地獄ラザニア（ゴーヤとエスカルゴの
じごくラザニア）って奴でも食べてみようか……。）

優は銀行にいくがその銀行は定休日であった。

（嘘……。

いやいや。そういえばあの郵便局にこの銀行のATMが置かれてい
たような……。）

そのまま優は銀行を諦め郵便局に向かっていく。

そして優がその郵便局のＡＴＭでお金を引き出した後に学校で同じクラスの初春が郵便局に入ってきた。

「やほ。初春。」

「あつ上条さん。」

今日は初春は中学進学への書類を提出しにきたようだ。
優は一週間前にだし終っている。

「あら初春じゃありませんの？」

後ろから声が聞こえた。

「あつ白井さん。」

優が振り向くとそこには近い将来百合予備軍(?)の白井黒子しろいぐろこがいた。

初春と白井が話している。

「同い年でしたの・・・。」

白井の呟きが優にも聞こえた。

「でしょ。」

初春って幼く見えるしね。」

「か、上条さん!!」

「そうですねえ。実は私もてつきり2、3歳くらいしただと・・・」

「し、白井さんまでえ。」

初春が泣きそうだ。

「ところで貴方のお名前は？」

「え？あつ私？上条優です。」

「私、白井黒子といますの。」

「ところで白井さんはどこの中学にいくか決まったんですか？」

「常盤台中学というところに・・・。」

すると初春がもの凄く目をつるつるさせながら白井を見ている。
そのまま初春は常盤台中学の理想を語りだす。

「実際はそんなきれいことばかりではないようですわよ。
世間知らずの金持ちに在校生全員がLV3以上の能力者。
自分のことを特別な人間だと思っている方たちが多く集まっている
とか・・・。」

「はあ。」

「なかでも。超電磁砲などと呼ばれるLV5がいるらしいのですが。
きつと高慢ちきでいけつかない性悪女にきまってますわ。」

白井が断定する。

（きつと美琴のことだなあ。）

この前『LV5になりました』ってメールがきたし……）

優と美琴はいまだに関係を持っている。

始めは美琴が優に演算式などを教えてもらう教師と生徒のような関係だったのが

今では下の名前で呼び合う仲であるし、一緒にゲーセンに遊びに行ったり映画を見に行ったりと普通の友達のようになっている。

「知らない人のことよくそこまでいえますね。」

「そういえばあなた郵便局に何を……。」

「どうしました？」

「ちよつと失礼。」

白井は初春と優から離れていく。

そしてついさつき入ってきた男を見ている女性と話している。

優と初春にはその話の内容は聞き取れなかったが、なんだか危険な状況ということが分かる。

「もしかして……。」

優は、『クリアボーイアンス透視能力』を使ってその男を見る。

優は最近自分自身にずっと多重能力を情報結合しているのでいつでもどんな能力でも使うことが出来る。

男の鞆の中に縄が、ジャンバーのポケットに拳銃が入っていた。

優は白井と話していた女性を見ると、女性は受付で警備員アンチスキルを呼ぶように言っている様に思う。

すると男は銃を取り出し、発砲した。

（なんだろう・・・。）

この発砲音になれてしまっている私は・・・。）

それは事件に会いすぎているからだと思っただろう。

男はなんだか震えるように周りの従業員や客に動かないように言う。

優は男を気絶させようと走り出すがその横を別の影が通り抜ける。

見てみると先ほどの影・・・白井が、男の足をけったり払ったりして男の体勢を崩した。

その影響か拳銃は受付のしたまで転がっていく。

優はその拳銃に近づき拳銃の前で初春の叫びを聞き振り返る。

そこには二人目の男にナイフを突きつけられている初春がいた。

（ちっ仲間がいた。）

「初春！！」

白井は叫ぶ。

「あれ？お前の知り合いだったのか。」

こりゃ好都合。

おっと動くなよ。

シャッジメント
お前風紀委員か？

ジャッジメントが人質見捨てるわけねえよな。
ましてや自分の知り合いを。」

男は白井に向かっていい。

白井とまだ受付にいた女性は身構える。

すると警報がなり、郵便局のシャッターが下ろされる。

そして優の近くの机の下から警備ロボが動き出した。

「セキリティー信号ヲ受信シマシタ。

侵入者ヲ排除シマス。

床ニ伏セテクダサイ。」

そして男はナイフを持っていない手をポケットに手をつ突っ込んでなにか身構える。

「警告完了。

実行シマス。」

そして警備ロボが走りだし、白井もその後ろをついていく。

「あつ！！」

女性が叫ぶが途中にいた優が白井の腕をつかんで引き寄せる。

そして女性がその2人を守るように飛び出してくる。

そのまま優と白井、女性は吹き飛ばされた。

「いったいなにが・・・。
はっ先輩！！！」

「いたたた。
ん？」

「手のうちが分からない間は突入しない。
覚えておきなさい。」

女性は白井に向かって言い、意識を失った。

「おい。」

いつの間にか近くに来ていた男によってジャツジメントである白井は顔をけられて飛ばされた。

すぐに優にも男の足が飛んでくるが優はいままで巻き込まれた事件で身に着けた身体能力でよけた。

そして初春に手を伸ばすが男に初春がひきつけられてその手が空を切ってしまう。

優は仕方なしに自分だけ予定のレポートをする。

「俺がその奴みたいにいくとも思っていたのかよ？」

男は白井の足を踏みつける。

初春が白井に近づこうとするが男に手を引き上げられて近づけずにいる。

白井が初春に手を伸ばしていくが男に手をけられる。

だが白井は諦めずに初春の足首をつかみ・・・

「助けて見せますの。」

そついい、初春を外へテレポートさせた。

「白井さん。白井さん!!」

初春がシャッターを叩きながら言ってくる。

（あれ？初春。私のこと忘れてない？）

「テレポートだと？
なめやがって。」

初春が外から白井も外に来るように言うが
白井は呟くように自分自身はまだテレポートさせれないことを言う。

また白井はけられる。

初春が外で助けを求めているが今はそんなことはいい。
優達がいる中が大事なのだ。

「なにを考えてるか当ててやろうか？」

「へ？」

「警報がなつてだいぶ・・・」

優はそこから男の会話を聞かないようにした。

そして男の手から鉄球が投げられガラスとシャッターを破壊する。
男は能力の説明を始める。

数発なげられてシャッターは見るも無残に壊された。
そして男は白井にATMから金を取り出すように言う。

「そうですね。・・・私、ぜえったいにお断りですの。」

「仲間になる？」

あいにくと郵便局をねらうようなちんけなコソ泥はタイプじゃありませんの。

それに私、もう心に決めてますの。

自分の信じた正義は決して曲げないと。」

「白井さん。」

いいこというねえ。」

優が急に口を挟んだ。

「なんだ？」

てめえ。」

「いやちよつと頭にきちゃってね。」

あんだ、白井さんの顔けつたでしょ？」

優は言葉に周りの気温を数度下げするような怒気を含ませながら言う。

「ああ。それがどうした。」

男はそれに気が付かないのか軽い調子で言う。

「女の子には顔が一番重要なんだよ！！」

それにてめえみてえなくずに傷付けられたらなあ。
こっちも黙って見てらんねえんだよ!!」

つつい男の口調に戻ってしまっているが優は気が付いていない。
優はそのまま男に向かってゆっくりと歩く。

男は今更空気を感じとったのかあわてて鉄球を投げってくる。

「そんな攻撃私に効くとも?」

優は手を前に出し向かってくる鉄球に向かって炎をだし、鉄球を溶解させた。

別に情報連結を解除してもいいのだが、あえて能力を見せ付けた。

「なつ。」

「この『絶対等速』イコールスピードはその物質が壊れるか能力を切るまで永遠に持続する。

そしておめえは能力を切ることはないよなあ?

だったら物質を壊すしかない。

だから溶解した。

どうした?もうこないのか?まあ来てもまた溶かすだけなんだがなあ。
」

男は鉄球を打ち出してこない。

また溶解されるのが目に見えているからだろう。

そして白井を人質にしようと、白井に近づくが、

「させるとでも?」

優は男の頭上にテレポートして全体重の乗ったドロップキックを食

らわした。

「へ？

パイロキネシス

『発火能力』に『空間転移』テレポート ですか？

デュアルスキル

も、もしかして『多重能力者』！！」

「くっそ。なめてんじゃねえぞ！！」

優の体重が軽かったのがいけなかったのか男は気絶していなかった。すると男がシャッターにあけたところから電撃が飛んできて男に当たり男を感電させて気絶させた。

優はその電撃が飛んできたところから立ち去る一人の茶髪の女の子を見た。

「うわあああああ。」

優は嘆いている。

自分が男口調になってしまっていたことに気がついて嘆いているのだ。

もちろん人前で『多重能力』を使ったのもあるのだが、割合的には男口調8割多重能力2割である。

ジャッジメント

アンチスキル

この後、風紀委員や警備員の事情聴取があるのだが……。

（めんどろ・・・。）

優は白井に自分が多重能力者だというのを言わないように頼んであるから聴取では聞かれないだろうが、犯人を制圧したときの仕方とかを詳しく聞かれそうでめんどろである。

「その人よろしくおねがいします。」

（仕方が無いなあ・・・。）

自分の能力を使ったとしても言うておこうか・・・。）

優が事情聴取を受けて終わるとそこには初春と白井がいた。

「申し訳ありませんでした。」

優と出会った瞬間白井は優に謝ってきた。

「え？どうしたの？」

優は急に謝られたのであせっている。

「私が先走って行動したばかりに・・・。」

優は白井の言葉をせいする。

「じゃあ今回で学んだことってある？」

「え。ええ。」

「じゃあそれを教訓に次頑張ってみようか？」

「はいですの。」

白井は元気に言う。

「じゃあご褒美に今回の怪我を全て治して差し上げよう。
『対象「待つてくださいですの。」』え？」

「今回の傷は私の力不足で付いた物、これは教訓として私自身でちゃんと治しますの。」

「そう？じゃあ痛みがひいても傷が残ってたなら初春を通じてでも私を呼んでね？
いつでもきれいに治してあげるから。」

「はいですの。」

こうして優と白井黒子は出会ったのだった。

甘いものは大好きです。(前書き)

短いですがどうぞよろしくお願いします。

甘いものは大好きです。

b u b b u b b u b u

授業が終わって数分教室で誰かの携帯電話のバイブレーションが机ごと震わせているが誰も気にした様子がない。

自分達が小学生の頃から中学生になって今まで学校がある毎日見ている光景であるからだ。

このバイブレーションは一人の髪の毛をポニーテールにして机に突っ伏して寝ている少女の机から聞こえて来る。

「ん。

ふわぁゝあ。」

少女：優は腕を天に向けて背伸びをする。

「上条さんおはようございます。」

この甘ったるい声は初春。

「上条さん。おっはよっおゝ。」

この元気な声は佐天。

「おはよう。

じゃあ帰ろつか?」

優と初春、佐天は毎日一緒に寮に帰る。

寮自体はこの三人は別々なのだが寮のある方向は同じだ。

「それで数学の先生がさあ…。」

佐天が優に話してそれに初春が付け足したりする。

「それにしても、なんで授業中は基本寝ている上条さんはそんなに成績がいいのかなあ。」

佐天が優に嘆くように言ってくる。

「あはは。

ちゃんと能力開発カリキュラムは起きてます。」

（前世の記憶だなんていえない…。）

優は前世の記憶で一般教養はあるが能力開発の授業はしっかりと起きている。

小学生の時は原作知識でどうにかなっていたが…。

「そうだ。

二人ともケーキ作らない？」

佐天が提案してきた。

「いいけど。

なんで急に？」

「ちょっと前にケーキの焼き方とか調べててね。私達でも出来そうだったからやってみたくて。」

ようは試して作って見たいということらしい。

「ところでどこでやるのですか？」

佐天は優の方を見て来る。

「はいはい。」

私の部屋でしょ？」

優の部屋のキッチンが一番広いのだった。

「よっしゃ〜。」

材料買いにいこ〜。」

「ところで、初春はジャッジメントの仕事はいいの？」

初春は今ジャッジメントの177支部に配属されている。
177支部はビルの一室に作られている。

「はい。今日は非番です。」

「「じゃあおいしいケーキを作って食べよう。」」

優と佐天が一緒に言う。

「はい。」

初春も嬉しそうに優と佐天の後ろを付いていく。

「え〜と・・・スポンジには・・・。」

佐天は作り方を覚えているのかスポンジを作っていく。

「じゃあ私と初春は、生クリームでも作ろうか。」

優と初春は生クリームをあわ立てる。

佐天は意気揚々とスポンジの生地を作って型にはめ込んでオーブンで焼いていく。

優はところどころ佐天の生地作りにアドバイスを入れながら自分の生クリームを作っていく。

優は前世にもお菓子作りをしてケーキやクッキーを作っていたので少々の心得は持っている。

転生してから女になり、つつい味覚が甘いもの好きになったので、

転生してからお菓子作りなどを勉強し直して結構な腕前であるが、佐天や初春だけではなく

兄である当麻にもお菓子作りが出来るとは言っていない。

そして佐天の焼いたスポンジに初春がクリームを塗り、その上に優がチョコのクリームでトッピングを作っていく。

「わあ。」

初春は完成したケーキに目を奪われている。

「うん。上出来。」

佐天は外見は優がしたというのにまるで自分の手柄のようにケーキを見ている。

「よし。」

見た？じゃあ切るよ。」

優は手に包丁を持って佐天と初春に聞く。

「ほお。」

優が包丁を入れると、そこからは綺麗な断面なスポンジケーキが見えた。

「おお。」

「わあ。」

そしてケーキは丸々1ホール少女達のお腹の中に消えた。

「食べたら急に眠気が・・・。」

優は目をこすりながら使った食器などを食洗機に並べて食洗機のスイッチをonにする。

「私達そろそろ帰ります。」

「じゃあ上条さん。」

また明日。

明日こそ寝てきてくださいね。

いっつも学校で寝ているんですから。」

「あはは。

分かったよ。」

優は初春の忠告に答えたが・・・

どうしても夜中にしなくてはいけない事があるため寝てられないのであった。

命は絶対に大切にね。

優は夜の9時に部屋のベランダの扉を開けてテレポートを連続して使って目的地まで空を駆けてゆく。

街にはまだ灯りが点っている。

優は高層ビルと同じ高さまでテレポートで上空に上がり、

『エアロマスター風力使い』の能力を使って前方に行く推進力を得る。

優は重力による等速運動によって地面に近づくが立ちやすい場所を見つけて

そこにテレポートしてそこに立つ。

(今日の実験場所は・・・。)

優は学園都市中に飛び交う電波からミサカネットワークにアクセスし、

アクセラレータの実験場所を見つける。

それは、今優がいるところから一番近い操車場である。

また優はテレポートを連続して使用する。

空をテレポートで駆けているので道は関係ない。

最短距離でいくことが出来る。

ドドドドドドドド

優がその操車場に付くと急に銃声が聞こえてきた。

(間に合った?)

優は『ダミーチェック視覚障害』を使って姿を消す。

だがカメラなどには移ってしまうので情報操作も同時に行いカメラなどに移らないようにする。

「カカカカツ。

俺を殺そオなんて無理だぜエ。」

「それでもミサカは戦いますと、ミサカは言います。」

優が声のするほうに行くところには

常盤台中学の制服を着た女の子と黒い服を着た白髪の男性が戦闘をしていた。

もちろん『絶対能力進化（レベル6シフト）』計画の実行中であるアクセラレータと御坂美琴のクローン、ミサカ第・・・何号だか分からないが戦闘をしている。

だがそれも戦闘といえるものかどうかは分からない。

ミサカはアクセラレータに向かって銃や自分の能力である『欠陥電^{レディオ}気』^{イキ}を使って打ち込んでいくがそれは全て打ち込んだミサカに向かって反射されて帰ってくる。

ミサカはまったく動かなくなった。

「ケケケッ。

弱エえな。」

そこにいるアクセラレータは優が知っている実は優しいアクセラレータとはかけ離れていた。

アクセラレータはそのまま操車場から歩いて出て行った。

優はそのアクセラレータが操車場から出たことを確かに確認し、閉鎖空間を情報連結した。

「まったく。」

何があんなにアクセラレータを狂わしたんだろう。」

昼間にあうアクセラレータはいつも優しいのだが、どこか隠している感じがしている。

それを優は原作知識というもので知っている。

それが兄の当麻に止められるということも・・・。

だがそれまでに殺されていくミサカも助けたいと思い、

日々アクセラレータの実験場所に向かってミサカを助けている。

なぜかアクセラレータは完全に殺さずに瀕死の状態でミサカを置いて帰っていく。

（なんでだろう・・・。

確か・・・、完全に殺してしまったはず・・・。）

優は忘れてきている原作知識をあさる。

（まあいつか。

おかげでミサカを助けれるんだから・・・。）

「『肉体損傷を再構成。』」

優は能力を使ってミサカの瀕死の状態を一気に回復まで持っていく・

「『ミサカネットワークから対象を解除。』」

するとミサカは能力を失ってしまうが、ミサカネットワークはなくなる。

これによって『上位命令』は問題ない。

「さてと・・・『冥土帰し（ヘブンキャンセラー）』のところに連れて行かなきゃな。」

優はまだ、気絶しているミサ力を担ぎ上げてテレポートすると同時に閉鎖空間を解除した。

優はミサ力を抱きやすいようにお姫様抱っこをして空中をテレポートをしてカエル顔の医者待つ病院に向う。

「来たかい？」

優がテレポートで入った病室にはカエル顔の医者が待っていた。

「ええ。」

今日も怪我だけは直しましたが、一応検査をお願いします。」

「ああ。分かったよ？」

「貴方には本当にお世話になってしまって・・・。」

「いやいや。私もお世話になってしまっているよ？」

「私は、ただ自分のためだけにしただけなんですけど・・・。」

優はこの病院の一室を使って閉鎖空間を作り出している。

この閉鎖空間は特定の人物ならば普通に扉から出入りできる。

そして病室を広げて今までのミサカ9500号を治療して寝かせている。

それより以前のミサカたちは優が行く前に別のミサカによって処理されていたり、

アクセラレータにつけられた傷からの出血などから出血多量死しており、

死んでしまったら優の情報操作は効かない。

「私も彼女達を助けたいんだがこのままだと病室が足りなくなってしまうていたからね？」

ミサカは軽く数百人は超えているので普通に病室を使うと他の入院患者が泊まれなくなってしまう。

「あはは。

これからおねがいしますね。」

「ああ。

いつでも来てくれよ？私だって助けたいんだから？」

「ええ。」

優はまたレポートでその病室から出る。

今日の実験は二回ある。

別の操車場でアクセラレータが瀕死にさせたミサカを助けようと機会をうかがっていた時に、

「おい！！」

そこにいる三下ア。

でてこい。分かっているんだよ。」

アクセラレータは優のいるほうを見て言う。

「てめエだろ!!」

俺の殺したこいつらをどっかにつれていつているのはよオ。」

(どうする?)

ここは出たほうがいい?)

優は悩んでいるとアクセラレータが今さっき倒したミサ力を驚掴みにした。

「出てこねエとこいつをすぐに殺すぞオ。」

(いやだ。

私の目の前では殺してほしくない・・・。)

実際は目の前でなくても殺してほしくないがそんなに贅沢はいつてられない。

(もう、強硬手段。

ムーブメント
『座標移動』!!)

するとアクセラレータが驚掴みにしているミサ力は消える。

そして優も同時にテレポートをしてミサ力を空中で抱えるとそのまま病院に向かってテレポートをした。

アクセラレータside

ちよつと前から俺が瀕死にさせたミサ力が処理されずにどこかに連れて行かれるということが起こっていた。

（そついやア。

俺がミサ力を瀕死にさせだしたのはア
優と出会ってからだったなア。）

その犯人が俺の今日一回目の実験のときにもあらわれたんだ。
俺はそれを見逃す。

2回目に俺はアミサ力を殺すと脅すと俺の知っている気配が一瞬感じた。

すると俺の掴んでいたアミサ力は消えたア。
そしてその気配すらも無くなってたんだア。

（ぜつてエ。

あれは優だア。

多重能力者なんてエあいつしかいねエ。

つてかなんであいつは、何も言つてこねエんだ？）

side out

ムーブメント

『座標移動』や動揺によってアクセラレータに気づかれた事に

優はいまだに気がついていなかったのであつた。

夜のお仕事。それと都市伝説。

シンシンシンシンシン

次の日の午前3時頃、

少女はポニーテールにした髪と羽織っているマントをなびかせながら空をテレポートで駆ける。

トンッ。

少女はある建物の前の街灯の上に降り立つ。

夏が近付いてきて、少し暖かくなってきた風が少女の髪と羽織っているマントをなびかせる。

「今日はこの研究所。

チャイルドエリア

『置き去り』と研究成果頂きます。」

すると少女は研究所に向かって、手をかざし、

「『対象、カメラ&通信機器、情報連結を解除。』」

するとあちこちから光の粒子が風に飛ばされて行く。

少女は大胆にも研究所の真正面から侵入する。

だが警報装置などはまったく働かない。
これも少女が壊していたからだ。

寝静まり物音のしない研究所はまったくの抵抗もなく少女の侵入を許してしまう。

少女は堂々と研究所の廊下を歩いていく。

なぜかこの侵入者を止めに出て来る奴はいない。
研究所の警備員はいつの間にか眠らされている。

そして少女は研究室を覗き込むと、誰も居ない事を確認してから研究室に入り、パソコンを起動する。

そのまま少女はこの研究所の研究成果を自身のメモリーにコピーをしてメインデータを能力を使って再生不能まで削除する。

そして『置き去り』チャイルドエラーを隠している扉を破壊する。

そして少女はレポートでその研究所を出て、燃えても問題ない所を派手に爆破していく。

「最近非人道的な事をされていた置き去りチャイルドエラーが爆破現場から見つかつて居るじゃない？」

それはその爆破を調査しにきた消防隊員や警備員アンチスキルに非人道的な事をされていた置き去りチャイルドエラーは見つけられて保護されるんです。

でもこの爆発は能力者によって引き起こされている様なんです。」

「ふあゝあ。

それが？」

優はとても眠そうだ。

「それがまったく目撃情報がないんです。」

佐天はネット上での噂を優と初春に力説する。

「しかもチャイルドエラーがいた隠し部屋の扉は破壊されてるんです。」

「まるでチャイルドエラーをアンチスキルに教えている様ですね。」

「そうだねえ。」

私もう寝るわ。」

「まったく上条さんはいつも眠そうなんだから。」

「そうですよ。」

上条さんは夜寝ているのですか？」

「…まあ寝てる。」

（3時間だけね。）

優は夢の世界に旅立った。

「それにその人物はマントを羽織っている女の人で髪はポニーテールってことらしいけど…。」

佐天は優を見る。

「優じゃないよね？」

「違いますよ。」

それにそれは目撃情報がないんですよ？

なんで女の人で髪がポニーテールだと言えるんですか？

それにその人物の能力は何なのか分かりますか？」

「それがさ、あの都市伝説の『デュアルスキル多重能力者』らしいんだよね。」

しかも全ての能力値はLV5らしいんだよ。

それに少女が爆破された研究所に入るところは見えてないらしいけど

その爆発が起こる約30分前にその方向に向かって『テレポート空間移動』する

ポニーテールの女の子を見たって言う目撃情報はあるんだよ。

でも夜だし、意外と高度の高いところを飛んでいたみたいで顔までは見えなかったらしい。」

初春と佐天は郵便局や水族館での優の能力を見てなかったし、優は『データオペレーション情報操作』としか言っていない。

だからこそ二人には何も怪しまれることがない。

一度御坂美琴からメールで聞かれたのであやふやにしておいた。

優が多重能力者だと知っている人は後二人いる。

郵便局のときに出会った白井黒子だ。

美琴からのメールで白井が美琴の部屋に無理やり同室になったのを聞いているが

白井自身の携帯のアドレスなどを知らないの今この所連絡が来ていない。

優の相棒と言ってもいいようなアクセラレータからは『無理すんな

よ。』とメールが送られてきた。

「多重能力って実現が不可能って言われている奴じゃないですか！？」

「そうだよ。」

多重能力だよ！！私が知りたいのはそこ！！

初春この掲示板を見て。」

佐天は初春に携帯の掲示板を見せる。

そこには

『多重能力者は本当にいるのか？』という題名の掲示板がある。

そこには見たという人が数人とありえないという人が数人で話を進めている。

それに見たという人はいうことが具体的である。

しかも見た場所まで記されている。

「あっ！！

この水族館の事件、私達いましたよね？」

「そうなんだよ。」

それだけじゃないよ。

第7学区の郵便局に強盗が押し入ったときもいたらしいんだよ！！」

「へ？

それってこの前の……。」

「そうそう私達が小学生の時に起こった。」

「私その現場にいましたが……、多重能力者なんて……。」

初春はあの日の記憶を呼び起こすが多重能力を使った人を見ていない。
せいぜいシャッターを突き破って出てきた鉄球と中で一瞬炎が生まれたこと。
そして外から中学生によって電撃が放たれたところを見ただけなのだ。

「え？初春その時ここにいたの？」

「え、ええ。」

でも多重能力者なんて・・・。」

そこで授業開始の合図の放送となり、授業が始まったので佐天と初春は授業に集中することにした。

b u b u b u b u b u b u

いつもの机ごと震わす携帯のバイブレーションが聞こえてきた。
これで柵川中学校の一日は終了となる。

「ふあゝあ。」

いつも通り優はあくびをしておきる。
その辺で「萌え」とかいいながらもだえている男子中学生はほっておくことにする。

b u b u b u b u b u b u b u b u

その日はアラームだけではなかった。

いつもとバイブレーションのパターンが違った。

「ん？メール？」

優は携帯を開いてメールを見る。

『from：当麻』

本文：今日は俺が夕飯を奢るから

一緒に夕飯食べに行かないか？』

多分この前ご飯を食べさせていた頃のお礼だろう。

優は了解の意をメールで伝えるとファミレスの場所を伝えてきた。

「上条さんって・・・、彼氏いるの？」

優の携帯を覗き込んでいた佐天が聞いてくる。

「佐天さん。

いたじゃないですか。

ほら水族館のときの白髪の男性が。」

「ああ、当麻ってその白髪の人？」

佐天たちが勝手な妄想を繰り広げる。

「いや。」

私のお兄ちゃんだから・・・。」

そんな優の言葉を見捨てて佐天と初春は次々と妄想をしていく。
この二人の妄想は優が静かに教室から出て行った後も続いたのだった。

超電磁砲 第一話

「おにいちやああん。」

優はファミレスの前で待っている当麻に向かって叫びながら走る。

「はっ。」

なんだか当麻が驚いている。

「優ってそんなキャラだったか？」

もちろん違う、優はネタとしてこのキャラを演じているだけである。

「そうだよお兄ちゃん。」

「そうなのか・・・。」

まあ入るとしようか・・・。」

なんだか当麻の優に対するイメージが壊れたような音がしたが気にしない。

ファミレスの中に入り、二人してメニューを選ぶ。

「優はなにがいいんだ？」

今日は奢ってやるからな。

なんでも頼め。」

「じゃあスパゲッティと・・・。」

「え？と？」

「スペシャルパフェとフライドポテトとチョコレートケーキとショートケーキと……。」

優はどんどんこのファミレスにあるデザートを言っていく。

「あの……。」

優さん？上条さんはそれを奢ると

今月は塩と水と砂糖で暮らさなくてはなくなるんですが……。」

「え？

ダメなお兄ちゃん。

それにね。私も上条だからね。」

まだ優はキャラを被っている。

「いや……本当に……。」

当麻が今にも泣き出しそうな顔をしている。

「あはは。

もうこのキャラ飽きたから普通に話すね？」

「へ？

優さんそのキャラクターはわざとだったのですか？」

「はい。

それに私もそんなにデザート頼んでも食べれないし……。」

普通にスパゲッティだけでいいよ。」

「た、助かった……。」

当麻は助かった。主に財政面で。

当麻と優は注文して品物が来るまで当麻が今までの不幸な話をする。女の人を助けたら不良に追いかけられたとか財布をなくした人と一緒にその人の財布を探してたら自分の財布をなくしたとか……。

聞いているほうが聞かなかったほうがいいような気がする内容ばかり当麻は話した。

「ねえお嬢ちゃん。

俺たちと今から遊びに行かない？」

なにやら違う席に座っている女の子に高校生か大学生ぐらいの男性が声をかけているのが見える。

優の席からは見る事が出来なかったがその女の子は常盤台の制服を着ている。

その服が見える位置に座っていた当麻は……。

「ちょっと助けてくるわ。

特に不良の方を……。」

そういつて当麻は走っていつてしまった。

そのまま不良を挑発すると当麻はファミレスの外に逃げていく。
優はその女の子の元に行く。

「へ？」

美琴？」

「あら。優じゃない。

こんなところでどうしたの？」

美琴は優が毎日自炊していると聞いていたのでこんなファミレスにいるとは思っていない。

そして優は初めて不良に絡まれていたのが美琴で当麻が、不良を、助けてくる。といった意味が分かった。

「ああ。」

お兄ちゃんが夕飯奢ってくれるからって来たんだけど……。
今さっき不良を連れ出したのが私のお兄ちゃんだよ……。」

「へえ今の不良をかばった人がねえ。」

「美琴ってもう食べた？」

「いや。まだだけど？」

「じゃあさ。

一緒に食べない？」

今日は私が奢るからさ。」

優がいうと美琴が即OKをだした。

優は美琴に注文していたものでどっちが食べたいかを聞いたなら

「さっきの奴が食べてないものでいいわよ。」といったので

当麻の頼んでいったもの・・・ ― 苦瓜と蝸牛の地獄ラザニア（ゴーヤとエスカルゴのじごくラザニア）を

食べることになった。

だが美琴はコレはフランス料理の一つで高級なものだといって食べた。

「まったく。」

お兄ちゃんも頭で考えるよりも先に身体が動くんだから・・・。」

「へえ〜。いまだきそんな人もいるのねえ〜。」

「そうだ。」

後でお兄ちゃんとその不良見に行かない？」

「何か面白いの？」

「多分ね〜。」

追いかけている不良の数が多分数十倍にもなっていると思う。」

優は笑いながら言う。

「それって大丈夫なのかしら？」

それでそのお兄ちゃんって能力とレベルはいくつなの？」

美琴はエスカルゴを食べながら言う。

「正真正銘のレベル0、無能力者だよ。」

「え？それってやばいんじゃない？」

美琴はまだ当麻の能力を見ていないので当麻の事を心配している。

「大丈夫だと思うよ？」

何だったら見に行った後にお兄ちゃんに電撃でも撃ってみたら？」

「でも無能力者にそれは……。」

「ああ多分大丈夫だから。」

私が保証する。」

優はにこやかな笑顔を美琴に見せる。

「え、ええ……。」

なんだが美琴は引き気味に優に返事を返した。

「じゃあ見にいこっか。」

優は最後の一口を食べて水を飲み干す。

美琴も最後の一口を食べてから水を飲み干した。

優は会計で樋口さんを一枚だすと数人の野口さんが帰ってきた。

「あら……意外と安いんだ。」

優と美琴はファミレスの前で手をつないで優がテレポートをした。
大体の位置は分かる。

「不幸だああああ」と聞こえる方向に行けばいいんだから。

現場に近いビルの屋上に降りると何十人という不良に追いかけられて
いる当麻が見える。

不良の中に『バイロキネシスト発火能力者』でもいたのだろうか。

火の弾が当麻に向かって飛ぶが当麻は『イマジンプレイカー幻想殺し』で打ち消す。

「え？

なんで火の弾が消えるの？

あれってまるきり優のA S Sじゃない。」

「実は私のA S Sの原型があれ。」

そついつて優は当麻の右手をさす。

「それにしても多勢に無勢ね。」

当麻は逃げるしか出来ていない。

「はあ・・・。」

助けましょうか・・・。」

優は風を操り宙に浮く。

「あつ私も行く。」

美琴は優の手をまた握る。

そして不良達に近づいた瞬間・・・

バチバチバチ

電撃がほとばしった。

不良達は一瞬で気絶する。

優はそのまま美琴を地面に下ろすと、
別ルートで当麻を追っている不良を気絶させに行く。

なにやら橋のほうから電撃が見えるが優は見なかったことにするの
だった。

優が橋に戻ったのは電撃がやんだときだった。

優が戻ると美琴は悔しがっていた。

「なんで私の電撃が効かないのよ!!
無能力者の分際で。」

努力によって超能力者まで上り詰めた美琴のプライドを当麻はぎた
ぎたにしたのだった。

優の友達関係は・・・教師も含まれる。

「うううういいいいはるうううう!!」

「きゃー!!」

校庭に佐天と初春の叫び声が響く。

「今日は淡いピンクの水玉ですか。
いい趣味ですね。初春。」

優は佐天がめくった初春のスカートの中身を見ながら呟く。

「い、いいじゃないですか!!」

初春は背負っているリュックのふたをカパカパとさせながら優に言う。

「私はほめたつもりなんですがね・・・。」

そして場所は移り、

「佐天さん。」

「あはは。ごめんごめん。」

佐天は一応謝っているが全然誠意が感じられない。

「佐天さんはもう少し自重というものを・・・」

初春が佐天に説教を始める。

「そついやどうだった？」

「どうって？」

「決まってるじゃん。
システムスキャン
身体測定。」

「ああ。」

全然ダメでした。

あいかわらずのLV1小学校の頃から横ばいです。
担当の先生からも

「お前の頭の花はみせかけか。その花の満開パワーで能力値でも咲き誇れ。」って

「えーと。その担当のせつきょうにも色々突っ込みたいところだけ
ど。」

まあとりあえず元気だしなよ。

大体LV1ならまだいいじゃん。

私なんかLV0無能力者だよ。」

「私は小学3年から変わらずLV3ですね・・・。」

優は上げるつもりも下げるつもりもない。

あげると妬まれるし、下げると奨学金が少なくなってしまうからだ。
LV3の奨学金でも十分に充実した生活が出来ている。

それにアクセラレータと一緒に遊びに行ったり食べに行ったりするとアクセラレータが奢ってくれるので、生活費は全く困らない。

「いいですね。」

私だって能力者になりたいなあ。」

佐天は晴天の青空を見ながら言う。

「きっと開花しますよ。」

佐天さんだって能力開発カリキュラム受けているんですから。」

「でも関係ない。私は毎日が楽しければそれでいい。」

「そうそう。」

「ひとついはい——の先行配信されている曲手に入れたんだ。この曲が入ったアルバム今日が発売日なんだあ。」

佐天が初春にイヤホンをつけながら話す。

「ダウンロードしたのにCDも買うんですか？」

「あつたりまえじゃん。」

「優もそうだよな？」

「う、うん。」

私はCDじゃなくてDVDなんだけどね。」

優はCDではなくDVDをネット上でダウンロードしたにもかかわらず

ビデオ屋でDVDを買っている。

「へ、へえ。」

「初春、今日アルバム買いにいこ〜。」

「すみません。」

今日は白井さんにお膳たてしてもらって
やっとあの御坂さんと会う日なんです。
佐天さんと上条さんもどうですか？」

「あの御坂さんって『超電^{レールガン}磁砲』の？」

「はい。」

優と初春、佐天は白井との待ち合わせのファミレスにきた。

「おねえさまああああ。」

ファミレスの中から妙な声が聞こえてきた。

「ねえ初春、私たちがいくファミレスってここでいいんだよね？」

「は、はい。」

そのはずなんですが……。」

優と初春、佐天はファミレスの中を覗き込むとそこには
常盤台の制服を着て、茶髪の女の子……美琴に抱きついているツ
インテールの女の子……白井がいた。

「あつ。」

中の2人は店員に言われて優達を見て気が付いたようだ。

美琴たちがファミレスから出てきた。

「ご紹介しますわ。」

こちらが私の風紀委員の裏方をしてくださる。
ジャッジメント
初春ですの。」

「は、はい。」

初春飾利です。よろしくおねがいします。」

初春が挨拶をして美琴が挨拶をする。

「そしてこちらが……。」

「佐天涙子でえゝす。」

ちなみに能力値はLV0、無能力者でえゝす。」

佐天はふざけるように言う。

「よろしくね。」

初春さんに佐天さん。」

「そして、この方が上条優さ・・・珍しいわね。優。今日は一人でもなくて男の人と一緒にでもないなんて。」

へ？
お姉さま知ってましたの？」

「知ってたわよ？」

しかも私がLV4の頃からの友達よ？」

「ええゝ。」

上条さん。そ、そんな友好関係が!!」

初春はなんだか驚いている。

「お、お姉さまわたくしというものがありながら・・・。」

白井はまったく変な方向に向かっている。

「上条さんって、友好関係広いですよね？」

確か高校生ぐらいの男の人2人に・・・小学生みたいな高校の先生に・・・。」

密かに優は小萌先生とも会ったことがあり、小萌先生の家にも行ったことがある。

そのときはアポありで行ったのでビールの缶やタバコの吸殻は転がっていなかったが
染み付いたビールのにおいは隠せずに優は入った瞬間小萌の趣味を見抜きそれからというもの
よい話相手という関係をもっていた。
高校生ぐらいの男の人とは兄である当麻とアクセラレータのことであるう。

「あはは。
それよりもどっかに行かない？」

優は自分の話題から話すために話題を変えた。

「そうねえ。
ゲーセンにでも行く？
優。今日こそ負けないわよ？」

「望むところ。」

美琴と優は今までもなんどもゲーセンに2人で遊びに行き音ゲーやレーシングゲームで勝負をするが全戦全勝優の勝ちである。
優は音ゲーは前世からずっとやっていて自身はあるし、
レーシングゲームは前世で実際に車を運転していたのでその感覚で走ったらなぜか美琴に勝ってしまうのであった。

「まったくお姉さまはお琴とかお料理とかもっとお嬢様らしいことをされてはいいかなのかと
わたしは常々いっておりますのに。」

復活した白井が歩きながら美琴に言う。

「琴とか料理とかどこが私らしいのよ？」

白井と美琴が言い争いを始める傍ら柵川中学校組は後ろで……。

「全然お嬢様じゃありませんね。」

「それに上から口調でもありませんし。」

「ところで上条さん。」

いつもの御坂さんってあんな感じなんですか？」

（えーと本当のこと言っているのかな？

趣味が少女趣味で喧嘩っ速いって言うのを言っているのか……。）

急に美琴が止まった。

「どうかしたんですか？」

美琴が手のものにあるクレープ屋のビラを凝視している。

「もしかしてクレープが食べたいとか？」

「お姉さま。もしかしてそのクレープについてくるゲコ太が欲しいんじゃないの？」

美琴は白井が言った瞬間ビクツと肩を震わした。

「そ、そんなわけないじゃない！！」

美琴はあわてるが皆は覚めた目で見ている。

「わ、私はこんな両生類の生き物なんて・・・。」

「美琴。諦めたら？」

優は美琴の鞆にかかっているゲコ太ストラップを指差す。
美琴の顔は一気に赤くなる。

「あはは。」

佐天の乾いた笑いが響いた。

そして、優達は予定を変更してそのビルに書かれているクレープ屋に行くのだった。

クレープはとてもおいしいのです。

「クレープ♪クレープ♪」

優はなんだかご機嫌だ。

「どうしたんですの？」

白井が優に聞く。

「白井さん。」

上条さんは甘いものが大好きなんですよ。」

優の変わりに初春が答える。

「ああ。なるほど。」

「クレープ♪クレープ♪」

クレープ屋に近づくにつれて優のテンションはあがっていく。

「ったく。」

優は甘いものに目がないんだから。」

美琴があきれたように言う。

クレープの移動販売が来ている公園に優達が着くと、
優はまっさきにクレープ屋の行列に並んだ。

「わたくし達は席を取っておきますので。
お姉さまはこれお願いしますわ。」

「じゃあ佐天さん私はこれお願いします。
お金はあとで払いますので。」

「りょーかい。」

初春と白井は行列に並んだ、優と美琴、佐天から離れていく。
ちなみに並び順は、優↓佐天↓美琴の順である。

「チョコ？いやここはバナナか？
いやプリンもいいなあ……。」

優はぶつぶつと考えながら品物を選んでいる。

数分待つと優の番になった。

「何になさいますか？」

「うん。ここはバナナのトッピングはバナナと生クリーム。」

優はクレープと一緒にストラップを買った。

優の次にならんでいた佐天もストラップを買っていた。
その次の美琴は……。

「すみません。」

先ほどのストラップで最後となってしまったんです。」

美琴は地面に沈んだ。

「あらら。」

佐天さん。あと頼んだ。」

優は佐天にゲコ太のストラップを渡し白井達の待つベンチに向かっていった。

後ろで美琴が佐天にすがり付いているが・・・

（そこまで欲しかったのかゲコ太ストラップ・・・。）

密かに誕生日にでもゲコ太の人形でも贈ってみようかと考えている優なのであった。

「はい。」

黒子。」

美琴は白井に買って来たクレープを渡す・・・あのトッピングが納豆と生クリームのクレープだ。

優は初春の横に座ってクレープにかじりつく。

佐天も同様に座ってクレープにかじりつくが、

常盤台中学組はたってなにやら2人で茶番？を始めた。

「ほら。お姉さま遠慮なさらず。」

「いらないうっていでんでしょ！！」

何よ。トッピングに納豆と生クリームって！！」

「はい。あ〜ん。」

「だからいらないうて!!」

美琴は白井からにげその美琴を白井は追いかけていった。

「よかったですね。佐天さん。」

「え？なにが？」

「御坂さん。上から目線でもないですし。

お嬢様のイメージとはちよつと違うかったけど
思ってたよりずっと親しみやすい人で。」

「どうなんだかね〜。」

優が知り合いだったっていうのも驚きだったけど。」

佐天が白井を片手で制している美琴に視線を移す。

「はい。」

何を思ったのか美琴は佐天にクレープを食べさせようとする。
が、

「お姉さま!!」

白井が奇声のような声をあげる。

「わたくしというものがあらさ、さ、佐天さんと間接的な・・。」

「あんたの友達には付いていけないけど・・。」

「あゝおいしかった。」

急に優が声を発した。

いままで優はクレープをずっと食べていたのだった。

「上条さんも考えればLv3なんですよね。」

「いつも能力なんて使わないんで忘れてしまいますが・・。」

「そういえば・・・そうよね。」

「ん？」

いえ、あそこの銀行なんですけど・・。」

なんで昼間っから防犯シャッターをおろしているんでしょうか？」

初春が呟くと美琴に頬をつねられていた白井が反応をしめす。

そしてその初春の声を聞いていた人がその銀行の方に目を向けるとシャッターは歪みだし内部から爆発した。

そして優は白井を見るとクレープを一口で口に押し込んだ。

（もったいない。味をちゃんと味合わなくちゃ・・・。
でも納豆に生クリームは賛成できないけど・・・。）

すると防犯ベルが鳴り出し、白井は初春に警備員アンチスキルを呼んで
けが人の有無の確認というと柵を乗り越える。

「黒子！！」

「白井さん！！」

美琴と優が声を上げるが白井はそれを制する。

「いけませんわ。」

お姉さまと上条さん。学園都市の治安維持はわたくしたちジャッジ
メントのお仕事。

今度こそおとなしくしていてくださいな。」

白井は優が多重能力者だということを知っている。

半年前ぐらいにおこった郵便局の事件で知っているからだ。

そのおかげで優が戦闘能力を有しているということももちろん分か
っているが

美琴と優をせいした。

すると黒子はその銀行強盗犯の先にたち。

「お待ちなさい。」

ジャッジメントですの。

器物破損および強盗の現行犯で拘束します。」

男たちは一瞬呆けてお互いに顔を確認する。
すると男たちは笑う。

「おら。」

お嬢ちゃん。とつとどつかいかねえと
怪我しちゃうぜ。」

デブは思い切り死亡フラグな言葉をいいながら白井に殴りかかる。

「そういう三下の台詞は死亡フラグですわよ?」

そういつて白井はデブの足を引っ掛けて一回転させ、地面に叩きつけて気絶させた。

「すごい。」

佐天が白井の拳動をみて言う。

「さっすが黒子。」

なんだか美琴は自慢のようについて。

「へえ。」

優は驚いている。

「いまどきあんな死亡フラグ言う奴なんていたんだ・・・。」

優はそっちでおどろいていた。

「優。そっちに驚くのは間違いなんじゃ・・・。」

美琴が何か言ってきているが優は無視をすることにしたのだった。

すると横のほうから初春の声が聞こえる。
なにやらバスガイドとはなしをしている。

「どうしたの？」

美琴と佐天と優が走りよる。

「それが、男の子が一人足りないんです。
少し前にバスに忘れ物をしたっていったきり。」

「じゃあ私と優と初春さんで。」

「私も行きます。」

佐天も名乗りをあげる。

「分かった。手分けして探しましょう。」

やっぱり必殺技にビームは必須だよね？

白井の方は男が掌に炎を生み出す。

「いまさら後悔してももうおせえぞ。
てめえには消し炭に。」

白井は車道のほうに走り出す。

「逃がすかよお!!」

男はそれを追って炎を打ち出すが白井がテレポートでよける。
だがそこには男の子を捜していた優の姿が・・・。

「え？やばっ。」

優はなぜか慌てて自分も炎の弾を作り出してその炎に打ち付ける。
その炎は優の炎がいとも簡単に押し返した。

優はLV5の力を普通に使えるのだ。
その力がたったLV3に負けることなんて無い。
そして押し返したことを確認した優は炎をけす。

白井は優が無事なのを確認すると男の頭上にテレポートをして男に
優が約半年前にしたようなドロップキックを食らわす。

実は白井はこのドロップキックの戦い方はあのとときの優を参考して
いたりするのだった。

そして白井は倒した男に小さな鉄の鉛筆みたいな鉄棒を打ち込み、
男を地面とつないだ。

「て、テレポーター。」

「これ以上抵抗するなら。」

次はこれを直接体内にテレポートさせますわよ?」

白井は鉄棒を持って男を見下ろしながら言う。

「そっちは?」

美琴たちはバスの周辺で男の子を捜していた。

つい先ほど炎を打ち込んだ優もその輪に入っている。

先ほど炎を出したのを初春と佐天も見ているが今は聞くべきではないと二人は捜索を続けている。

「ダメです。」

「いない。」

どこいったのよ!」

「なんだお前。」

「ちょうどいい。一緒に来い。」

強盗犯の最後の一人に男の子が連れて行かれるところを佐天は目撃

してしまった。

佐天は一度バスの近くにいる風紀委員ジャッジメントと能力者二人を見るが・・・。

（わたしだって!!）

佐天は男の子に抱きつき、

「なんだてめえ!!
放せ!!」

白井と美琴、優はその声のほうをみる。

「だめえ!!」

佐天が叫ぶ。

そして強盗犯は佐天の顔を蹴って車に乗りに行く。

「佐天さん!!」

初春が叫ぶ。

「くっ。」

白井は鉄棒をテレポートさせようとするが・・・。

「黒子（白井さん）!!」

ここからは私の個人的な喧嘩だから

悪いけど手え出させてもらっわよ。」

美琴と優が殺気を出しながら白井に言う。

美琴は電撃をまとっている。

優は何もまもっていないが優の周りの空気はうずめいている。

「あゝ。」

白井は諦め気味に言う。

「思い出した。」

ジャッジメント
風紀委員には捕まったが最後、

身も心も踏みにじって再起不能にする最悪の『テレポーター空間移動者』がいて。

「

「誰のことですか？それ？」

最後の強盗犯は車に乗って優たちをひき殺そうと車を半回転させる。
その技術があつたらまじな仕事が出来るだろうにと思っぐらいの運
転技術だ。

「さらにはそのテレポーターの身も心も虜にする最強の『電撃使い
(エレクトロマスター)』が。
だとするともう一人は誰だ？」

「そう。」

あの方こそがこの学園都市230万人の頂点7人のLV5の第3位。

「

美琴はコインを打ち上げる。

優はなんだか『か〇めはめ波』でも撃つような体勢になると手の平
に光るものがあつまる。」

（圧縮。圧縮。空気を圧縮。）

そう。優はいずれ当麻とアクセラレータが戦うときにアクセラレータが使った風を操って
プラズマを集めたように優も頭の上ではなく前でプラズマの塊を作る。

そして男が優たちをひき殺そうと車を発進させ向かってくる。

美琴は自分の異名である『レールガン超電磁砲』を

優はたった今名前を思いついた『プラズマビーム電離気体光砲』を

二人構えて・・・同タイミングで撃つ。

美琴のコインは音速の3倍で優のプラズマも音速の3倍で車に向か
つていき、

余波だけで車を飛ばす。

二つの電気系砲撃はその道に大きな傷跡を残した。

「『レールガン超電磁砲』 御坂美琴お姉さま。

常盤台中学が誇る最強無敵の電撃姫ですの。

それと・・・都市伝説『デュアルスキル多重能力者』 上条優さんですの。」

車は飛ばされて地面に突き刺さった。

強盗犯は車の中でエアバックに挟まれて伸びている。

「はあ。す、すごい。」

「す、すごい。」

初春と佐天はこれしかいうことが出来なかった。

強盗犯は警備員アンチスキルに連行される。

「あなたの能力も中々のものでしたわよ？

LV3といったところでしょうか？

能力に有頂天になるあまり、道を違えたようですね。

しばらく自分を見つめなおして、もう一度でなおしてくださいな。」

白井がいいことを言っている。

佐天は頬に絆創膏を張って、先ほどの男の子とその母親とバスガイドにお礼を言われている。

「本当にありがとうございました。
ほらあなたも。」

男の母親は母親に抱きついていて男の子に言う。

「お姉ちゃん。ありがとう。」

佐天が少し微笑んだ気がする。

「お手柄だったね。佐天さん。すごくかつこよかったよ。」

美琴が佐天に言う。

「うんうん。」

佐天さんかつこよかったよ。」

そして優も言う。

「御坂さんと上条さんも……。」お姉さま。」

佐天の声は白井によって消されたのだった。

「佐天さん。お怪我大丈夫ですか？」

「へーきへーき。」

「あつそうだ。」

佐天さん。怪我治すからちよつと絆創膏とつてくれない？」

別に取らなくても治せるが見せておいたほうがいいだろうと優は思いう言う。

「は、はい。」

佐天は素直に絆創膏をはずす。

そこには赤くはれた頬があった。

「まったく最近の男は顔を蹴るのが好きなのかねえ。」

『情報連結を再構成。』」

すると佐天の頬はものと色に戻り、痛みもなくなった。

「あっそういえば、上条さん。

能力の事について聞かせてもらいますよ!」

「あっ私も私も。」

佐天と初春が優に突っかかる。

「えゝめんどくさい。」

「じゃあ上条さんが『多重能力者』だって学校で言いふらします。」

佐天が言う。

「え?やめて。

分かったから学校で言うのはやめて。

それに本当は私多重能力者じゃないからね。」

「え?どういことですか?」

今さっきまで美琴に抱きついてた白井が聞いてくる。

白井には多重能力者と言っていたからだ。

「んゝ一応多重能力者は多重能力者なんだけど・・・。」

「もったいぶらずに答えてくださいな。」

「簡単に言つと自分の能力『データオペレーション 情報操作』で自分の情報を書き換えるだけ。」

「なるほど自分を『多重能力者』だと自分の能力の情報を書き換えたのですわね。」

佐天と初春は頭の上にはてなを何個も出している。

「つまりはゲームというチートみたいなものだよ。」

ゲームも情報から出来ているこれを書き換えて無敵や敵の弱体化をするのだ。

優の場合はプレイヤーの情報を書き換えて初期のときにLVMAXになっているようなものなのだ。

「つまりは反則技ってわけね。」

美琴がすっぱりと言ってくれた。

「だから私もあまり多様したくはないんだけど……。
なんで私は事件とか事故によく合うのかなあ……。」

「上条さんが事件を呼んでいるんじゃないんですか?」

（なに? その体は子供頭脳は大人 その名は 名探偵コン みたいないかたは……。）

アクセラレータは優を見逃すようです

「ふあゝ」

眠い……。」

優は起きてから冷蔵庫をあさりながら言う。

「……。」

あれ？何の食材もない……。」

優は冷蔵庫の中身はカラであることを忘れてしまい食材を買うのを忘れていた。

「仕方ない……。」

食べに行こう。」

優はそうと決まれば顔を冷水で洗い、服を着替えて出かける準備をする。

行く先は数日前、御坂達とであったファミレスだ。
そこには以外な人物もいた。

「あら？

アクセラレータも今から？」

「いや。

食べ終わったところだ。

俺は飯作れねエしな。」

そこには4人席に座ったアクセラレータがいた。

優はそこに座る。

「アクセラレータ。」

今日一緒に遊びに行かない？」

「すまねエが。」

今日は寝かせてくれ。」

アクセラレータは寝ていなかった。

今日明け方まで実験と称して妹達シスターズを殺していた。

そのため優もほぼ寝ていない状況だったのだが、少しは寝ていたの
で今日動くだけの気力はあった。

「ああ。そうなの？」

優は店員に品物を頼みながらアクセラレータに言う。

アクセラレータも追加で珈琲を頼んでいる。

「俺が、今まで寝ていないことに何もいわねエのか？」

アクセラレータは聞いてほしかったのだろうか？

「聞いてほしかった？」

「いや。」

「でしょ？だってクローンとはいえ人を殺してたんだからねえ・・・。
」

優は後半を心の中で言っ たつもりだったのだがいつもより頭が回っ

てなく、小声だが話してしまった。

「優。やっぱり、てめエ知ってたのか。」

「え？」

優は自分が言葉にしまったことを気がついていない。

「『絶対能力進化（レベル6シフト）』」

アクセラレータは自分が今している実験の名前を言う。

「え？それがどうしたの？」

優は未だに自分でそのきっかけを作ってしまったことに気がついていない。

「言ってたぞオ？人を殺してたってなア。」

優はようやく自分の失態に気がつく。

「何？実験を知られたから私を殺すの？」

優は恐る恐る聞く。

実際アクセラレータは実験を知られた場合は殺せといわれている。

「いや。」

それに優。てめエは、妹達シスターズを助けてるよなア？」

アクセラレータの中では優は特に学園都市の裏側には来てほしくな

いが

どうしても殺したくなかった。

「え〜と・・・。」

優は言葉に詰まるがアクセラレータがにらむと、

「はい。助けてます。」

それに妹達シスターズは、『冥土ヘブン帰しキャンセラー』のところでございます。
もしかして妹達を殺しに行くの？」

優は妹達の居場所まで言ってしまった。

優の顔は今にも泣きそうである。

そして頬に一筋の涙が流れた。

「いや。」

行かねエからそんな顔すんじゃないエ。」

結局アクセラレータは優の涙に負けてしまった。

「ありがとう。」

優は短くアクセラレータにお礼を言う。

「あら？」

優じゃない？」

後ろから聞き覚えのある声が聞こえてきた。
優は後ろを振り向く。

「あつ。美琴おはよう。」

「おはよう。」

でこちらの方は？」

美琴はアクセラレータを見る。

「あつ。」

昔上条さんと一緒にいた彼氏の方じゃないですか？」

「あゝ確かに。あのときの彼氏さんだ。」

甘ったるい声と元気な声が聞こえてきた。
初春と佐天だ。

「ン？」

あア。俺は邪魔みてエだな。」

アクセラレータは食べ終わって食後の珈琲も飲み終わり帰る準備をする。

「ああ。帰っちゃうの？」

まあ今日はちゃんと寝てよ？」

優がアクセラレータに言うと、

「あア。」

今日はねエからちゃんと寝ろよ?」

今日は無いとは実験のことだろう。

アクセラレータも優に言う。

「じゃあ。」

「あア。」

アクセラレータは会計をして帰っていった。

「で。優今さっきの人は彼氏なの?」

美琴がアクセラレータが店から出て行ったと同時にぐらに聞いてくる。

「うん。」

友達以上恋人未満かな?」

優は曖昧な答え方をする。

「それにしても髪とか肌白かったですよねえ。」

「確かに。どうやったらあんなに白くなれるんだろう……。」

「アクセラレータの能力は『アクセラレータ一方通行』っていつて全てのベクトルを操れるんだけど

それで紫外線をも反射してしまうから色素が抜けたとか言ってたよ

うな……。」

「え？『アクセラレータ一方通行』ってこの学園都市の第一位じゃないですか！！」

初春が驚く。

「え？そうなの？」

「あゝ確かそんな奴もいたわねえ。」

佐天は驚き、美琴は何かを思い出したかのようにいう。

「本当に上条さんの友人関係って凄いですよね。
学園都市第一位に第三位、教師、ジャツジメント風紀委員、アンチスキル警備員とか。」

ただだんに警備員は事件に巻き込まれるたびに合う人物が特定されて街中であっても話すようになったのだった。

その警備員の中には よみかわあいほ黄泉川愛穂もいる。

「ところで今日はこのファミレスに何しに来たの？」

「ただの買い物ついでよ。」

美琴がいつの間にか頼んでいたジュースを飲みながら答えてくれた。
初春と佐天もいつのまにか席についてジュースを飲んでいる。

「上条さんもこの後どうですか？」

あの常盤台中学の寮に行くんです。」

初春が優に目を煌々ときらめかせながら言う。

「
いいよ。
」

優は3文字で返事をした。

アクセラレータは優を見逃すようです（後書き）

アニメ視点で行きたいと思います。

常盤台女子寮にて (前書き)

題名はぜんぜん思いつかなかったので勘弁してください。

常盤台女子寮にて

優は美琴の後ろを付いて初春と佐天とともに常盤台中学の寮の中を進んでいく。

「楽しみですね。」

常盤台中学の寮の部屋なんて私達には一生無縁のところですよ。」

初春のテンションはいつもよりもさらに高い。

やはり、お嬢様というものに憧れを持っているのだろう。

「そんなに憧れるようなものじゃないわよ?」

美琴は謙遜している。

美琴は自分の部屋の前にたつ。

なんだかその部屋から妙な空気が漏れ出ているように見える。

「ちょっと待っててくれる?」

美琴は怒りの空気をかもし出しながら言う。

「「「は、はい。」」」

3人は何も言うことができなかった。

美琴は部屋の扉を開ける。

「お姉さま。」

予想通り白井が美琴に飛びつく。

ドコッ。

なにやら鈍い音がひびいた。

そこで3人は扉から部屋の中をのぞく。

「こんにちわあ。」

もう佐天は美琴と白井のじゃれあい慣れてしまったみたいだ。
堂々とその部屋に入っていく。

「さ、佐天さん。」

初春は佐天を呼び止めながらも部屋に入っていく。
優も何も言わずにその部屋に入っていく。

「こおら。黒子。」

抱きつかない。

それにそんな格好してどうしたのよ!!」

美琴は白井に向かって言う。

白井は大人の女性が着るような格好をしている。

（あれは、絶対に世の中の『幼女愛玩者』^{ロリコン}はすぐに飛びつきそうだなあ……。

いや、逆に飛びつかないのか？

頑張って背伸びをしている中学生って萌えるんじゃないかな・・・。

優は前世の感覚で白井の様子を見ていた。

「わぁ〜憧れのお嬢様のお部屋〜。」

「おっしゃれ〜。しつく〜。」

「結構片付いているわね。」

初春、佐天、優はそれぞれの感想を言う。

佐天はベットに飛び座る。

「うわっ。」

ベットもふわふわ〜。」

そして初春と優もそのベッドに座る。

「ほんとだぁ〜。」

「うわ。本当にやわらかい。」

「ったくあんたは何考えてんの。」

隣のベッドでは美琴が腰かけ白井は顔をうつぶせにしてベッドにう

つぶせになっている。

しかも服はいつもの常盤台の制服だ。
いつのまに着替えたのだろうか。

「お姉さまこそどうして初春と佐天さんと上条さんを？」

「たまたま街であつたのよ。」

初春と佐天さんは買い物に付き合ってもらつたし、
優は面白い話題を提供してくれたしね。」

「買い物おゝ？」

「あつうん。ちよつとね。」

「凄いですねえ。」

常盤台の女子寮。うらやましいなあ。」

「食堂なんかもこおんなにでつかかったもんね。」

佐天は自分の腕で大きさを表現するようにいう。

「そんなことないよあ。」

「え。あるつて。」

こつちなんて食堂なんて本当に食堂つて感じたもの。
ここ（常盤台）の食堂なんてなんというか・・・専門料理店のレス
トランみたいだったし。」

優も言う。

なんだか急に白井が胸を抑えて暴れだした。

「あの白井さん大丈夫ですか？」

「白井さんのこれが通常運転でしょ？」

初春が聞き優が答えた。

「さあさあ大したおもてなしは出来ませんがどうぞお好きに。」

白井が復活を遂げて美琴に擦り寄りながら言う。

（美琴もすぐに蹴散らそうとしないのは嫌っては無いつて事なんだろうなあゝ。）

ガサガサガサ

「佐天さん。そこでなにを？」

佐天はベッドの下をあさっている。
衣装ケースを一つ引っ張り出して、
まだ衣装ケースのふたは開けていない。

「いやあゝ友達の家に来たらまずはお約束のがさいれかなって。」

「いやそんな常識みたいないい方されてもそれ常識じゃないからね？」

優は佐天のがさいれに突っ込むが、

「でも、ここまできたら私も参加。」

優はつきつきと佐天の取り出した衣装ケースの蓋を開ける。

「うおっ。エロス。」

佐天は真っ先に見えた黒の下着を取り出す。

（この下着美琴のじゃないから・・・白井さんのだったりしないよね・・・。）

優は衣装ケースの中身を見ながら思う。

「さっすが御坂さんおっとなあ。」

「いや、それは・・・。」

「わたくしのですわ。」

「白井さんの？」

初春が不思議そうに聞く。

そして白井は黒の下着はレディーのたしなみという。
つぎに佐天は赤い蝶を催した下着を抱え白井に聞くと、
それは気持ちを盛り上げたいときにはくという。
つぎに殆ど紐なＴバックは肌にあとが残らないから重宝するという。
さらには全身メッシュなボディストッキングは女には時に雌豹にな
らなくてはならないという。

（絶対に私はあんなのはかない。）

優は思う。

微妙に男性意識を持っているのを差し引いても白井の持論は受け入
れがたいものだった。

佐天と優は同時に動き出した。

その動いた先とは・・・初春のスカートをめくることだった。

「いきなり何するんですか。佐天さん。上条さん。」

「いやゝなんか自分の日常を取り戻したなって。

初春の縞パンみたら落ち着いたゝ。」

「確かにこつちを見たら自分の日常に戻れそう。」

優も佐天に次ぐ。

「ほら他にも色々ありましたよ?。」

白井はどんどん下着を見せてくる。
オープンブラにフリル付きのベビードールなど

そして最後に少女趣味満開の下着を見せる。

「よかつたあゝ。」

白井さんもそんなはんくんだ。」

初春と佐天が言う。

「あつそれ美琴の・・・。」

あの下着は見たことがある。

何度か美琴は能力の練習のあとに汗を流すために優の寮の風呂に入りに来ていた。

そのときに洗濯したのにこの下着をみた記憶がある。

美琴は優が言い終わる前にその下着を白井の手からぶんどる。

「「え？」」

初春と佐天が驚いている。

「つつつか黒子!!」

なんであんたのベッドの下に私の下着があるわけ? ええ?」

美琴が白井の頬をつねりながら言う。

「まあまあ御坂さん。」

そうだ。私アルバムがみたいな。」

「あつそれ定番だね。」

初春と佐天は話題を変える。

それからまず美琴のアルバムを見ることになった。

「わあかわいい。」

初春と佐天がいう。

優もアルバムを良く見ている。

「でも以外だね。」

「なにが？」

「だって御坂さんってLv5で常盤台のエースじゃないですか？
なんかいいとこのお嬢様で子供の頃からエリート街道まっしぐら
みたいなあ。」

「そんなことないよ。」

私だって、最初はLv1だったし全然普通の子だったって。」

「あゝ！！」

初春が声を上げる。

「どうしたの初春。」

「コレ見てください。」

初春は表示した画像を佐天に見せる。

そこには小学生高学年くらいの美琴いつもの気だるそうな顔をし

て髪をポニーテールにしている優が写っていた。
二人は振袖で写っていた。

「上条さんだ。」

「あゝこれは一緒に初詣に行った日だったっけ？」

「そうそう。」

優って『寒い、めんどくさい』って言いながらも私が呼んだら来てくれたわねえ。』

しかも振袖まで着て。」

二人は昔話で盛り上がっている。

「じゃあ次は白井さんの。」

「ええ喜んでと申したいのですが、あいにくわたくしアルバムは持ち合わせていませんの。」

黒子は今を生きる女。過去を振り返るよりも未来を夢見るよりも今を今この瞬間を見つめていたい。
そう心に決めておりますのよ。」

佐天は白井の本棚をあさっている。

「これじゃないの？」

佐天は一冊のアルバムらしき本を持って言う。
すると白井は声を上げながらその本を取りに行く。

「ダメって言われたら見なくなるね。」
ムーブポイント
『座標移動』。」

優は佐天の持っているアルバムらしき本を手で触れずにテレポートさせ、自分の手のうちに取る。
そのまま優はそのアルバムを開き。

「え……。」

パタン。

速攻閉じた。

「一体なにが？」

初春は優の持っているアルバムを手に取り開く。

「ああ……。」

そこには美琴の寝顔や着替え、風呂の写真が何枚も張られていた。
そして美琴は白井の頬をまたつねる。

「確かにあんたは過去や未来よりも今この瞬間を見つめなおす必要があるわね。」

急に白井はシリアスコメディみたいな雰囲気をかもし出す。

「お姉さま今日が何の日か覚えていらっしやいませんか？
初春と佐天さんと上条さんを連れてきたのもそのためだ……。」

美琴は初春と佐天さんとはであって一週間だということを言う。

プール掃除は好きですか？

優達はベッドの間に机を出してそのうえにお菓子とジュースをだして話している。

「たしかに私達が出会ってから1週間が経つのねえ。」

なんだか色々あった気がする。

「私はもう年単位の付き合いだけどねえ。」

優だけは昔から美琴や佐天、初春と付き合いがある。

そういえば部屋の片隅で『冷たいおしるこ』を飲みながら落ち込んでいる白井とは半年前にあったのが発端だったような気がする。

「そういえば御坂さんと上条さんの出会いって聞いたことないですね。」

「確か美琴が能力の練習をしていたときだったかな？」

えーと佐天さんが雷が落ちるとか言う都市伝説を言ってたとき。」

「ああ、あの時だったんだ。」

ズズー

「そうそう。あの時私が演算を間違ってたね。」

土手を通りかかった優に電撃が当たりそうになったのよ。」

ズズー

「え？それで上条さんは大丈夫だったんですか？」

ズズー

「優ってば私の電撃を防いだというよりも消失させたのよ。」

ズズー

「あのときは驚いてあれしか出来なかったのよね。」

ズズー

「そのあとだったわね。」

私に優が演算式の間違いを指摘してきて、一緒に演算式考えてそれから、優の家にもいったし一緒に初詣にも行って。」

ズズー

「うんうん。」

本当にあの時の初詣は面倒だったんだから。

そのときの電話が確か「来なきゃ。電撃だからね。」だったかしら？」

ズズー

「あはは。そうだったわね。」

ズズー

「うるさいわね!!」
どうしたのよ一体!!」

白井が冷たいおしるこをすすっている音がうるさかったため美琴が切れた。

（なんか長くなりそう・・・。）

白井が語りだすと優は窓から外を見ることにした。
寮の玄関の前には、郵便のトラックがきている。

「確かあんた突然のここに押しかけてきたわね。
偶然でも運命の赤い糸でもなくさ。」

それで何？喜び？悲しみ？やけじるこ？よくもそこまで言えたもの
よね。」

美琴が白井の頬をつねる。

「わたくしはただお姉さまと今日という日をささやかに祝い」

（白井さんのあそこまでつねられても赤くはれない頬はどうなっ
ているんだろう。）

すると部屋のインターフォンがなった。

「はい。」

「宅配便です。」

208号室白井黒子さんのお部屋でよろしいでしょうか？」

（あのトラックか。）

「はい。あの品物は？」

「パソコン部品とありますが。」

「送り主は？」

「有限会社。愛と漢方の接輪媚薬さまからです。」

「ってそこを明記してどうしますのー!!」

急に白井が奇声をあげた。

「黒子。」

ささやかにお祝いするのになんで媚薬がいるのかしら？

あんたの変態性質を治すには相当の荒療治が必要みたいね……。」「

美琴が切れている。

電撃が飛んでいるのもそのせいだろう。

（あゝこれは戦闘になるかな……。）

優は初春と佐天の前に行く。

「え？上条さん。」

「いったいどうしたんですか？」

「その名の通り真っ黒こげになりなさい!!」

そして・・・。

優達の目の前は青白い光で一杯になった。

アンチスキルシールド
「A S S 情報連結。」

優は初春や佐天の前に立ってA S Sをはる。

そして電撃は部屋の扉を破壊した。

もちろん優のA S Sにも当たったが優はコレを無効化する。

そしてレポートで廊下に逃げた白井を追って美琴が行った。

「あちゃゝ。」

美琴が切れたら手をつけられないからなあゝ。」

優はのんきに言う。

「だ、大丈夫なんですか？

白井さんは・・・。」

「あゝ多分大丈夫。美琴はちゃんと手加減を知っているし、殺しま
ではしないと思う・・・。」

自信ないけど・・・。」

優達は部屋の影から廊下で戦いだす美琴と白井を見る。

急に美琴の動きが固まった。

「上条さん。あの白井さんの後ろにいる女性は・・・。」

「わ、私に聞かないで。
何でも知っているって訳じゃ……。」

そしてその女性が話し出すと白井も固まった。
優はちよつと情報をあさる。

（常盤台の寮監さんか……。
はっ？LV4を三人相手にして勝つなんて……。）

優は信じられない情報に驚く。

優はその寮監を見ると……。白井がつかまれて首を

ボキッ

「ひっ。」

「「ひっ。」」

「まじ？」

白井が首を折られて捨てられた。

「「ひ、ひい。」」

初春と佐天が優に抱きつく。

「初春、佐天さん。
私言つとくけど何も出来ないからね？」

そういつて二人を抱きしめる。

優は未だにその寮監を見る。

あつ美琴が・・・動けないでいる。

あのいつも勝気な美琴がここまでおびえるのだ。

優も少々巻き込まれて固まっているが柵川中学の二人は放さない。

「罰が必要だとは思わんか？御坂。」

「は、はひつ。」

優達、柵川中学校組みは常盤台中学組みと分かれて、
ジャンクフード店に入った。

「どう落ち着いた？」

優は初春と佐天に聞く。

「はい。」

「うん。」

「それにしてもあの寮監・・・」

「怖かった・・・。」

優達はジュースを注文して飲みながら放す。

「そついえば御坂さん。
もう渡せませたかね？」

「どうせなら渡すところも見たかったね。
せつかく買い物に付き合ったんだから。」

「え？何を？」

買い物の内容をしらない優がきく。

「白井さんへのプレゼントですよ。」

「へえ〜。美琴も考えるねえ。
よしじゃあ見に行こうか。」

優は立ち上がりながら言う。

「え？どうやって・・・。」

「私のテレポートでもぐりこみます。」

優はキリッつとしながらいう。

そして優は二人の手をつないでテレポートを開始した。

優は常盤台中学の美琴たちの寮にあるプールの近くにある小屋の上に着地した。

「うわゝ。ひろゝい。」

「これは・・・広いですね。」

「これだけで水どんだけ使っただろう・・・。」

三人はプールを見たはじめての言葉はそれだった。

美琴と白井がちょうどプレゼントを渡しているところに現れたのだ。
った。

「あつ。白井さんの顔が真っ赤ですよ。」

「すごい喜んでるみたいだね。
選んでよかったかも。」

「さて・・・昼から皆で遊ぶために私は手伝ってくるよ?」

「あつ私も行きます。」

「私も。」

優が言うと二人もついてくることになったので一緒に白井と美琴の隣へテレポートする。

「へ?」

ゆ、優に初春さんに佐天さん。どうして・・・。」

「いやゝ。つつい渡すところを見たくて・・・。」

「私がテレポートで運んできました。」

優と佐天がうきうきという。

「はあ・・・。」

「それじゃあとつとと終わらせて遊びに行きましょう。」

優が能力を使おうとする前に美琴の声が入る。

「ここのプールの掃除が終わって水入れたら遊んでもいいってあの寮監が言ってたわよ。」

寮監がそんなこというなんて凄い。

「じゃあとつとと洗って泳ぎましょう。」

「でも私達水着なんて・・・。」

「ちっちっちっ。」

忘れてない？私の能力。」

すると優の手の中に二人の使っている水着が現れた。

「これで遊べるでしょ?。」

優は二人の水着を『座標移動^{ムーブメント}』したのだった。

優はさらに演算をする。

先ほど美琴の後輩がしていた様に小さな水の竜巻を何十個と発生させる。

「エイッ!」

優が手を振ると全ての竜巻が縦横無尽にプールの中を動き回る。しばらくするとプールはピカピカになった。

「よし。終了。」

「これだったら優を呼んだら早かったわね・・・。」

美琴が落ち込んでいるが優は無視をする。

優はまだプールの中にいる美琴と白井をプールの外に上がらせると、

パチンッ

指を鳴らした。

するとプールにみるみる水がたまる。

「さあ遊ぶぞ。」

いつの間にか着替えた佐天が飛び込んだ。

「あつ待ってください。」

初春も飛び込む。

続いて着替えてきた美琴と白井もプールに入り最後に優も飛び込む。
途中から美琴の後輩二人も入って遊んだ。
そして7人は夕方までプールで遊んだ。

プール掃除は好きですか？（後書き）

時間系列？

はぁ・・・。アニメ版にしたら食い違っちゃったw。

まあいつか。時系列気にせず突き進もうw

学舎の園？それはお嬢様学校の集まりなのです。

「楽しみですね」

学舎の園。」

初春は手を胸の前で合わせて言う。

「でもさーそれってただ女子校が集まってるだけな街でしょ？」

「その集まってる学校が普通じゃないんです。」

「そういえばあそこってお嬢様学校が集まってるんでしょ？
いかにも初春好きそうだねえ。」

初春の隣りに座っている優が言う。

「今日は白井さん達が招待してくれたから入れますけど
そうじゃなかったら私みたいな一般庶民は一生縁のない場所なんですよ。」

「まあ私は入ろうと思えば不法侵入だけど入れるよ。」

初春が言う横で優が言う。

「あー確かに上条さんはレポートで行けますねえ。」

初春を挟んで座っている佐天が答える。

三人はバスに乗って『学舎の園』に向かっているのだった。

「ん。これって…。
なぐんだ。」

佐天さんだって今日行くケーキ屋さんチェックしてるじゃないですか。」

「だってパステイシアマラニカーニなんだよ。」

「パス…なんとかって何？」

優はケーキなど自分で作って食べるので店の情報は全くない。

「ケーキ屋さんですよ。」

初春が教えてくれた。

「厳選された素材をイタリア本国と寸分違わぬレシピで焼きあげたチーズケーキはまさに芸術作品って書いてあるでしょ！！」

これ前から一度食べてみたかったのに日本じゃ学舎の園にしか出店してないんだもん。」

佐天が顔を赤らめながら言う。

「佐天さんって意外とミスターなんですね。」

「へえ。」

それはレシピを頂かないと…。」

優はパステイシアマラニカーニのケーキの味を盗もうと考える。

「次は学舎の園入口。」

バスが学舎の園につく。

「うわっ。」

降ってるねえ。」

佐天が雨が降る空を見ながら言う。

「私傘持つてないよ。」

「大丈夫ですよ。」

3、2、1」

初春が時計を見ながら言う。

すると今まで降っていた雨は見事に上がった。

「本当にこの学園都市の天気予報は正確だね。」

「確か、この天気予報はツリーダイアグラムの一部の演算能力で出されるんだっけ？」

「ほえ。」

私そこまで詳しいことを知りませんでした。」

優の言葉に初春は素直に驚く。

「でもちよつとぐらい外す茶目っ気があってもいいのになあ。」

（私は天気すらも操れるんだけど…まあ黙っておこう…。）

「でも少し前に一度だけ外れましたよね？」

「ああ」

あつたねえ。」

優達が中学校に上がってから一度だけ天気予報が雨と言っていたのにその日は快晴だった日があつたのだ。

（私がやったなんて言えないなあ…。）

その日は優が突拍子もなく「天気は操れるのだろうか？」と思い雨雲の情報連結を解除したら快晴になったのだった。

「あれは面白かつたねえ。」

だって天気予報のお姉さんはあたふたしてたし。」

優はニコニコと初春達の話に混じった。

「『『うわぁ。』』」

三人の声が聞こえる。

「す、凄い。

これが学舎の園。」

初春は今にもスキップを始めそうだ。

「外とは違うデザインの信号機にヨーロッパ風の建物。

まるで別世界みたい。」

佐天は色々な所を見ながら言う。

（やっぱりお嬢様ばかりだな。見た感じ。）

優は通り過ぎて行く人を見ながらいう。

しばらく三人は学舎の園を回ることにした。

「なんだか私達注目されていませんか？」

初春が視線に気がついたのか聞いて来る。

「多分、外の制服が珍しいんじゃないの？」

「多分ね。」

「あつ約束の時間まであと少ししかありませんよ。」

初春が時計台の時計を見ながらいう。

「じゃあ急がないと。」

佐天は勢い良く振り向き走り出す。
そして水溜まりで足を滑らして転んだ。

「あーあ。」

大丈夫？佐天さん。」

優はコケた佐天に手を貸して立ち上がらせる。

「うへ」

ぐちよぐちよ。」

佐天は濡れたスカートや服を気持ち悪そうに肌から離す。

「初春さん。佐天さん。優いらっしやいまし。
どういたしましたの？佐天さんその服。」

「いやゝ転んじやいまして。」

「でその転んだ先に水溜りがあつてね。」

佐天はお気楽に言つのを優が詳しく言つ。

「じゃあ着替えないとね。」

佐天が常盤台の制服に着替えている。

初春はご機嫌ななめだ。

佐天が着替えを終わり、出てきた。

「どうサイズは？」

「はい。ピツたしなんですけど、スカートが短くてスースーします。」

佐天がスカートを抑えながら言つ。

「佐天さんだけずるいです。」

初春がすねたように言つ。

「そうであゝ。」

私の制服と交換しましょう。

そうしましょう。

それがいい。」

初春が自分の考えを押し付けようとしている。

「小さすぎて無理だつてば!!」

「ようは初春さんは常盤台の制服が着たいんだね？」

御坂があきれたように言う。

「はい。」

ですから佐天さん。

変わってください。」

「じゃあ優お願い。」

「はあ分かったわよ……。」

初春服のサイズは何？」

「Sサイズですが……。」

優は初春に手を出すように言つてその上に自分の手をかざした。

「『、常盤台制服Sサイズ、情報連結。』」

すると光の粒子があつまり初春の掌に常盤台中学の制服が現れた。

「わあ。

上条さんありがとうございます。
でわ。私は早速着替えます。」

初春はとつと着替えるために個室に入っていった。

学舎の園？それはお嬢様学校の集まりなのです。（後書き）

テスト期間が始まってしまったので、投稿が少し遅くなるかも知れません。

なにせ私の成績はまさに底辺を行っているので・・・がんばらないと。

佐天さんが狙われたっ！？

「うわぁ」。

チーズケーキもいいなあ・・・
いやこっちのショートケーキも・・・。」

初春がショートケースに並んでいるケーキを見ながら悩んでいる。

「まったく。」

初春。ケーキは逃げないからね？」

優はあきれたように初春に言った。

「では、上条さんは何にするんですか？」

佐天が優に聞いた。

「そりやもう、店の实力を知るにはショートケーキしかないでしょ？」

優はすぐに答えた。

もちろん優の持論であるが・・・。

「へ、へえ」。

佐天はあきれたように言った。

携帯の着信音が鳴った。

「初春の携帯じゃない？」

「あつ。」

初春は電話を取る。

「はい・・・はい・・・分かりました。」

「お仕事ですの？」

白井が初春に聞く。

「はい・・・。」

食べたかったなケーキ・・・。」

初春のテンションは低くなる。

「初春さんの分も買っておくからいつてらっしゃい。」

美琴が初春に言う。

「は、はい。」

「お願いしますね。」

初春と白井はケーキ屋の扉を開けっ放しで出て行った。

「初春って・・・今常盤台の制服なんだけど・・・。」

「多分着替えていくんじゃない？」

もちろん初春は柵川中学校の制服に着替えていかずに風紀委員の先輩に怒られたようだが
優達はもちろん知らないことだった。

「私ちよっとお手洗いに。」

佐天はトイレに行った。

佐天がトイレに行ってから少々時間がたっている。

「遅いねえ佐天さん。」

優は普通にトイレに行くにしては長い佐天の帰りを待っている。

「紅茶冷めちゃうよ。
見に行ってくるわ。」

美琴は席を立ち佐天の入っていったトイレに行った。

「佐天さん!!」

美琴の声が聞こえてきた。

「優来て!!」

美琴が呼んできたので優はトイレに向かうとそこには佐天が美琴に支えられて倒れていた。

「佐天さん!!」

優は佐天に近づき能力を使って体の様子を見るがどこもおかしいところはない。

あるとしたらスタンガンが何かでも当てられたのだろうか腹部にある2箇所ふたところの軽い火傷だけである。

「どこにも異常は・・・。」

優は美琴に佐天の状況を伝えようとしたがその途中で佐天の顔を見てしまった。

ぐくっ。

優は唾を飲み込んでしまった。

「常盤台狩り！？」

優達は白井達に連絡を取り、常盤台の風紀委員室にいる。
そこで白井からいままで起こった事件の共通点からわかったことを
聞くと決まって常盤台の生徒がやられているのだ。

「そうか。」

うちの制服を着ていたせいで……。」

「それで体の調子はどうなんですか？」

さすが佐天の親友である初春はそれを心配する。

「体の調子は問題ないけど・・・。」

優は歯切れ悪く佐天の体の調子を言う。

「ただ・・・。」

美琴が優のあとを、ついで言葉を発するが、途中できつた。

「それで犯人の目星は付いているの？」

美琴は白井に聞く。

「それが、少々やつかいな能力者のようでした。」

白井は申し訳なさそうに言う。

「その厄介な能力って？」

「目に見えないんです。」

美琴の質問に初春が答える。

優は何かを考えるようにあごに手を当てる。

(・・・目に見えない能力・・・
トリックアート
『偏光能力』？

いや、これは自身の周囲の光を捻じ曲げ、誤った位置に象を結ばせ

周囲の目を誑かす能力だから

一応姿は見えるし・・・

やっぱり私の良く使う『タミ―チエック認識阻害』？

あれなら姿は消せるし・・・。）

ピッ

白井がボタンを押す音で優は思考から戻ってきた。

（考えるときに周りが見えなくなるのは治さなきゃ・・・。）

優は密かに考えるのだった。

「被害者には見えない犯人ねえ・・・。」

美琴は椅子に座って頬杖をしながら言う。

「最初は光学操作系の能力者を疑ったのですが。」

「姿を完全に消せる能力者は・・・学園都市に47人いますが、その全員にアリバイがあつて。」

「それ以前に監視カメラには写ってるんでしょ？」

光学操作系って言うのはちょっと違うんじゃない？」

「そうなんですの。」

白井は外の景色に視線を移しながら言う。

「ねえ優。」

姿は消えるけど監視カメラには写る能力ってないの？」

美琴は優に話を振る。

「え？」

「そこで私？」

「だって優って色々な能力知っているでしょ？」

確かに優は色々な能力を駆使している。

美琴はその駆使している能力の中に姿を消す能力が無いかを聞いたのである。

「ん〜。

ダミーチェック
認識障害ぐらいかなあ。」

優は先ほど考えていたことを美琴に言う。

「ダミーチェックですね。」

初春はパソコンを操作しながら話に参加する。

「対象物を見ているという認識そのものを阻害する能力です。

該当する能力者は一名。

ちゅうふうくみほ
関所中学校2年重福省帆。」

初春は画面に顔写真を出しながら言う。

「そいつですわ？」

白井が声をあげるが、

「でもこの人レベル2です。
自分の存在を完全に消せるほどの能力ちからはないと実験データにあります。」

初春が白井の声を否定する。

「でもねえ……。
書庫バンクの情報って信用ならないのよねえ。」

美琴が優を見ながら言う。
初春と白井も優を見る。

「そうでしたわね。」

「ああ……。」

初春と白井は納得したようだ。

「それに私じゃないけど、幻想御手レベルアップって言う代物もあるみたいだし・
・。」

優が言う。

「何ですか？レベルアップとは？」

白井が食いついてきた。

「どうにも能力値を上げる物みたいなんだけど……都市伝説の一

「つだからねえ。」

優はネット上で探してはいるが、いまだレベルアップを見つけていない。

別に急いでいないので能力を使わずに探しているからだ。

「うううん。」

佐天の声が聞こえてきた。

優達の視線は佐天のほうに向いた。

「あたし……。」

佐天がゆっくりと起き上がってくる。

「佐天さん？」

「無理しないで。」

初春と美琴が声をかけるが……

佐天の顔を見ると白井も混ざって、ついつい笑い出してしまった。

その佐天の顔……正確には眉に、油性ペンでだろうか……ぶつとく眉が書かれている。

「へ？」

佐天は何がなんだか分からないので頭の上に？を浮かべている。

「見てみたら？」

優は情報連結で作り出した手鏡を佐天に手渡して、自分の耳を手でふさいだ。

「はあああああ？」

佐天の叫びは常盤台の校舎に響いたのだった。

「佐天さん。
気を確かに・・・ぶっ。」

ついつい初春が笑い出してしまう。

「シヨックだよね。
そりゃ。」

美琴も佐天の眉を見ながら言う。

「せめてこのくらい前髪があつたら隠せましたのに。」

白井は重福の画像を出しっぱなしにしている初春のパソコンを見ながら言う。

「前髪？」

佐天はパソコンの近くによってきてその画面を見る。
すると、

「こ、こいつだ？」

佐天が画面を指差しながら声をあげた。

「あなた犯人を見ましたの!？」

「はい。」

あのととき・・・鏡の中に・・・。」

「鏡に監視カメラ。」

美琴は呟くようにいう。

優は補足説明みたいに話し出す。

「鏡に監視カメラに写るのはダミーチェックは肉眼で見る相手に限られているから。」

「ふっふっふ・・・。」

佐天の笑い声が怖い。

「さ、佐天さん？」

優はちよつと引いている。

「この眉毛の恨みはなさねおくべきかつ!!」

佐天が画面を指差しながら言う。

「そうだねえ自分も女の子なのに、顔の大事さっていうのを知らないのかな・・・。」

ちよつとO H A N A S H I・・・もといお話をしなくちゃ・・・。」

優は物騒なことを呟いているがスルーをすることにする。

「やるよ!!初春!!」

佐天がやる気満々でいる。

「はい？」

こうして治安を守る風紀委員ジャッジメントの数よりも一般人のほうが多い
搜索隊が結成された。

学園都市製のインクあなどるなかれ

カタカタカタカタカタ

初春がキーボードを叩く音が連続して聞こえてくる。

初春の前には数多くのモニターが持ち出され、すべてのモニターは、初春が操作していく。

「なんかすごいね。」

美琴が関心しながらいつている。

「こうでもしないとここにある端末じゃ処理が追いつかないんです。それより、学舎の園は177支部の管轄じゃないんですけど大丈夫なんですか？」

「上からの許可取り付けましたわ。」

今まで電話をしていた白井が言う。

「いよっしゃあー!!」

「どーん」と行ってみようか!」

佐天は勢いよく言う。

「はいはい。どーん。」

初春の気の抜けた感じの声とカチツという音がした。

すると画面にどんどん新たなウィンドウが現れて映像が映し出されていく。

「学舎の園の監視カメラ全2458台接続終えました。」

初春が報告する。

「『『『『おお。』』』」

その場にいた人たちが感心の声をあげた。

（これで一つも能力を使っていないんだから…初春はあなどれないなあ…。）

本当に初春は情報処理能力だけが高い。

「待つてろよ。前髪女！！」

必ず見つけ出してやるからな！！」

重福は佐天に名前すら覚えてもらえ無いみたいだ。

「約束のケーキ忘れないでくださいよ。」

「3個でも4個でも好きなだけ食べてよし！！」

「わあい。」

「多いわね…。」

優は呟く様に言う。

「多すぎるわね。」

美琴も同じように言う。

「そんなにケーキ食べたら初春太っちゃうよ。」

「いや。優ケーキの話じゃないんだけど…。」

美琴が優の言葉に突っ込みをいれた。

「初春エリアE HとJとNは無視ですわ。」

初春は言われた通りに監視カメラの数を削る。

「あの辺りは常盤台から一番遠い場所ですからうちの生徒はほとんどいかないんですの。」

白井はそういった理由で場所を削ったらしい。

優はあまり学舎の園に詳しくないので何ともいえない。

「じゃあ人通りの多い場所も後回しね。」

美琴も提案する。

「え？なんですか？」

佐天が聞き返す。

「犯人の服装…学舎の園じゃかなり目立つと思わない？」

「「「あつ確かに。」」」

美琴の理由に柵川組は納得する。

「一目のあるところではずっと能力をつかっている?」

「多分ね。けど。」

「能力をずっと使っていることは出来ない。でしょ?」

美琴の言葉を遮り優が言う。

「どこか一目につかないところで息を潜めている?」

「そ。正解。」

「と言つことは...。」

初春はどんどんカメラの数を削っていった。

「みいつけた。」

私のかわいい眉毛の仇きっちりとらせてもらっからね。」

佐天が言う。

「最近の子は顔をけつたり悪戯するのが好きなんだねえ。」

佐天の横で壁に背もたれている優も言う。

すると、今回の犯人である重福は能力を使い姿を消した。

「ほんとに消えた…。」

佐天が感心している。

《感心している場合じゃありません。
おってください。》

耳につけている小型無線機から初春の声が聞こえてくる。

「おっと。そうだった。」

佐天は帽子を被りなおす。

「じゃあ飛ぶよ。」

優は佐天の手を握りテレポートをする。

優たちは空をテレポートを使って重福を追いつめる。

《そこから3番目の出口です。》

また初春の声が無線機を通して聞こえてくる。

優はその位置にテレポートで降りる。

タッタッタッタッタ

何かが路地で走る音が聞こえてくるが姿はみえない。

足音が一瞬止まると別方向に向かって走り出したのが分かった。

重福はある公園に入った。

能力を使いすぎたのかももうダミーチェックは消えており、姿は丸見えである。

シュン。シュン。

二人のテレポーターが重福の後ろに立ち、そのテレポーターの一人と空間を飛んできた佐天は帽子を脱ぐ。

「鬼ごっこは終わりよ。」

美琴が乗っていたブランコから降りた。

「な、なんでダミーチェックが効かないの？」

重福は不思議に思っている。

「さあね。」

美琴はその疑問をぶった切った。

「これだから常盤台の連中は――！」

美琴の上から目線に怒りでも感じたのかスタンガンを取り出して美琴に飛びつくが…

何度やっても美琴には電撃は効かない。

「残念。私こういう効かないんだよね。」

美琴指と指の間に電撃を発生させながら言う。

そして美琴は重福のスタンガンを美琴に突きつけている腕に当て電撃を流して気絶させた。

「初春。」

容疑者を拘束したとアンチスキルに連絡してくださいな。」

《はあゝい。》

気の抜けた声が無線機越しに聞こえてきた。

「おつかれ初春。」

「さあてと。」

優。油性ペンお願い。」

佐天は優に油性ペンを出してもらう様に頼んできた。

「あまり気乗りはしないんだけどなあ…。」

といいつつも優は情報連結で油性ペンを作り出し佐天に渡す。

「ふっふっふ。」

どんな眉毛にしてあげましょう…か？」

佐天が眉毛を書くために長い前髪を掻き上げると…短い石原。純よりもぶっといげし眉が現れた。

そこで重福は目が覚め眉を腕で隠した。

「おかしいでしょ？」

重福は言う。

「笑いなさいよ。笑えば良いわ。あの人みたいに。」

どうやら事情がありそうだ。

「『『『あの人？』『』『』」

重福は昔彼氏を常盤台の人にとられた事を話し。

「そして何より、この世の眉毛が憎い!!」

重福は明らかにオーバーアクション風に言う。

(いやいや。この世っていいすぎでしょう。)

「だからみんな面白い眉毛にしてやろうと思ったのよ!!」

「え〜とごめん。

途中から話が見えないんだけど…。」

「美琴ごめん。

私も分からない…。」

「何よ。どうしたのよ!!」

笑いなさいよ!!」

真正面からいわれる佐天は言葉につまるが…。

「えつと…変じゃないよ。

そのくらい…そう。ちょうどいいチャームポイントだよ。
あたしはそれ好きだなあ〜。」

佐天は言う。

「それにその眉毛が嫌なんだったら眉毛切ろうとは思ったことあった？」

優は重福に聞く。

「…思いました。
でも…なぜか切ることが出来ないんです。」

重福は答えてくれた。

「そう。」

「じゃあそれは嫌いなんじゃないよね。
本当に嫌いなんだったら私なら即行切って眉毛を描くし。
結局は自分自身もその眉毛の事好きなんじゃない？」

優は重福に言い聞かせるように言う。

「…はい。」

重福は気持ちの整理をしていたのだろうか返事に時間がかかった。

「じゃあね。」

そのチャームポイントを活かせるように考えればいいのよ。
ちゃんとその方法を見つけ出してもっともっとその眉毛が好きになるうか。」

「は、はい！―！」

重福は優の言葉に元気よく返事をした。

「あ、あのお手紙書いてもいいですか？」

重福はアンチスキルの車に乗る前に優と佐天に聞いてきた。

「いいよ。」

佐天は即答するが優は…

「んゝ手紙はちょっとごめん。返せる自信がないから…でも拘置所にはたまに遊びに行つてあげれるかも。」

面倒くさがりな性格なので手紙を返せる自信がないのだった。それに拘置所には知り合いのアンチスキル（黄泉川）に頼めば多分いれてくれるだろう。

「は、はい。」

ありがとうございます。」

重福は車に乗って搬送されていった。

「彼女完璧に姿消していたよね。」

美琴は思い出したように言う。

「確かレベル2という話でしたのに。へんですわね。」

「やっぱり優が言っていたレベルアップって存在するんじゃない？」

「まさか…。」

「どうなってるのよ!!」

事件の翌日佐天の部屋から叫び声が聞こえた。

「へ？他の被害者の方ですか？」

初春が誰かと話している。

《それが第10学区で開発された特殊なインクラしくてね。一週間は絶対に消えないって。》

「佐天さん。また帽子を用意しましょうか？」

「あの女…やっぱり落書きしてやれば良かった…！あっそうだ。

優なら消せるかも…。」

「なら上条さん呼びますね。」

初春は電話で優を呼んだ。

「はあい。呼ばれて飛び出てじゃじゃじゃん。」

寝起きで何やらテンションがおかしい優がテレポートで佐天の部屋に現れた。

「あのインク消せますか？」

初春は慣れた感じで優に聞く。

「どれどれ…あついける。じゃあ消すよ。」

『対象の情報連結を解除』。」

するといつも通り光の粒子が出来、佐天の眉は元通りになったのだった。

いいタイミングです。

「これは、先輩の彼氏が実際に遭遇したって言う話です。」

上から周りを暗くするために布をかぶり佐天が、
携帯の明かりで顔を照らしながら言う。

「ある蒸し暑い夏の夜。

その彼氏さんが人気の無い公園を通りかかった時のことです。
一人たたずんでいた女の人に駅までの道を聞かれたんです。」

そこで光源の少ない中で佐天は話を聞いている優達を見る。

「彼氏さんがこころよく説明していると、どこかつるな女の人
がふわぁと手を上げて・・・突然ガバツと。」

佐天は片手を握りながら言う。

「ガバツと・・・。」

美琴が真剣な声で復唱する。

「ブラウスを脱いだんです。」

佐天は言った。

「全然全く怖く無いじゃん？」

美琴が上に被せた布を取り払いながら叫んだ。

持ち上げた布は佐天と初春にかぶさる。

「まったく。」

急に叫ばないでよ。

私が防音空間作っていたから問題はなかったけど……。」

優は呆れながら言う。

怖い話の場合叫ぶ人がいたら駄目なので優達の机の周辺だけ外に声を漏らさないように

防音空間を作って（情報連結して）いたのだ。

「せっかく雰囲気を作ってもそんな話ではね。」

白井が呆れながら言う。

「ええ。遭遇したら怖くないですか？
いきなり脱ぎだす都市伝説『脱ぎ女』」

「怖くない。」

というよりそれってただの変質者じゃないの？」

美琴はきっぱりという。

「じゃあじゃあこんな話はどうですか？」

初春はパソコンを取り出して美琴達に見せる。

「風力発電のプロペラが逆回転するとき、街に異変が起きる……！」

初春はパソコンの記事を読んでいく。

（それは風向きが変わるぐらいだと思っけど……。）

優は声には出さないが心の中で思う。

「夕方4時44分に学区をまたいではいけない。
幻の虚数学区に迷い込む。」

佐天が言う。

「使っただけ能力が上がる道具。『レベルアップ幻想御手』。」

代わり変わる佐天と初春が言う。

「レベルアップって優が前言ってた奴じゃない？」

美琴が初春の話を聞いて優に聞く。

「ああ。言っただけ見つからなかったわよ？
今のところは。」

優は毎日の様に探しているのだがいまだ見つかっていない。

「ほ、本当にあるんですか……？」

初春が優に乗り出すように聞いてくる。

「多分ね・・・。」

白井さん今までで能力値が書庫と違う人っていないかった？」

優は初春をいなしつつ白井に聞く。

「そうですね・・・。」

佐天さんたちと最初に会ったあの日の郵便局の『発火能力者（パイロキネシスト）』と先日ダイ ChecKの『認識阻害』の人達の能力は事件時に使われた能力値よりも書庫の情報とは食い違いましたし・・・。」

白井はここ数日のことを思い出しながら言う。

「能力値は普通は数日では簡単にあげることが出来ない。」

私だってレベル4からレベル5になるのに何ヶ月もかかったのよ。」

美琴は言う。

「多分そのレベルアップを使ったんだろうけど・・・存在はまだ確認していないのよ。」

優は少し悔しそうに言う。

「私も探してみましようか？」

初春が提案してくる。

なにやら裏がありそうな雰囲気があるが初春に任せればいいだろう。

「暇ならお願い。」

「それにしてもそんなくだらないサイトを見るのをおよしなさいな。」

」

白井はレベルアップというのを軽視しているようだ。

「大体都市伝説なんて非科学的な話。

ここは天下の学園都市よ。」

「むゝロマンがないなあ。」

佐天が呆れたように言う。

「でも実際の事件が形を変えて噂になっている場合もあるんですから。」

「どんな能力も効かない能力を持つ男っていうのは学園都市ならではって感じじゃないですか。」

美琴はこれを聞いて考えだす。

「くつくつくく。」

そんな無茶苦茶な能力あるわけじゃないですね？お姉さま？」

白井はその能力を全否定するが・・・。

「ああ。私、出来るよ？」

優が言う。

「へ？もう一度お願いしますわ。」

白井は聞き返す。

「だから私は能力を打ち消すことは出来るって。」

優は確かにA S Sを使えば能力を無効化することは出来る。

「でもこれは男ですよね？」

佐天が聞く。

「ああそれは多分、私のお兄ちゃんのことだと思う。
お兄ちゃんも能力を打ち消せるから……。」

「都市伝説ってやっぱり存在するんですよ!!
そういえば、私昔話してた非人道的な事をしていた研究所がつぶさ
れているって話したことあるじゃないですか?
その犯人は多重能力者だって噂の。」

佐天は喜びながら昔の話を持ち直してきた。

「それってもしかして上条さんなんじゃないですか？」

初春はここぞと話に入るが……。

優の携帯に着信が入った。

優の携帯の着信音は某魔砲少女一期のオープニングだったりする。

「はい?……え?……ほんと?……うん……分かった今か
ら行く。」

優は電話を切るとみんなに向き直り。

「ごめん用事が入ったから帰るね。」

なんともいいタイミングで電話が入ったものだ。

優は防音の情報連結を解除して自分の飲み物代を机の上においてファミレスを小走りで後にした。

「なんだか上条さん。急いでいる様子でしたよね？」

初春が美琴達に言う。

「そうですわね。」

まるで、予想しなかったことが起こったかの様にあわててましたし。

「

白井にとつての優はいつも気だるそうにっていて、いざとなったら頼りになり、

いつも落ち着いているというイメージがあったのだ。

でも切れたときは恐ろしいが。

そのほかの人達も同じようだ。

その優はと言うと、ファミレスから見えなくなるとテレポートを使って空間を飛び、

さっきの電話の主のところまで飛んでいく。

さっきの電話・・・アクセラレータからなのだが、急に研究所から連絡があつて、実験の日をずらして今からやるといわれたので優に電話してきたのだ。

最近の優の研究所つぶしは『絶対能力者進化（レベル6シフト）』
に關係する研究所もつぶしているので研究者達は焦ったのだらう。
そして優はミサ力を助けるために実験場である操車場に向かって連
続でレポートするのだった。

アクセラレータは・・・幼女愛玩者？（前書き）

とりあえず生存報告。

実は地震には私の所は問題なかったのですが親族が巻き込まれてしまい、

色々こつたがえしていたので、すっかりこの駄文のことを忘れていたこと

お詫び申し上げます。

今回の話は短いですが、どうかお許しください…。

久しぶりすぎてどんな感じで自分が書いていたのか思い出せません；
；

アクセラレータは・・・幼女愛玩者？

優は昼間から行われる実験で重症を追ったミサ力をかえるの医者に届けてからテレポートを使わずに自分の寮まで歩いて帰る事にした。今日はまだ日が出ているので歩いて帰る。優はある場面に遭遇した。

「お気をつけて。」

美琴が走り去る青い車に手を振っている。

（あれは・・・ランボルギーニガヤルド？）

優は走り去る青い車を見ながら思う。

「つつか自分が車止めた駐車場、分からなくなるってどうよ・・・。」

美琴は駐車場の出口から外に出ようと優のほうへ振り向くが・・・そこに優の姿は消えていた。もちろん美琴は優がいたことを知らないので何とも思わない。

手近なビルの屋上に転移していた優はというと。

（なんで逃げちゃったんだろ・・・。）

自分が美琴から逃げた理由が分からなくなっていた。

優がビルの屋上から美琴を見下ろすと美琴は手を上に突き上げながら言葉を発しているようだが
流石にここからは聞き取ることが出来ない。
手を下ろしてから猫背で歩いていくが・・・。

（なんか今降りていける雰囲気じゃないよねえ・・・。）

優は美琴の纏う雰囲気によって美琴の前に出るタイミングを失っていた。

（んゝあれはお兄ちゃん？）

優は美琴から目を話して周りの様子を上空から見回してみると当麻の姿が美琴の横の路地にあるのを見つけた。
だがそれは上空から見えていたからこそわかった事で当人達はまったく知る由の無かったことである。

そのまま優はビルの上から見ていると・・・当麻がこけた。

「ぎゃあああああ！！！」

当麻の叫び声がビルの屋上まで聞こえてくる。
その声を聞いてその路地を美琴が見ると・・・ちょっとした間のあと美琴は当麻を指差し、

「さっきはよくも私を置いて逃げたわね！！」

人にやかいかいごと押し付けておいて、自分はお買い物かぁ!!」

美琴は叫んだ。

その声は十分ビルの屋上まで聞こえる声量だ。

「貧乏学生にとって特売品を手に入れるかどうかは死活問題なんだ
!!」

常盤台のお嬢様には分かるまい!!」

当麻も美琴に劣らず大声で叫ぶ。

「こつちだって大変だったんだから、汚れたスカート脱ぎだすわ!!
しょうがないから洗ってあげるわ!!
あぐくの果てにはツンツ……。」

美琴は言葉に詰まる。

(ツンツ?……あつツンデレか。)

優は美琴が次に言いかけた言葉を思い浮かべながら少々笑う。

「と、ととにかく勝負しなさい!!勝負!!」

「ああ、優はここで何してんだア?」

優が眼下で行われている光景を見ると後ろから声を掛けられた。

だが、ここはビルの屋上なのだ。
普通の人は気がつかない。
だが、この口調は優は知っている。

「アクセラレータ？」

優は後ろに立っている白い少年に向かって振り向きながら言う。

「よオ。」

白い少年・・・アクセラレータは右手に持ったコンビニのビニール袋を持ち上げながら言う。

「なんでここに？」

先ほども書いたがここはビルの屋上である。
地上の道ではない。

「上見てたら優が見えたからなア。」

アクセラレータはコンビニの帰りに空を見ると優が見えたから風のベクトルを操作し、飛んできたのだ。

「付きまとい！？アクセラレータってストーカーなの！？」

優は周りに叫び声が聞こえないように防音の空間を作ってから叫ぶ。

「ンな訳ねエだろうがア！！」

アクセラレータは優に言い返すが・・・あまり説得力は無い。

「そういえば・・・アクセラレータって幼女嗜好ロリコンだったよね。」

優はとても薄くなってきた原作知識を持ち出す。

「ちげエよー!」

アクセラレータは全力で否定するが・・・優はまったく信じていない。

「はいはい。そういうことにしておいてあげるわよ。」

優は白い目をアクセラレータに向けながら言う。

「だから違っつて言ってるだろうがアアアア。」

優はアクセラレータをいじり倒して遊んだ。

「あれ？美琴とおにいちゃんが消えてる...。」

優は散々アクセラレータをいじり倒した後、美琴と当麻のいた路地を覗き込むが誰もいない。

ついでにアクセラレータも優から逃げるようについさっきいなかった。

「まあいつか。」

優は、美琴達を探すのも面倒なので、帰って寝ると決め込み空間を移動した。

風紀委員の喧嘩。

「ふあああねむ……。」

優は、ベットからのつそりと出ると冷凍庫に入っていた冷凍食品を適当に温め食べると
私服に着替えて玄関から歩いて外に出る。

「ふふふーん。」

今日はいい散歩日和である。

優は今日はアクセラレータの実験が休みであるため機嫌がいいのである。

ある学校の近くを通りかかったとたん

ファンファンファンファン

車の防犯装置が作動した音が鳴り響いた。

「んーいった方がいいのかなあ……。」

優はたまには事件に巻き込まれない日があってもいいような気がしているのだが……。

「はい。そこまですわ。
ジャッジメント
風紀委員ですの。」

器物損壊および窃盗の現行犯で拘束します。」

という聞きなれた白井の声で

（白井さんがいるなら問題はないかな？
大体車上荒らしみたいだし。）

優は白井はいるのでスルーをしようとそのまま歩き去ろうとしたのだが、

ドンッ

っと音がしたあと白井の声が聞こえ・・・

「どけえ！！」

男の声が聞こえて誰かが崩れる音がしたため、急遽その防犯装置の聞こえるところにレポートした。

「初春！！」

「だ、大丈夫です。」

白井が初春に駆け寄り、初春が無事であったところに優が現れた。

「ど、どうしたの？」

「か、上条さん!？」

いつから見ておりましたの?」

急に隣に現れた優に白井は驚くが・・・

「は、犯人は!！」

初春は、優のことなどお構いなしに白井に聞く、

「逃げましたわ。」

「じゃあ私追いかけてくる。」

白井が初春に報告するが、優が途中で割り込み、テレポートで姿を消した。

「あつ上条さ・・・行ってしまいましたわ・・・。

風紀委員でもない一般の学生が能力を行使するちからなと言おうと思いましたが、」

白井は呆れながら言った。

（んーとりあえず、上空に来て見たはいいんだけど・・・犯人の特
徴聞いてない・・・。）

優は学園都市の上空を能力を使用して、姿を消しながら飛ぶ。

もちろん監視カメラ、レーダーには映らないようにすべての視覚情
報をもごまかしながら。

優は車上荒らしの犯行現場を見ていないため犯人の顔なんてしらな
いのだ。

（ミサカネットワーク接ぞ・・・いや普通にインターネット回線で
いいや。接続。）

優はネットワークを利用して犯行があった学校の監視カメラを確認
しようとしたが・・・。

（は？犯行現場に監視カメラないし・・・。）

いくらハッキングしてもあの駐車場に監視カメラが見つからないの
だ。

（もういいや。一番近くで逃走経路に使われそうな道と監視カメラ
は・・・これで・・・。）

ようやく優は犯人の映っている監視カメラを見つけたが、

（もついないわよねえ・・・。）

流石に逃げられてしまった。

とりあえず犯人を取り逃がしてしまったことを白井と初春にメールで伝え、

優は自分の散歩に戻った。

「あれ？おーい佐天さん！！」

優はちょうど佐天が風紀委員の177支部に入っていく所を見かけたので、声をかけた。

「あつ優じゃん。

どうしたのこんなところで？」

「散歩コースです。

佐天さんはどうしたの？」

「補修のプリント初春に手伝ってもらおうかと思って。」

佐天は無能力者と判定されているため今日は補修があったのである。

「んー私も教えてあげるし、まあ入ろうか。

多分初春と白井さんもいるんじゃないかな？」

優と佐天は支部に入る。

「こんにちわー。初春来てますかー？」

佐天は入った早々支部にいた先輩、固法に聞く。

「またあなたたちの？」

まったくここはたまり場じゃないのよ？」

「はい！！わかってます。」

でも今日はちゃんと理由が……。」

佐天は鞆を漁りだす。

「補習のプリントでしょ？」

「そのとおり。私の補習のプリントー」

初春に手伝ってもらおうかとおもってえー。」

「私はお手伝いしようかなと思ひまして。」

優は固法にお辞儀をしながら言う。

「まったく、上条さんがいるんだったら教えてもらえばいいのに。」

固法は佐天の隣に立っている優を見ながらいう。

「いやー一人よりも二人の方が早く終わるかなと思ひましてね。」

優は固法に言う。

「はあ仕方ないわね。」

初春さんなら……ほら……。」

佐天は初春を見つけると初春に向かって走っていく。

「でも今は止めておいたほうが・・・。」

「固法さん。多分佐天さんはあんなったら止まりませうーいはるうーん。」から。」

優が言い終わる前に佐天は初春のスカートをめくる。

「!」

固法が驚くが・・・。

「いつものことですから気にしないでください。」

佐天が初春のスカートをパタパタとするが初春はまったく反応しない。

「初春どうしちゃったんですかー。」

佐天が固法に困り顔で聞いた。

「ちょっとね。」

「んー。」

優は伸びをする。

「まさか私が犯人を追いかけた後にそんな事があつたなんてねえ・・・。」

要するに初春と白井の喧嘩が起こっていたらしい。

「だったら風紀委員を辞めちゃえばいいのに。」

佐天がパソコンをいじりだした初春を見ながら言う。

「そんな無責任なことを言わないで。」

風紀委員は警備員と並ぶ学園都市の治安維持機関なのよ。」

固法は佐天に諭すように言う。

「んー確かに治安維持機関って言うてもいいかもしれないけど・・・。」

優は口を挟みだす。

「けどどうしたの？」

固法が聞き返してくる。

「いや・・・昔あることを聞いたことがありますね・・・。」

優は歯切れ悪く言う。

つつい口が滑ってしまった優なのである。

「何を聞いたんですか？」

佐天が優に聞いてくる。

「いやぁねえ・・・風紀委員も警備員も上層部は結構汚いことをしているっていう事を聞いたことがあります・・・。」

実験という名目の殺人、監禁、障害致死等の隠蔽を風紀委員も警備員もしているという噂を優は聞いたことが・・・いやその現場を目撃したことがあるのだ。

その後、その隠蔽をしていた風紀委員や警備員の空間把握能力を情報操作して、

慣れるまでの間、視野が狭くなり、机や扉の角と言う角に足の小指をぶつけるというある種、

最悪な呪いみたいなものをした。

「詳しく聞かせて貰えないかしら？」

固法が深くまで聞いてこようとする。

「ある違法研究所から上層部が賄賂を貰って、警備ルートや配置、構成員の情報を流しているという事も聞きますし、犯罪の容認なんかも聞いたことがありますね。」

詳しくは優は言わない。

「え・・・それって・・・。」

佐天は聞いた事を信じれないという感じにいる。

「完全な犯罪ね。」

まあそれが本当であつたのならね。」

固法も頭の中では罪状を考えている。

「でも噂ですしねー。」

優は手をひらひらと振りながらごまかすのであつた。

優と佐天、固法が他愛もない話題で話していると初春が177支部から走って出て行った。

「そろそろ頃合かな？」

そういつて優は初春がいつも座っているパソコンの前に座る。それと同時に優の携帯が鳴る。

「はい。・・・あー美琴？・・・うん。・・・出て行ったわよ？・・・分かった。」

優は電話を切り佐天と固法に言った。

「さてあの二人の仲直りの瞬間でも見ましようか。」

「え？」

「もしかして監視カメラにハッキングするとかじゃないわよね？」

固法は今から優がすることに気が付いたみたいだが・・・。

「ダメですか？」

優は固法に上目遣いで聞く。

「ダメです。」

やはり女には効かなかったみたいだ。

「はあ・・・まあいつか。」

あの二人だもの問題はないわね。」

そういつて優は椅子から音を立てながら外を眺めるのだった。

虚空爆破事件。序章（前書き）

遅くなってすみません。

テストががが…。

実は火曜日からもまだテストなんです…。

虚空爆破事件。序章

「ジャツジメントです!!
ただちに非難してください。」

優はジュースを買ったためにこのコンビニに訪れていたのだが、事件に巻き込まれた。

「一体この店になにか？」

店主の言葉は最もだろう。

「この店で重力子の加速が観測されました。」

「重力子…？」

普通は聞きなれない単語だろう。

「この店に爆弾が仕掛けられた可能性があります。」

ジャツジメントの女性が言うと店内の客が悲鳴を上げながら我先にと入り口に殺到する。

優はまだ店内の奥のジュースの並んだ場所にいる。

となりには入り口が込んでいるのを見ている女子がいる。

今行ってもこの店から脱出するのは時間がかかるだろうという考えがこの二人にはあった。

（重力子の加速…シンクロトロン量子変速かな？）

優はたまに使う能力を思い出しながらこの事件に使われた能力を推測する。

ようやく入り口が開いてきたため、女子が向かいだすが、急にしゃがみこむ。

「大丈夫？」

一番近くにいた優が気付いて聞く。

「足挫いちゃった…。」

女子は足首を押さえながら優に答える。

「ほら。」

ちゃんと持ってね。」

そう言つて優は女子の腕を自分の肩に回して立ち上げる。

ところが…優は急に違和感を感じて振り返る。

そこには、可愛いウサギのぬいぐるみがゆがみ、収縮を始めていた。

「大丈夫ですか!？」

今頃、こちらに気がついたのか爆弾を探していたジャッジメントが気がつく。

「逃げろ!!」

優は一気に収束したぬいぐるみを見つめながらそのジャッジメント

に叫ぶ。

ジャッジメントもそのぬいぐるみに気がつくが、もう遅い。
ぬいぐるみが臨界点を向かえ、爆発を起こした。

「大丈夫ですか！！
怪我は！！」

店主に説明と避難誘導をしていた女のジャッジメントがこっちに向かってくる。

そこには、蹲っている女子を介抱する男のジャッジメントと爆心地の方向に手のひらを向け、
不可視のバリアを張っている優の姿があった。

床は、優のバリアの後ろは綺麗なままだが、それ以外の場所は見ると無残にめくれあがっている。

「大丈夫です。」

バリアを張っていた優は女のジャッジメントに向かって微笑みながら言った。

「『^{グラビトン}虚空爆破事件』？」

優は爆破事件に巻き込まれた次の日、学校で初春からこの事件の概要を聞いていた。

一応、被害者なため、少々の情報提供を受ける権利はあるだろう。

「ええ。」

一週間前から連続で爆発が続いているんです。

それも段々と威力、範囲ともに拡大していつてますし…まだ死者は居ませんけど

重軽傷者は多数出ているんです。

言っちゃ悪いですけど昨日の上条さんのおかげで怪我人がいなかったのがこの事件が始まってから初めてのことなんですよ？」

「物騒ねえ…。」

「上条さんなら余裕で重力子とやらを消せるんじゃない？」

隣で聞いていた佐天が言う。

「不意打ちじゃなかったらねえ…。」

昨日のは本当に危なかったんだから。」

「不意打ち出なければ、やっぱり重力子も消せるんですね…。」

初春が呟く。

「最近消滅をする機会がなかったから忘れちゃったよ。あせってバリアを展開するぐらいしか出来なかったし。」

「あの短時間であれだけ出来れば問題ありませんよ…。」

初春は昨日の一部始終を知っている。

なぜなら初春は、あの店の監視カメラを調べたのだから。

最初はあるぬいぐるみを仕掛けた人物を探すために調べていたのが全く手がかりがなく。

気がついたら優が出てきたので驚いたそうだ。

授業開始を知らせるチャイムになる。

「ほら初春も佐天さんも自分の席に戻った戻った。」

しぶしぶながらも初春と佐天は自分の席に戻っていった。

今回の授業は能力開発カリキュラムに関する事なので優は起きていなければならぬ。

「ゆーっつかえろ。」

佐天が言ってくる。

授業も終わり、学生が思い思いの行動を始める放課後になったのだ。

「初春は？」

「今日はジャッジメントの仕事なんだって。
つれないなあー。」

「あはは。

どうする？ゲーセンでもいく？」

そついいながら二人の足は繁華街へと向かう。

「佐天さーん！！ゆうー！！」

道の反対側から聞き覚えのある声が聞こえてくる。

「黒子と一緒に初春さんも大変でしょ？」

紙コップのジュースを片手に公園の椅子に腰掛け、美琴が話し出す。

「みたいですねー。」

今日も買い物誘ったんですけど断られちゃって。」

佐天が言うが…

「あれ？いつ話してたの？」

休み時間には初春と佐天と一緒にいた優はそんな話聞いていない。

「授業中にねー。」

優は後で誘っても大抵来てくれるって分かってるし。」

確かに優が佐天や初春の頼みごとをほとんど聞いている。

なぜかそのタイミングが一方通行達と会う日が被らないのが不思議なのだが。

「一応私にも予定つてものがあるんだけど…。」

「そういえば私の誘いも簡単には断らないわねえ。」

そういえば美琴のも断ったことは数回だろう。

「それにしても初春さんと黒子は爆弾魔が捕まるまでは仕方ないか。」

「はあ…。」

佐天がため息を吐く。

「どうしたの？」

「いや、なんだかねーって感じなんですよねー。」

「？」

「なんていうか…初春や白井さんはジャッジメント頑張ってるし、御坂さんはすごい人だし、優だって凄い能力持ってるし。あたしはなーみたいなの。」

佐天は悲しそうな目で言う。

「あーえーと、すいません。」

そんな重い意味じゃないんです。

ただ私にも能力があつたら毎日が変わるかもーって。」

一気に佐天の目に光が戻り元気に振舞う。

「あーあーレベルアップとかあればレベル5も夢じゃないのになあー。」

「レベルアップ？」

「確か、能力のレベルを簡単に引き上げてくれる道具じゃなかったっけ？」

優が言う。

「はい。」

都市伝説の一つなんですが…。」

「へー。」

「脱ぎ女が居るくらいですからひょっとしたらなーって思っ」

佐天が氷を食べながら言う。

「まああるわけないですよ。あはは。」

佐天は笑う。

「ねえ、みんなで行こっか。」

「へ？」

「いいじゃない。初春と白井さんにも休憩が必要だと思っしね。」

優はその夜、自室でパソコンに向かいあることを調べていた。

それは今日初春から聞いた『虚空爆破事件』グラビトンに関してだ。

普通にネットの掲示板を見ていくがスレといった話題とはなっていないが、どれも似たような内容で大したことは書かれていない。

次に優は、能力を駆使して、書庫バンクにハッキングをする。

（『量子変速』シンクロトロンで爆弾化に使えるほどの能力を持っているのは一人…

でも、事件が起こる前から原因不明の昏睡状態に陥っているから犯行は無理。

次に検索に引っかったのは介旅初矢。かいたひつや

でもこいつはレベル2…レベルアップがこの事件には関係していたような気がするから…

ありえるわね…。

あーもうなんで大きな事件のことすら紙に書いておかなかったんだろ…。」

優は原作知識を思い出そうと隆起になっているが、まったく思い出せずに居た。

「それにしても…。」

優はパソコンの横に置かれている音楽プレイヤーを見る。

「レベルアッパー…手に入れちゃったわね…使う気はないけど…。」

このプレイヤーにはレベルアッパーの音楽が入っているのである。

「さてと…解析でもして、どういう原理なのか調べてみましょうか。」

そういつて優の夜は過ぎていったのだった。

虚空爆破事件。序章（後書き）

ついに優がレベルアップを見つけちゃいました。

虚空爆破（ゲラビトン）事件。（前書き）

や、やばいかも…。

テストだって言うのについて書いてしまった。

虚空爆破（ゲラビトン）事件。

優達は次の日、集まって『セブンスミスト』に向かっている。

「それにしても白井さんがこれないのは残念だったねえ。」

優はジャッジメントの腕章をしている初春に言う。

「ええ。爆破事件の事を調べるんですのって意気込んでました。」

「まったく黒子も息抜きをしないといつかぶっ倒れるわよ。」

美琴も白井のことを心配しているのだろう。

「まあ倒れたら上条さんがいますもんねー。」

佐天が言う。

「なんで私？」

「だって上条さんなら簡単に治せるでしょ？」

私が怪我したときみたいにくぱぱと。」

佐天はあのクレープを食べていると銀行強盗に遭遇したときのことを思い出しながら言っているのだろう。

「んー確かに外傷的な怪我なら治せるけど精神的な怪我はちょっとよく分からないからね…。」

外傷的な怪我なら優はすぐに情報操作を用いて治療することは出来るが、

精神的な怪我、疲労や精神病、恋煩いなどは治すことが出来なくはないが、その人物の人格を破壊させてしまう場合があるため優はしたくないのだ。

「上条さんに出来ないことがあるなんて逆に驚きですよ。」

初春は笑いながら言う。

「あははできないことの方が多いって。」

優も笑いながら言い返すのだった。

して、優、美琴、初春、佐天の4人は『セブンスミスト』に入っていた。

「ん？」

優は自分達が入ってきた入り口の方を振り向く。

「どうかしめた？」

初春が気になったのか聞いてくる。

「いや、誰かに見られてたような気がして…。」

優はしばらくその入り口の方を見ているが…。

「こっちを見ている人なんていないじゃない。」

美琴の言葉で引き戻された。

「こっちこっちー。」

佐天ははしゃいでエスカレーターを駆け上がる。

「佐天さん転ばないようにねー。」

優は佐天に言う。

「もう私はそんな年齢じゃありません。」

「つい半年ぐらい前まで小学生だったのに。」

「それは上条さんですよー。」

優も佐天に追いつく。

美琴と初春はエスカレーターの流れに身を任せている。

「初春ー。ちよつとちよつとー。」

ちよつと初春達がエスカレーターを抜けたところで佐天から声がかかる。

優は店の中には入らずに通路で立っている。

「なんですかー?」

初春が佐天に近づく。

「じゃーん。こんなのはどう?」

佐天はワゴンの中から出した下着を初春に見せる。

「む、無理ですよー。」

そんなの履けるわけじゃないですか!ー!」

初春は顔を赤らめながら言う。

(…無理…ちよつと逃げよう…。)

優はそつとその場から離れる。

どうもこういうランジェリーショップというのは苦手なのだ。ちよつとした前世の名残ともいえる羞恥がある。

優はランジェリーショップの脇の道からパジャマ売り場を目指す。今使っているやつは、結構長い間使ってきたため少々綻びが出てきたのだ。

優はパジャマの置いてある店でシンプルそうなパジャマを眺めている。

ちなみに数店先には美琴の好きそうなパジャマが飾ってあることも確認済み。

優は多分美琴はあそこで止まるだろうなーと思いながらパジャマを選ぶ。

白を基調としたおとなしめのパジャマだ。

（んー速乾性のこれでいいかな？）

優が選んだのはお値段的にもリーズナブルなパジャマだ。

「なにやってんだビリビリ？」

優は会計を済ませて袋を持ってパジャマを持って通路に戻ると予想通り美琴が

パジャマを鏡の前で合わせて置いてその後ろに当麻が居る。

美琴は持っていたパジャマを後ろに隠して当麻に向き合う。

「な、ななんであんたがここにいんのよ!!」

「いちゃいけないのかよ。」

当麻は美琴の言葉に返事をする。

「お兄ちゃん。」

優は兄である当麻に声をかける。

「おつよう。優もここに来てたのか？」

当麻は美琴を置いて優に聞く。

「まあね。」

パジャマ買った。

また泊まりにくる？」

優は話しかける。

「あんた、実の妹に手を出してなんか居ないわよねえ？」

美琴が怒りをこめた声で言う。

「してないしてない!!」

当麻は慌てる。

「うそ…あの時あんなに激しかったのに…。」

優は顔を赤らめながら言う。

「あんた！！してるじゃない！！」

美琴は放電を始める。

「本当にしてないんだってば！！信じてくれ！！」

優は流石にやばいと思ったため、

「美琴！嘘。嘘！！」

冗談だって。お兄ちゃんが泊まりに来たことはないよ。」

優がネタばらしをする。

「本当に？」

美琴が疑り深く聞いてくる。

「本当に！！」

美琴の放電が止まる。

優は美琴に近づき耳元で…

「お兄ちゃんって無自覚フラグメイカーだから、先に取っておいたほうが無難よ？」

と呟いた。

「なななななな。」

美琴の顔が真っ赤になる。

「お兄ちゃん。」

子供の女の子の声がして、こっちに向かってくる。

「あつ常盤台のお姉ちゃんだ。」

髪を横でくくった女の子が美琴を見て言う。

「え？」

美琴は何かを思い出そうとしている。

さきほどの真っ赤の顔色は元の顔色に戻っている。

「ああカバンの…。」

「お兄ちゃん？」

私にこんな可愛い妹が居た記憶はないんだけど？」

優は当麻に言う。

「違う違う。」

俺はこの子が洋服店探してるって言ったからここまで案内してきただけだ。」

「あのね。お兄ちゃんに連れてきて貰ったの。
私もテレビの人みたいにお洋服でおしゃれするんだもん。」

優はその女の子の言葉を聞いて一安心する。

知らぬ間に両親がもう一人子供を作っていたのかもしれないという
疑惑が浮かんでいたのだ。

「そうなんだ。」

今でも十分おしゃれで可愛いわよ。」

そういつて美琴は女の子の頭をなでる。

「短パンの誰かさんと違ってな。」

当麻は美琴に目を向けながら言う。

「ん？何よやる気！？」

美琴は女の子から手を離して当麻に向き直る。

その間に女の子を連れてちょっと二人から遠ざかる優。

「だったらいつぞやの決着を今ここで！！」

美琴が構える。

「お前の頭の中はそれしかないのか。」

大体こんな人の多い場所ではじめるつもりですか？」

当麻はあきれながら言う。

「あつ。」

優が少し声をあげる。

ちよっと手を離したら女の子が当麻の服の端をつかみに行ったのだ。

「ねーねー。お兄ちゃんあっちみたい。」

危ないと思って優は女の子を連れて逃げていたのだが…。

「おっ分かった。」

当麻は、女の子を連れて女の子の指を指した方向に向かう。

「じゃあねーお姉ちゃん。」

女の子が手を振ってくる。

それに美琴と優は振り返した。

「で、美琴？その服買うの？」

優は美琴の隠している服を指差す。

「え？ああ…。」

「どうかしたんですか？」

佐天達が帰ってきた。

「…なんでもない…。」

美琴はなぜか落ち込んでいた。

虚空爆破（ゲラビトン）事件 解決

プルル プルル プルル プルル

誰かの携帯がなっている。

「初春の携帯じゃない？」

優は初春のポケットの中で鳴っている携帯を指差しながら言う。

「あつ。」

そういつて初春は電話に出るが、

「はい。もしも」

『初春！！
ゲラビトン 虚空爆破事件の続報ですの！！』

初春が電話に出ると、周りにいた優達にも聞こえる大きな声がスピーカーから聞こえてきた。

『学園都市の監視衛生が重力子の爆発的な加速を観測しましたの！！』

「観測地点は！？」

相変わらず大きな白井の声が聞こえてくる。

『現場近くの警備員を急行させるよう手配しておりますの。
アンチスキル』

あなたは速やかにこちらに戻りなさい。」

「ですから！！観測地点を！！」

『第七学区の洋服店セブンスミストですの！！』

その声を聞くと同時に優はこのセブンスミスト付近の重力子の情報を見る。

（どこ！！爆弾は！！）

こんなところで爆発させたら被害が！！）

だがなかなか引つかからない。

「セブンスミスト…だったら丁度良いです。

私今そこに居ます。

すぐ避難誘導を開始します。」

そういつて初春は携帯を切る。

初春は優達に向かって

「落ち着いて聞いてください。

犯人の次の標的はこの店なので御坂さん上条さんすみませんが、避難誘導に協力してください。」

「わかった。」

美琴は返事をして、優は頷く。

「佐天さんは避難を。」

「うん。初春も気をつけてね。」

佐天は一瞬悲しそうな表情をして走り去る初春を見る。
美琴もあとに続くが優は続かない。

「ねえ佐天さん？」

「え？上条さん行かなくて良いんですか？」

優は佐天に話しかける。

「後で行くけど…佐天さんに頼みたいことがあるの。」

「なんですか？」

「もし爆発してしまった後、野次馬の中から早々と逃げ出すやつをマークしておいてくれない？」

「いいですけど…なんでです？」

優のお願いに疑問を感じたのか佐天が聞いてくる。

「もし、この事件が愉快犯なら絶対に自分の起こした爆発を見ているはず。」

そして爆発でこの店が吹き飛ぶのを見てから自分が怪しまれないように逃げるはず。

小心者なら裏道を通って逃げると思う。」

優は考えを佐天に話す。

「分かりました。マークしておけばいいんですね？」

「ええ。でも手は出さないようにね。

相手は少なくとも1v3以上の爆弾犯。
それに男ね。

自分の足がつきにくい様に爆発させるものは、ぬいぐるみとかに入れているんだと思うし。」

「分かりました。」

なんだか不安そうだが佐天はセブンスミストを出て行く。

『お客様にご案内を申し上げます。』

店内で電気系統の故障が発生したため、真に勝手ながら本日の営業を終了させていただきます。

係員がお出口の前までご案内いたします。』

優、美琴、初春は避難誘導をする。

終わると最後のチェックを初春に任せ、美琴と優は外に出ている。
佐天は野次馬からちよつと離れた部分に居て、野次馬を見ている。

「ビリビリ!! 優!!」

あの子見なかったか？」

当麻が優達のもとに走りよってくる。

「え？見なかったけど…。」

「は？一緒じゃなかったの!!」

「外に居ないんだ。」

もしかしてまだ中に…。」

優は当麻の言葉を聞き終わる前にセブンスミストの中に駆け込む。

「なにやってんのよ!!」

「どっ!!」

優は全力でエスカレーターを駆け上がる。

『アクセラレータ一方通行』を使い地面の反動を全て自分の推進力に変えて走る。

1階、2階の全てのフロアを見て回ったが居ない。
次に3階に上がる。

「あれは!!」

他のフロアを全て優に任せて先に3階に来ていた美琴が声を上げる。

「あ!!」

「逃げてください!!
あれが爆弾です!!」

初春と女の子を発見した優は初春が投げ捨てた収縮を始める蛙の
形を見る。

優の脳内に危険信号アラートが鳴り響く。

急速な重力子の加速によって周囲の空間が捻じ曲がってきている。

美琴が走りよってからでは遅いと感じたのかその場から『超電磁砲レールガン』
を放とうとするが

コインが手から滑り落ちる。

優は高速で演算を開始。

シュン。

空気を切るような音を立てて初春の前に優が現れる。
今から重力子を完全消滅させるには時間がかかる。

「『アンチスキルフィールド
ASF&mp・バリア情報連結』!!」

ASFとはASSを全方向に展開するものである。アンチスキルシールド

能力（魔術も含む）を完全に無効にする全方向の防御用円形フィールドである。

ちなみに優はこれだけでは物足りなく感じたのかバリアもそのフィールドの下に展開する。

そして爆弾は…大爆発を起こした。

爆炎が優達を襲うが優の発生させたフィールドで問題はない。イマジンプレイカー
少し離れた場所に居た美琴と当麻も当麻の幻想殺しのおかげで無事である。

b u b u b u b u b u b u b u b u b u

優の携帯がバイブレーションを発生する。

「はい。」

『上条さん？大丈夫ですか？』

それと見つけましたよ。爆弾犯。』

佐天からの電話であつた。

「みんな大丈夫。
場所は!!」

『よかったー。』

セブンスミストから南にいったところの裏です。』

「分かった!!」

『あのー…この人弱そうなんでぶん殴って良いですか?』

佐天から驚きの言葉が来た。

「え?」

『いや…この爆弾犯…ひょろいから私でもいけそうかなーって…。』

(そんなに弱そうなの!?)

「えーと…んー…あつ。」

優が悩んでいると隣で電話が聞こえていたのであろう初春が優の携帯を奪う。

「佐天さん!!危ないことはやめてください!!」

『初春?私だって鉄パイプがあれば…。』

「それでもです!!」

私が今からそこに行きますので!!」

『…分かった？』

「どうしました？」

『いえ…御坂さんが…今ここに…。』

優はその佐天の言葉を聞くと先ほどまで美琴のいた場所を見る。

（いない…。）

行動力は高い美琴である。

電話口から漏れていた爆弾犯の場所を聞くとたん走って向かったのだ。

優は演算を開始。

その場から一瞬でその裏路地までとんだ。

シュン

優は裏路地の入り口に現れそこにいるなぜか鉄パイプを持っている

佐天を見つけ駆け寄る。

「どう？」

一瞬急に現れた優に佐天は驚く。

「いえ。まだ御坂さんが爆弾犯を蹴り飛ばしただけで…。」

佐天は右手に持っていた鉄パイプを隠しながら優に現状の報告をする。

「そ、そんな馬鹿な！！僕の最大出力だぞ！！」

大きな男の声が聞こえてくる。

美琴が挑発でもしたのだろうか。

優が路地を覗き込むと銀製のスプーンを振り上げている男が目についた。

が、次の瞬間そのスプーンは白銀の光線によって吹き飛ばされた。美琴が超電磁砲を放ったのだ。

その男の手の中にある小さなスプーンに向かって。

「能力ちからのあるやつは皆、そうだろうが!!」

また男の叫び声が聞こえてくる。

美琴が男をつかみ上げる。

「歯を食いしばれ!!」

美琴の声が聞こえ、路地に殴る音が聞こえた。

美琴がこっちに来る。

「えーと…お疲れ様？」

優が話しかける。

「まったく能力、能力って…。」

「あははー。」

美琴はレベル1からレベル5まで普通ではない努力によってここまでの能力ちからを手に入れたのだ。

あんな能力ちからを言い訳にした輩は許すことが出来ないのだろう。

爆発現場に戻った白井は円形に残っている元の建物の色と爆発によって黒く焼け焦げた建物の色を見ている。

「白井さん。」

白井は聞こえてきた声に振り向く。
初春と女の子、佐天が近づいてくる。

「もう心配しましたのよ？」

「ごめんなさい。
でも上条さんのおかげでほらこのとおり。」

初春は無事を白井に見せ付ける。

「お姉ちゃんが助けてくれたの。」

女の子も言う。

初春と共に女の子は顔を見合わせて笑いあっている。

（それにしても…上条さんの方の能力の凡用性には驚かせられますわね…。）

爆発現場に戻った白井は円形に残っている元の建物の色と爆発によって黒く焼け焦げた建物の色を見ながら思う。

（それと…こっちのお姉さまのいた場所…能力をどういう風に使ったらこういうことになりますの…。）

白井は美琴の居たと言う場所にも残っている焦げ後を見ながら思うのであった。

初春の風邪

「え？初春さん休み？」

優は佐天から初春が休んでいる理由を聞いている。

「うん。風邪だつて。」

「んー昨日はあんなに元気そうだったのにね。」

「お腹出して寝たんじゃ…。」

佐天の顔は悲しそうだ。

「うん。じゃあお見舞いにいこつか。」

優は沈んだ顔の佐天に言う。

「あー理論とかどうでもいいから手っ取り早くレベルがあがる授業とかしてくれないかなー。」

授業で急に当てられ宿題になった自分だけの現実についてまとめている佐天が呟く。

出来れば授業終了後すぐに初春のお見舞いにくつもりだったのだが、終わらしてから行ったほうがいいだろう。

「んー無理じゃないかな…」

結局は能力にはそれぞれ演算式が違って、ああいう風に一度に大勢を見る場合ではその授業があっているかも分からないし、レベルをあげるには一瞬の演算能力の向上が必要になるの。

特に空間移動とかの演算式は複雑で3次元から11次元への特殊変換を計算するため他の能力より脳への演算負荷が大きいんだよね。白井さんみたいに連続でテレポートできる能力者なんて片手で足りるんじゃないかな？

ああ私みたいな例外は除いてね。」

ちなみに優の『データオペレーション』はそこまで演算能力を必要としない。細かい計算などせずにイメージで能力を発現する事ができるからだ。

「じゃ、じゃあ上条さん！！私のレベルアップを見てください！！」

佐天は意気込む。

「い、いいけど…今日は初春のお見舞いに行かなきゃね。はい。私なりにまとめた『自分だけの現実』のレポート。」

優は書いていた紙を佐天に渡す。

「ありがとう。」

佐天は喜んでその紙を受け取った。

初春の為に薬を買って初春の居る寮に向かっていると公園で美琴と白井を見かけたため近寄る。

「御坂さーん。白井さーん。」

「佐天さんに優。」

美琴は顔を上げて優達を見る。

「おいしそうですねー。」

優もその佐天の声につられて美琴の手にあるイチゴ味の力キ氷を見る。

「んんんー。」

佐天は頭を押さえながら足をばたばたとさせる。

「それつてもはや夏の風物詩ね。」

「分かってても食べたくなるんですよー。」

「そうね。んー。」

優も頭を押さえる。

「あはは。」

美琴はその様子を見て笑う。

「それってイチゴ味ですか？」

「うん。よかったら一口どう？」

「私も私もー。」

美琴と佐天と優はカキ氷の食べ比べをする。
ちなみに美琴、白井はイチゴ味。佐天はレモン味。優はブルーハワイ味である。

「んーおいしい。」

お返しにどうぞ。」

「ん。ありがと。」

「ひゃあああああああ。」

白井が何か奇声をあげている。

「な、何をしているんですの…。」

「え？食べ比べだけど？」

白井は一瞬止まった後…

「私とも間接キス…もとい食べ比べを…。」

白井はカキ氷の乗ったスプーンを美琴に突き出すが、

「だってあんた一緒のイチゴ味じゃない。」

白井は固まり、

地面に頭を打ち付けだした。

「ええ…大丈夫ですか？白井さん。」

優は真っ赤に腫れ上がった白井の額を見ながら言う。

「黒子の馬鹿馬鹿馬鹿……。」

優は白井を引き上げベンチに座らせ、

「『情報の連結を再構成。』」

とりあえず白井の額を治す。

そんな様子を見ながら美琴と佐天は話している。

「そついえば今日初春さんは？」

「今日は学校休んだんですよ。」

それで私はこれから薬を届けに。」

「かなり悪いの？」

「大したことないらしいんですけど。
やっぱり心配ですしね。」

あのもしかったら……。」

「って事でお見舞いにきつたよーん。」

佐天が元気よく初春の部屋の扉を開け放つ。

「「「お邪魔します。（いたします）」」」

初春はベッドで横になっていた。

「すいませんわざわざ...。」

「気にすんなって。

ちよつと動かないで。」

佐天は初春に体温計を当てる。

この体温計はこの学園都市以外でも発売されている耳で測るタイプのやつだ。

「37.3分：まあ微熱だけど今日は一日寝てること。もうお腹だして寝ちゃ駄目だよ。」

「佐天さんが私のスカートをめくってばっかりいるから冷えたんですよ。」

「いやーだつて親友としてちゃんと初春がパンツはいてるか気になるじゃないですか。」

佐天は優を見ながら言う。

「いや、私に同意を求められても…。」

「ちゃんとはいてます毎日!！」

初春が跳ね起きる。

「はいはい。分かったから病人は寝て寝て。」

美琴が諭すようにいう。

「冷たいタオルを作ってきてあげるね。」

そういつて佐天は台所に向かう。

「あつそうだ白井さん。虚空^{グラビトン}爆破事件の事なにか進展はありましたか？」

「あるといえばある。ないと言えはないですの。分かったのはあの犯人の能力がレベル2だつてことだけですわ。」

「けどあれは間違いなくレベル4の威力だった。」

「そうね。結構あのASFには自信があつたんだけど思ったより衝撃が大きかつたわね。」

アシンスキルシールド
ASSに比べて広範囲な分、少々無効化の処理能力が落ちてしまう

けどレベル4程度なら問題ないと思ってただけど…。」

優はちょっと悔しそうに言う。

「そのおかげで私は助かったんですし。

でも、それはさらに分からないことが増えたって進展ですか？」

「ま、そういう感じですね。」

「そういえば佐天さん。

前にレベルアップがどうとかって言ってなかったっけ？」

「はい？」

「能力のレベルをあげる？

上条さんの能力じゃあるまいし。」

「いやーだから噂ですって。

実態が分からない代物ですし。」

佐天は手を振りながら言う。

「実態が分からない？」

「はい。そうなんです。噂の中身もばらばらで…。
本当都市伝説みたいなものなんです。」

「そっか…。」

まあそんなに都合のいい話なんてないわね。」

美琴が言う。

「んー。」

白井がうなり声を上げる。

「実は書庫バンクに登録されている能力のレベルと被害状況に食い違いがある事件があるケース

今回が初めてではありませんの。

常盤台狩りの眉毛女、銀行を襲った発火能力者パイロキネシスト、お姉さまがご存知の事件だけでも2件それ以外にもレベルと被害状況に差がある事件が多発しておりますの。」

「それって…。」

「『レベルアップバー幻想御手』って存在するんじゃない？」

「何か他に知ってることはない？」

「あとは…使用者達の掲示板があるってことだけですな。」

美琴は佐天を見た後、優を見る。
優は何かを言おうと悩んでいる。

「優、何かあるんじゃないの？」

美琴が促すと優は口を開いた。

「…私持つてるんだけど…。」

「へ？」

「いやだからその『幻想御手』^{レベルアップ}持つてるんだって。」

優はカバンの中から音楽プレイヤーを取り出す。

「そ、それなんですの？」

「はい。」

ただ…これいいものじゃありませんよ？

私の能力を使つて調べたんですが、共感性を利用して使用者の脳波に干渉する音声ファイルなんですよね。

この幻想御手は。」

「共感感覚つて？」

優に佐天が聞く。

「たとえば…今さっき食べたかき氷の頭の痛くなる原因ね。」

一つの感覚を刺激することで二つ以上の感覚を得る。つまりカキ氷の冷たいって言う感覚で痛いっていう感覚が産まれるって考えて良いわね。」

「ちなみに上条さんはそれを？」

白井は聞いてくる。

「使ったことはないけど？」

調べたはいいんだけど…これ使ったらいずれ昏睡状態になるわよ？」

「え？」

美琴が聞く。

「これは簡単に言うと人間の脳をある特定の脳波を繋げた巨大なネットワークを構成していて、

同じ脳波のネットワークに取り込まれることで能力の処理速度が向上して、演算能力が一時的に増加するのよ。

パソコンを並列？直列かな？まあ繋げて処理能力を向上させたようなものかな？」

パソコンなら問題はないんだけど、これは脳波だからね。

使用者は他人の脳波を使うからいずれネットワークに取り込まれて意識がなくなるわよ？」

「えーと…もう少し簡単に…。」

「んーこの幻想御手をパソコンで言う特定の条件で機能するウイルスとして考えて、あるパソコンでは動作には問題はないけど、別のパソコンでは勝手にネットに繋がって演算能力を使われるって感じかな…。」

しかも最終的には全ての機能をネットワークの指示下に置かれて強制シャットダウンってところね。

パソコンは人それぞれの脳、動作に問題のないパソコンをこの幻想

御手の製作者の脳って言う風に考えてね。」

優はなんとなく思いついた例を言う。

「とりあえずこの幻想御手レベルアップを預からせて貰っても?」

白井が聞いてくる。

「どうぞ。」

ただし、絶対に聞かないようにお願いします。
聞いたとしても私の所に来てください。

脳波をいじって治しますので。」

「了解しましたわ。」

白井は頷く。

「あ、ありました。
レベルアップ
幻想御手使用者の掲示板。」

事件は一気に解決に向かっていく。

…はず。

初春の風邪（後書き）

えーと… 停電フラグを回避しなかったのでもうなりました。

本当に停電って怖いんですよ！！

この前の台風のときの落雷でブレーカーが落ちてパソコンの電源が落ち… 書いていた小説が完全消滅とか…。

ちなみにあのヤンキーなお姉さんは… いつか登場させたいと思っています。

木山春生

「大丈夫ですかねー。」

初春は優の音楽プレイヤーを持っていった白井と美琴を心配する。
掲示板を見て、色々裏を取る必要性が出たみたいだ。

「大丈夫だと思うけど？」

白井さんは空間移動能力者の中でも上位だし、美琴なんか学園都市
の第3位なんだから。」

優がいう。

「いえ。私が心配しているのは…白井さんがあの幻想御手を聞か
ないかでして…。」

「え？」

「白井さん。あれでも結構レベル5にあこがれているんですよ。」

「へー白井さんがねー。」

意外である。

「ねー初春。」

もし幻想御手を使ったら私達も本当にレベルがあがるのかな？」

「さあ…。」

でも上条さんが調べた結果はあれは危険なものなんですよね。」

初春が優に確認をする。

「んー確かに使用してから最初の方は問題ないけど急に昏睡状態になると思うけど。」

脳波からこの幻想御手を流した人を探そうと思ったんだけどね……。脳波なんてどこにサンプルが置いてあるか検討もつかなくて……。」

「まあそうですね。」

私も思いつきませんもん。

何度か初春の開いている書庫を見たことあるけど脳波なんて書いてなかったし。」

佐天も思いつかないみたいだ。

「んーあるとしたら私達が能力開発を受けたそれぞれの研究所ぐらいいですかねー。」

今もそのデータが残っているかは不明ですが。」

初春が思いついたことを言う。

「幻想御手かぁー。」

「でもずるは駄目ですよ。ずるは。」

「分かってるって。上条さんのおかげで危険性も分かったし。それに上条さんが能力を使えるように教えてくれるみたいだし。」

「え？それ本当ですか!？」

私にも!!」

佐天が言うつと初春も乗ってくる。

「いや…必ずあがるとは限らないんだけど…」

「上条さんならなんとかしてくれます。」

初春と佐天の声が重なる。

「いや…二人揃えなくても…」

「で？何で私がここに呼ばれたのかな…。」

次の日優はあるファミレスに、美琴と白井によって呼び出された。一緒に遊ぼうとしていた佐天と初春も一緒である。

「だって優がこの中で一番レベルアップ幻想御手について詳しいじゃない。」

美琴が言う。

「そりゃそうだけど…。
で…この人は？」

優は隣に座っている白衣を着た女性を見る。
よく見ると目にはクマが出来ている女性である。

「この人は大脳研究者のきやま はるみ木山春生先生。
今回の『レベルアップ幻想御手』について意見を聞かせて貰おうかと…。
ああそうそう優の言うとおり幻想御手の使用者が昏睡状態になって
いているわね…。」

「君が、この幻想御手を見つけて解析した人物かい？」

木山が優に聞く。

「ええまあ。」

優は肯定する。

「それで幻想御手とは一体どういうものなんだ。」

木山は聞いてくる。

優は昨日、美琴達に説明をしたものを木山に説明する。

「なるほど…。」

脳波パターンは分かるのかい？」

「一応は音楽のリズムや音の高低、音量などから出してみたのがこちらです。」

優はカバンの中から脳波パターンを書いた紙を取り出す。

「ふむ…。」

木山は優の出した紙を見ている。

「これは貰っても？」

「どうぞ。こちらデータはちゃんと持っていますので。」

「ありがたくいただこう。」

優と木山が話している横で美琴達は優の取り出した紙について話している。

「確か上条さんって来たとき手ぶらでしたよね。」

「え、ええ…手が机の下に入ったと思ったらあの紙を持っていたし…。」

「もしかして、今作り出したんじゃ…。」

「だとしたら優はあのデータを暗記しているってこと?。」

ちなみに上から初春、白井、佐天、美琴である。

「私の方でも調べてみよう。」

「ええお願いします。」

「それにしても…暑いな…頭を使うとすぐに体まで火照ってしまっ
」

すると木山は席を立ち上着とストッキングを脱ごうとする。

「なっ!?!」

優は驚愕すると同時に目を背ける。

「だから!?!」

人前でぬいじゃ駄目だと言ってますでしょうが!?!」

白井の叫び声が響き渡る。

「しかし…起伏に乏しい私の体を見て、劣情を催す男性がいるとは…。」

木山の落ち着いた声が聞こえてくる。

「趣味思考は人それぞれですよ!!
それに殿方でなくても、歪んだ情欲を抱く同性もいますのよ!!
ねえ!!」

((((それは白井さん(黒子)のことです(よ…。(…)))))

この時は白井と木山を除くメンバーの心の中の呟きは同じであった。

「お忙しい中お時間をいただきありがとうございました。」

店を出てから木山を送り出す。

「いや、私も色々勉強になったよ。

ここまで研究肌な学生がいるなんて思いもしなかったからな。」

木山は優を見ながら言う。

「いや…私は研究肌なんじゃなくて…能力がそちらに少々特化しているだけで…。」

「いや、ぜひとも私達の研究チームに来て欲しいほどの人材だ。」

優は謙遜するが、木山は優をほめる。

「あはは。」

「それに教鞭を振るっていたころを思い出してしまったよ。」

「教師をなさっていたんですか。」

白井が言う。

「むかしね。」

「じゃ。」

そう言って木山は歩いて帰っていった。

「なんとなくかちょっと変わった感じの方なんですの。」

「白井さんよりですかー？」

初春は白井に言う。

「一度支部に戻らなくてはいいけませんわね。」

「ええ、上条さんに貸してもらったこのデータを木山先生に渡せるように、
まとめなくてはいけませんし。」

初春はついさつき優が渡した幻想御手に関する研究資料が乱雑に入
ってしまっているUSBメモリーを
手に言う。

「というわけで私達は支部に戻りますのでお姉さまは…。」

白井と初春は振り向く。

「分かっているわよ。帰って寮監をごまかしておけばいいんでしょ
？」

「ええお願いしますわ。」

「それじゃあ帰ろうか。」

結構方面が同じ177支部と優、佐天は歩き出す。
美琴だけは途中で分かれることになるが途中までは一緒だ。

「あつ佐天さんポケットからこれ落ちたわよ。」

そっいつて美琴は、しゃがみこみ佐天のポケットから落ちた赤い御
守りを拾う。

「あつすみません。」

佐天は美琴から受けとる。

「それって佐天さんがいつもカバンにつけてるやつじゃ？」

優が思い出したように言う。

「ええ。そうなんです。

母に貰ったんです。」

そう言ってお守りを目線の高さまで持ってくる。

「御守りなんて科学的根拠何にもないのに。本当迷信深いんです。私のお母さん。」

佐天は昔を懐かしむような目をしてその赤い御守りを見つめる。

「優しいお母さんじゃない。

佐天さんを気遣って御守りをくれたんでしょ？」

「分かっています。

でもその期待が重いときがあるんですよ……。いつまでたってもレベル0のままだし……。」

周りの空気が暗くなる。

「大丈夫ですよ！！佐天さん！！

なんてったって上条さんが直々にレベルアップを手伝ってくれるんですから！！

絶対に能力者になれますって！！」

初春が佐天を励ますように言う。

「そうそう優って私をレベル4からレベル5にした実績があるんだから。」

「そうですよね!!」

上条さんが手伝ってくれるんですから!!」

「どーんと任せておきなさい!!」

ここは優も胸を張っておく。

「はい。お願いします。」

佐天さんの能力

「^{レベルアップ}幻想御手譲ってくれるんじゃないかったのか!!」

ある廃ビルが立ち並ぶ一画にそんな声が響いた。

佐天はその声のする方に向かう。

「ぐだぐだせずに金持って来いよおらっ!!」

その怒号と共に殴る蹴るの暴行を加える。

「お前らのレベルがどのくらいあがったのかそいつで試してみるか。」

そういった瞬間、つい佐天は音を立ててしまった。

（とりあえずジャッジメントかアンチスキルに…。）

佐天は携帯を取り出すが…

（やば…充電切れ!?!）

携帯は電池が切れた。

（相手の能力が分からないと手出しも出来ないし…。
せめてここに上条さんがいたらなあ…。）

佐天は万能型の優を思い浮かべる。

（でも私にだって…。）

「やめなさいよ！！」

佐天は勇気を出して殴る蹴るの暴行を加えているいかにも不良なやつらに言う。

「その人怪我してるし、すぐにアンチスキルがくるんだから。」

前歯のない男が佐天に近づく。

そして男は足を振り上げ、佐天の横を蹴る。

それだけで鉄板は折れ曲がる。

「ひつ。」

「今なんつった？」

ちから能力のねえ奴に指図される覚えはねえんだよ。」

前歯のない男は佐天につかみかかろうとするが、佐天はよけ、近くに落ちていた鉄パイプを構える。

「よけんなてめえ。」

佐天はその鉄パイプでその掴みかかろうとする手を叩き落とす。

「いてええええ。」

「まったく、私はね…確かに能力はちからないかもしれない。でもね…これでも私運動神経だけはいいいんだから！！」

そう言つて佐天は男の胸めがけて鉄パイプで殴りかかる。
そして男の胸に鉄パイプはめり込み男を吹き飛ばす。

「ジャツジメントですの。」

貰い物の能力をあたかも自分の実力と勘違いしているあなた方に彼女をとかく言う権利はありませんの。
あなたたちを暴行障害の現行犯で拘束します。」

「白井さん。」

佐天は白井を見て一安心する。

「私が乱入しなくても問題はなさそうでしたが…
ガセネタを掴まされたあげく、やっと使用者に会えたと思えば友達に暴行を働こうとしていたのですから…今日の黒子は危ないですよ?」

そういつて近くにいた男に一瞬で近寄り、上下逆さまにテレポートをさせて頭から地面にたたきつける。

もう一人のサイコネシストが走りよるが白井はテレポートで飛んできたものを全て避け、
カバンを顔面にたたきつける。

「佐天さんお怪我は?」

「いえ。ありません。」

佐天は先ほど殴り飛ばした前歯のない男が起き上がりそうだったので、鉄パイプで加減をして
首の付近を殴りつけ気絶させる。

「…み、見事なお手前で…」

「いやー私は素手だと弱いんですけどなぜかバッド系って得意なんですよー。」

白井は呆れながら言う。

「アンチスキルも来たみたいですので引き上げますよ。
送って行きましょうか？」

「え？本当？上条さんのテレポートなら体験したことあるけど白井さんのは初めてだなー。」

あつそうだ。あのクレープ食べた公園までお願いできますか？
上条さんに色々教えて貰うんです。」

「分かりましたわ。」

その辺の絶叫マシンより速いですわよ？」

「どんとーい。」

そしてアンチスキルに引き継ぐと白井と佐天はその場から消えた。

「えーと…なぜ？」

優は困惑している。

確かに今日は佐天に能力開発を行うつもりだったのだが…

「それにしても凄いですわね。

能力の演算式を見ることが出来るなんて。」

「私は最初に演算式の間違いから指摘されたんだから。」

そう今日は関係のない人が二人ほど混じっているのだ。

「なんで白井さんと美琴がここに！？」

そうこの公園には佐天を送ってきた白井となぜか現れた美琴がいるのだ。

ちなみに初春は今日は177支部で書類の整理などを行っているため来ていない。

「まだ白井さんは分かるとしてなんで美琴が混ざって…。」

「いやー。だって私最近なにもすること出来ないじゃん？
捜査しようとしたら黒子にとめられるし。」

「当たり前ですの。」

「はあ…まあいいか…。」

さてと佐天さん。

そういえば佐天さんはどういった能力の分類なんですか？」

一応無能力者でも自分の能力がどのような系統かどうかは分かる。
なぜだか知らないが、オートリパース肉体再生のレベル0などと付けられたりするのだ。

「えーと確か…『エアロハンド空力使い』だったかなあ…。」

「あのウェッジ婚后光子と同じですの…。」

「んーならこの紙吹雪を私が浮かしてみるからその光景を覚えておいてね。」

「はい。」

そついつて優は情報連結で作り出した紙吹雪をエアロハンドを使ってくるくると回してみる。

「覚えた？」

「はい。」

「なら次に私が演算の補助をするから佐天さんは今さっきのイメージを思い出してみてください。」

ただし、小さくてもいいから。」

そう言つて優は、佐天に手を触れる。

佐天は先ほど優が使っていた紙吹雪を手を持ちイメージする。

（竜巻が起こるように…小さくても竜巻が起こるように…。）

佐天は先ほどの優の様子を思い出しながら優がどうやってか意識に送り込んできた演算式で演算を開始する。

「わあああ。」

すると紙吹雪は小さいながらもしっかりと回転を始めた。

佐天は声を上げる。

「うし。」

優も満足そうだ。

「一発で成功ですの…。」

「んー今日はお祝いかな？」

白井は呟き美琴は何かを考えている。

「どう？」

佐天から手を離れた優が佐天に聞く。
ちなみにまだ紙吹雪は回ったままだ。

「最高です!!」

でも…いままで私できなかったのに…。」

「んー佐天さんの演算式は大きくは間違っていないけど…出力は出なかったんだ。

出てもそよ風しかも調子のいい時しか無理といった感じね。

それに佐天さん。計測の時、結果を残そうと大きい竜巻イメージしてなかった？」

「ええ。アメリカとかのサイクロンを思い浮かべてましたけど…。」

「やっぱり…エアロハンドはそこまで大きな竜巻は作り出せなくてね。

出来てもアンチスキルの車両を8台ぐらい一気に巻き上げるぐらいなのよ。」

「ようは、イメージが大きすぎて演算に支障を来たしていなかったって言うことですか？」

でも婚后光子は…手で触れた部分に噴射点を作ること、ミサイルのように飛ばすことができたような…。」

白井が優に聞く。

「まあそんな感じですけど…演算式がまず間違っていたのですけどね。

それと婚后さんって人は知りませんけどそれは演算式が少々特殊な

んですよ。

佐天さんの能力はどっちかというと周囲を巻き込むものなんで…エ
アロハンドには3種類の演算式があるんです。

一番簡単な演算はその婚後さんって人の触れたものを吹き飛ばすも
ので、その次に佐天さんのような竜巻を発生させるような演算で、
最後に竜巻を手の平で作り出してそれを射出するという演算がある
んです。」

優は最後に言った手の平で竜巻を作り出し上空に向かって射出する。

「へー。」

佐天はその優の講義をしつかりと聞いている。

「よし。なら佐天さん。」

「はい!!」

「次はこれを浮かせてみようか。」

そう言つて優は情報連結で一辺1mぐらいの正方形の箱を作り出す。

「大体これは1tぐらいかな？」

いざとなつたら私が消すから思い切り浮かせて見て。」

優は佐天に言う。

「はい!!」

そして佐天は演算を開始。

「う、浮いた!!」

そしてその物体は20mほどの高さまで浮き上がった。
美琴が自分の事のように喜んでいる。

「確か…1tの立方体を10m浮かせることが出来ればレベル3でしたっけ?」

白井は計測時の事を思い出しながら言う。

「ええ。10mから上でレベル3、100m浮かすことが出来ればレベル4です。」

「ということは佐天さんはレベル3ということですか?」

白井は物体が浮いて喜んでいる佐天を見ながら言う。

「まあ簡易検査ですので正確にはいえませんが…それにレベルの決定付けにはその高さまでの到達時間なのも関係します。」

「そうでしたわね。」

そういつて二人は美琴とともに喜んでいる佐天を見て微笑むのだった。

八つ当たり

「はあはあはあ…。」

夕暮れの研究所の集まる第10学区の細道を走る常盤台中学の制服を着た少女が走り何かから逃げている。

「待ちやがれ!!」

その少女を追いかけのように男性が白い翼を羽ばたかせて飛んで追いかけてくる。

(戦うしかないのか…。)

少女は逃げる様子から反転。

振り返ると追いかけてくる男性に向かって電撃に放つ。

その電撃はレベル5クラスのものだ。

「俺の未元物質ダークマターにはきかねえぞ!!」

男性は体の前に白い羽を前に持つてきて電撃を放つ。

(くそっ!!)

少女は壁に電磁石の要領で張り付きながら逃げていく。

「まったく、依頼内容から簡単だと思ったんだがな…。
結構、粘るじゃねえか。」

男性はまた羽ばたき空を翔る。

（とりあえず…人が多い第7学区に…。）

少女は帰宅生が多くいるであろう第7学区に向かって逃げる。

「おいおい。ぶっ殺…依頼内容は殺さずに捕獲だったな…。」

男性…垣根帝督はかきねていとく一気に逃げる少女を捕まえるために加速する。

（生まれ変わったと思ったら実験体って俺ってついてないな…。）

少女は思いながら第7学区を目指すが…後一步というところで垣根に追いつかれてしまう。

「っ…!!」

少女は電撃を放つが垣根は末元物質で防ぐ。

「てめえが何をしたかは知らないが…依頼は依頼だ。」

垣根は少女を掴もうとするが…。

「あれ？美琴？」

一般人が通りかかり、声をかけた。

「ああ？」

その人物は少女を見て言う。

その人物…優は片手に買い物袋を持っている。

「シスターズの方ね…。
であなたは？」

「あん？てめえ殺されたいのか！！」

垣根は突然入ってきた人物をにらむ。

「んーあなたが誰かは知らないけど…この子を殺すのなら私は容赦しないけど？」

優は買い物袋をどこか…自室にテレポートさせる。

「俺は殺すために来たんじゃないやねえ。
こいつを連れ戻しに来たんだ。
てめえが一般人なら今すぐここから消えな。」

垣根は優に警告を発するが…。

「連れ戻しに…？」

優は少女…ミサカを見る。

「そいつは研究所から逃げ出したんだ。
俺が捕獲の依頼を受けて捕獲に来たんだ。
第10学区からここまで逃げてきたんだぜえ。」

「ふうん。」

「まあ逃げねえなら殺すまでだ!!」

垣根は未元物質で羽を作り出し、優に向かって攻撃をする。だがその攻撃は優には当たらない。というか当たっていない。

垣根は、一般人には攻撃しない主義なのだ。

「解析完了...。」

優はミサカを守るためにミサカの横にテレポートする。

「え？テレポーター？」

ミサカも声を上げる。

「さてね。」

「解析完了とか聞こえたが、俺の未元物質は簡単に解析なんかされねえよ。」

垣根は自信満々だ。

「『未元物質情報連結。』」

優は手の平に、白い物体を作り出す。

「なっ。」

「とりあえず...記憶失えー!!」

優は敵には容赦しないのだ。

早口で色々唱える。

もちろん演出でしかないが…。

「『対象の脳にアクセス開始…対象垣根帝督、アクセス開始…
アクセス完了。記憶読み取り開始。削除。』」

優は面倒だと思い一日分の記憶を完全削除して意識すら奪い取り、
テレポートで適当な場所に送りつける。

「えーと…ありがとう？」

ミサカはあの特徴的な話し方ではなく、普通の話し方だ。

「ん。」

まあ私の八つ当たりとも言えるしねー…。

まさかあの安売りの卵が手に入らなかったなんて…。」

優は落ち込んでいる。

「え？」

（そ、そんな理由で帝督は記憶を奪われたの！？）

ミサカは驚いている。

「あはは。そういえばあなたはミサカ何号？」

優は気になったのだ。

「…10020号…。」

（ん？えーと…この前が10008号だから…もつすぐ？）

「よし！！じゃあ私の家においで。」

優はミサカの手を持ち、テレポートの演算を開始する。

「え？俺は…。」

ミサカは一瞬嫌がるが優が手を持つと黙る。

シュン

優とミサカは風を切って消えた。

「ほら。食べる?」

優は今日の夕飯であるカレーをミサカに出す。

実は今日は佐天が能力を使えるようになった日なのだが、お祝いをしようと思ったのだが

白井や初春、ジャッジメント達が幻想御手で暴れた能力者の鎮圧のために別れてしまったため
今度、皆の予定があう日となった。

「ありがとう...。」

ミサカはカレーをつつく。

「どう?」

優はなるべく日常的な会話をしようとする。

「おいしいですけど...何とも思わないんですか?」

美琴とそっくりなミサカを見て不思議に思わないことが気になるみたいだ。

「ん？一応私は『絶対能力進化』を知っているしね。」

優は軽く言う。

「あれって…機密だったような気がするんですが…。」

「うん？ああ私それでもアクセラレータの彼女…。」

優はミサカにとって驚愕ものだったみたいだ。

ミサカは口に運んでいたスプーンが止まる。

ちなみにまだ優とアクセラレータは付き合っている訳ではない。周りからはそう冷やかされたりするけど。

「そ、そんなの聞いたことねえ！！」

ミサカは叫ぶように言う。

優の部屋は優が防音空間を情報連結しているため、外に声が漏れることはない。

外の音はいざという時のために聞こえるようにしている。

「まあ嘘だけだね。」

「嘘なんかーいー！！」

絶対にミサカの口調ではない。

「ああ一つ聞きたいんだけど…」

あなた本当にミサカシスターズ？」

優は思ったことを聞く。

「ミサカにも色々あるんです。」

（別人格が入っているなんて誰もおもわねえよな…。）

このミサカ10020号に別人格が入っているのだ。

この世界軸ではない…優の前世と同じ世界軸の男性の人格が…。

「ふーん。」

ああ寝るのなら向こうの部屋のベッド使ってくれて良いから。

私は今からちよつと仕事行ってくるから。」

優は玄関の方に向かう。

「仕事って…中学生ですよね？」

「まあねー私にも色々あるからね。」

じゃ。」

そう言つて優は玄関から出かけていった。

「…中学生がすることってなんだ…。」

まあいいか…することもないし…寝るか…。」

ミサカは呟いてから優の言った部屋においてあったベッドで寝よう

とするが

寝ようとベッドの前まで行って行動がとまる。

(…あの女の子が寝ていた場所だよな…
俺なんかが寝ていいのか?)

ミサカは迷うのだった。

シュン。

優は夜の第10学区の上空にテレポートで現れる。

優は自由落下する間に情報連結でマントを作り出し羽織る。
地面が近くなったためもう一度、上空にテレポートする。

(あのミサカは断片しか記憶が読み取れなかったし…
でもまあミサカネットワークから私が外す必要がなかったのは気になるし…。

何でミサカネットワークからあのミサカが除外されている？

優はミサカ10020号の記憶の断片から読み取れた研究所に向かう。

その途中の路上で残念なホスト風な男が寝ていたが優はスルーする。

（この辺のはずなんだけど…。）

優は街灯の上に降り立つ。

周りには深夜だからか車は一台も通っていない。

監視カメラは同じ映像が連続で流れるように能力を使ってハッキングを仕掛けている。

（あの研究所…電気がまだついてる。
行ってみようか。）

優はテレポートでその電気がまだついている研究所の近くの街灯の上に立つ。

そこから中を覗こうとするが見えないためダミーチェックを使って中に進入する。

監視カメラは（ry
警備ロボもいるが…軽く操作して異常はないと判断するようにしている。

優は近くの電気の点いていた部屋の中の窒素を睡眠ガスにして数分放置してから中に入る。

もちろん優が入るときには睡眠ガスは全て解除済みである。

そこには数人の白衣を着た研究者らしき人物が倒れている。

優はそんな研究者には目にもくれずに部屋を見渡す。

中には机に音楽プレイヤーがある。
その他はよくある研究所と同じだ。
見た感じ機材が古いように見えるが資金不足だろうか。

（ん？

この音楽プレイヤー…一曲しか入ってないし…。）

優は音楽プレイヤーをいじり中身を見るとそこには『LEVEL
UPPER』と表示されている。

（…もしかして…。）

優は研究者の記憶を覗く。

（やっぱり…。）

優はため息を吐く。

この研究所で研究されていたのは、よくある絶対能力者（レベル6）
を作り出すことだった。

ここで倒れている研究者は最近学園都市で噂になりつつある幻想御
手^パを用いて

レベル6を作り出そうと研究をしていた。

しかし、この幻想御手にはどんな副作用があるのか分からなかった
ため、

裏ルートからミサカを20万で手にいれ、幻想御手を聞かせ能力値
を上げると共に副作用を調べようとした。

それがあの優の部屋で寝ているはずのミサカ10020号だったの

だ。

このときからあの性格だったみたいだ。

実験は一応成功、幻想御手使用前のミサカ的能力レベルは3、使用後は能力レベルが4となり

まだまだ成長する様子があった。

研究所の外（塀あり）で能力の練習をさせているうちに電撃の出力でミサカの本家である御坂美琴の電撃の出力と並びレベル5の判定。

しかしレベル5判定されるとそのミサカは塀を電撃によって破壊。逃走を開始した。

そのため暗部組織の一員である垣根帝督に捕獲を依頼。

あとは垣根がミサカを追いかけていると優と接触。

一瞬で惨敗といった具合だ。

（んーまだ副作用とかを考えているだけましかな…。）

優は今までつぶしてきた研究所の研究員の記憶を何度か覗いてきたが子供をモルモットにしか思っていない研究員がほとんどだった。

この研究員はまだましなほうなのだ。

それにこの研究所にはチャイルドエラーもない。

人体実験はこのミサカが始めてみたいだった。

（ここは軽くマークしておく程度でいいかな。）

優はある程度情報を持ち部屋に帰還した。

優が部屋に帰りベッドの方を見に行くとベッドの手前でミサカが倒れていた。

「っ！！」

「ねえ！！大丈夫っ！？」

優はミサカの肩を叩きながら声をかけるが反応がない。

（幻想御手の影響！？）

優はミサカの脳波を観測する。

「やっぱり。。」

優の幻想御手から導き出した脳波と酷似した脳波になっている。

ここまでくると手のつけようがない。

シスターズの脳波はほぼ一緒なので治すことは出来るのだが…

（あの人格には戻らないわよねえ…。）

別のシスターズの脳波を移すことになるため一般的なシスターズの人格となってしまう。

「とりあえず…ヘンキャンセラー冥土帰しにでも連れて行きましょうか…。」

優は自室から病院までミサ力を抱えテレポートで空間を飛んだ。

八つ当たり（後書き）

佐天さんを能力者にしてしまったため… 実際知らない人を助けるために動くってなんだが大きな正義感が必要だと思うんですよ…。

でもそこで友達や知り合い、恋人などの一緒に居たい、大事な人の為ならがんばれるといった目標？があることで本気になると思いますか？

優の目標は… 大体見えてますよね？

PS：バイト中に思ったこと。

- ・ 禁書目録の第1話の要素入れてない…。
- ・ テレスティーナVS優が一瞬で勝負がつくようにしか思えない…。

- ・ 微妙だけど新キャラなんて入れてキャラクターを動かせるだろうか…。

そこにはスキルアウトがいた。

「佐天さん。はーやーくー。」

腕にジャッジメントの腕章を付けた初春は振り返って佐天を呼ぶ。

「初春、別に上条さんが入院したんじゃないんだから急がなくても……。」

佐天はゆっくり歩いて初春の後を追う。

「でも心配じゃないですか!!」

あの上条さんが病院にいるんですよ!!

怪我なんてなかったことにしてしまう上条さんが!!」

初春は佐天に叫ぶように言う。

朝に優から電話がかかってきて今日は支部の方に顔を出しにいけないと連絡が来たため

問いただしてみると病院にいと帰ってきたのだ。

「そうだけどさー。」

あつ初春この道通ったほうが病院までの近道だよ。」

佐天は裏路地を指差す。

「へーここつて繋がってるんですかー。」

初春がその裏路地を覗きながら言う。

「この前見つけたんだよね。」

佐天はその裏路地に入っていく。

「でも暗いですよ？」

大丈夫なんですか？」

初春も後ろからついてくる。

「大丈夫。大丈夫。」

比較的ここは他の路地裏より人通りはあるから。」

結構この道は病院の近道として有名なのだ。

「でも私ここ知りませんでした…。」

「最近までこの先の突き当たりで工事してたからねー。」

佐天はずんずんと先に進む。

「おい。そのジャッジメントの嬢ちゃんと長髪の嬢ちゃん、知ってるか？」

佐天達は声をかけられる。

佐天は無視して路地を進むが初春は正直に振り返ってしまう。
そこにはスキルアウトが十数人という

「なんですか？」

「この道はな俺達の縄張りなんだ。
通るには金を払って貰おうか。」

「できねえってんなら体で払って貰うしかねえがな。」

「はぁー...。」

佐天は頭を押さえながら空を仰ぎ見る。

「ここは公共の道なんですよ!!！」

初春は勿論、反論する。

「初春…逃げるよ!!！」

佐天は初春の手を握るとその辺に落ちていた木片を跳ね上げその下に小さい竜巻を発生させその上に乗ってそのまま上空に逃げる。
昨日、優達と別れた後一人で自主練習した結果だ。

「待ちやがれ!!！」

長距離系能力は前方に!!！
打ち落とせ!!！」

するとスキルアウトの中から数人出てきて飛んでいく佐天達に向かつて、火の玉や電撃、氷の矢などが飛んでいく。

中には鉄パイプなどを飛ばしてくる『テレキネシス念動力者』もいる。

佐天には飛行に演算能力を奪われており、防御をすることが出来ない

い。

「佐天さん!!」

佐天が掴んでいる初春が叫ぶ。

「だ、大丈夫!!」

だが佐天の額には汗がにじみ出る。
なにせ昨日能力を使えるようになったばかりなのだ。
細かい制御などまだまだ出来ない。

佐天達の周りに急にコンクリートだろうか、分厚い壁がせり上がり
飛んできた攻撃を全て防ぎきる。

「まったく…あたいはなぜお前らを助けたんだろうな…。」

佐天と初春は声が聞こえてきたほうを見る。
そこにはジーンズに革ジャンを着た女性が地面に手をつけていた。
女性は佐天達に一瞬だけ目を合わせると目の前のスキルアウトに目
を向ける。

「っち…おい。」

その空力使い。」

女性がゆっくり降りてくる佐天に声をかける。

「は、はい?」

「あたいがある程度やってみるが、取りこぼしたのを行動不能にし

る！！

そっちのジャッジメントは…高能力者の知り合いがいたら呼べ！！
…いなかったらジャッジメントの増援でも良いから呼べ！！」

そういつて女性は能力を使ったのだろう道路に使われているアスファルトが波のように波うち十数人いたスキルアウトをどんどん拘束していく。

スキルアウト達に女性に向かって攻撃を放ってくるがアスファルトの壁に阻まれる。

「白井さんですか？

すみません。……………」

初春は白井に電話をかけている。

「す、凄い…。」

佐天は女性の能力の使い方が上手いことに関心を寄せている。

「に、逃げる！！」

スキルアウトのボス格が逃げ出すが…

そこには佐天が道をふさぐように竜巻を発生させているため簡単には突破することが出来ない。

無理に突破しようとすれば、竜巻に巻き上げられる。
ためらっているとアスファルトに足を埋められる。

ようやく全てのスキルアウトは足をアスファルトに埋められ動くことが出来なくなり、

最後の足掻きとして能力で攻撃してくるだけとなり、女性の作った

壁で覆われた。

「ジャツジメントですよ!!」

ようやく白井が現れる。

「白井さん!!」

初春が声をあげる。

「…まあ初春なら仕方ありませんわね…。

佐天さんもご無事でなによりですの。

お姉さまもこちらに向かっているようすわ。」

白井は佐天の服に汚れすらもついていないのを確認し、安心する。

「ええこの人が助けて。

えっ!？」

佐天が助けてくれた女性を見るとそこで女性は倒れていた。

「だ、大丈夫ですか!!」

初春が近づいて脈を見るが問題ない。

外傷もなしである。

「こ、これは…幻想御手の昏睡状態に酷似しておりますわね…。」

白井は突然倒れた女性を見ながらいう。

「とりあえず…初春はその人を見て置いてくださいな。

スキルアウトを少々懲らしめ…。

えっ？

こっちもですよ！？」

白井は少しあいていた壁から中を覗き込むがそこには気絶したスキルアウトがいた。

「ん？何か騒がしいわね…。」

優はミサカが寝かされている病室にいたのだが、病院に救急車がどんどん入ってくる音が聞こえてきた。

この病室は冥土帰しが手を回したのか個室である。

「ちょっと見てくるわね。」

優は眠っているミサカに向かっていった病室を出ると目の前に冥土帰しがいた。

「今呼びに来たところだったんだよ？」

冥土帰しが言う。

「幻想御手の使用者の脳波のデータが集まりましたか？」

優が事前に頼んでおいたのだ。

どうも推測した脳波と食い違いがあるとこまるため、昏睡者の脳波を平均して製作者の脳波を調べるために頼んだのだ。

「ああ。」

幻想御手の使用者の急患が大勢入ってね、データ化はすでにしてあるよ？」

優と冥土帰しは冥土帰しの診療室に入っていく。

「あら？優じゃないの。」

入ってきた優を見て声をかける美琴。

「上条さんもそういえばこの病院にいたんでしたね。」

初春が思い出したように言う。

「あーそういえば…」

佐天は初春の言葉で優がこの病院にいたことを思い出したみたいだ。

「上条さんが入院ですの？」

白井は優が入院したのかと思っている。

そこにはいつものメンバーがいた。

そこにはスキルアウトがいた。(後書き)

あのヤンキーな姉ちゃん…結構好きなんですよね…出番短かったですけど…。

幻想御手

とりあえず優は白井の誤解を解いてから冥土歸しに話題を振る。

「ああ。」

冥土歸しはパソコンを操作してあるデータを呼び出す。

「これは？」

初春が聞く。

「これは幻想御手被害者の全脳波パターンだ。

脳波は個人個人で違うから同じ波形なんてありえないんだね？
ところが幻想御手被害者には共通の脳波パターンがあることに気が
ついたんだよ？」

数日前に優が教えたことをここにいるいつものメンバーは思い出す。

「それが幻想御手製作者の脳波パターンということによろしいので
すかね？」

白井の言葉に冥土歸しはうなづく。

「脳波を繋げて巨大なネットワークを構築する…。
一体誰が…。」

優は冥土歸しの見せるデータを記憶し、色々な研究所にハッキング
をかけ、

実験協力者や能力開発で得た脳波データと幻想御手使用者の脳波データを片っ端から調べていく。

「僕は医師だ。

それを調べるのは君達の仕事だろ？」

冥土帰しは振り返る。

「…はい…はい。

『ツリーダイアグラム
樹形図の設計者』ですか！？

…はい…使用するところを見てみたいのでそちらに伺っても？
分かりました。」

初春は病院を出ると木山に電話をかけている。

先ほどの情報を木山に伝えているのだ。
しばらくすると初春は電話を切る。

「で、どうだった？」

美琴が聞く。

「ツリーダイアグラムの使用許可が下りるかもしれないそうなんです。」

私も見に行きたいのでそちらに……。」

初春は目を輝かせながら言う。

「私が送っていいのかな？」

優が初春に聞く。

「いえ、ちょうどバスも来たみたいですのでこのまま行きます。」

白井さんは支部の方で新しい情報が入ったらお願いします。」

初春はバス停から二個ほど前の信号に捕まっているバスを見て言う。

「分かりましたわ。」

初春も気をつけるのですわよ？

でないと今日のようになりますわよ。」

白井は初春に警告する。

「分かっています。」

上条さんからこれ貰いましたから。」

初春はペンを取り出す。

「何それ？」

佐天はその初春の出したペンを見ながら優に聞く。

「ああこれは一見するとペンなんですけど…。」

優は初春が取り出したペンをもう一本作り出すと説明を始める。

「この横に付いているボタンを押すと…。」

優はペンの横についているボタンを押す。
するとペンの先っぽから電撃が迸る。

「スタンガンになるんです。」

攻撃手段のない初春さんにーと思って作っただんですが…。

ちなみにペンのノック部分を3秒長押しすることによって安全装置が働きますので普通にペンとしても使えますよ。」

優は実演を始める。

「ええ、実はこのスタンガンは前から貰ってたんですが…
今日は、使おうと思ってたのに佐天さんが私の手を握って逃げるものですか…。」

初春は呟く。

「…私、無駄に逃げて損した？」

佐天は落ち込む。

「いえ、佐天さんの判断は正しいですよ。」

白井さんに今日の事件の事は聞きました。

そのスタンガン、人を確実に気絶させる出力で使えるのって2人分までなんですよね。

流石に小さすぎてそれ以上の容量のものは作れませんでした。」

優は佐天をフォローする。

「そ、そうなんですか!？」

初春が驚く。

「あれ?初春さんには教えたはずなんだけどなあ…。」

「あつ初春さん。

バス来たわよ。」

美琴がバス停に停まったバスを見ながら言う。

「はい!!」

では、行ってまいります!!」

初春はバスに乗る。

「気をつけてね!。」

「各研究所から能力開発を受けた人の脳波パターンが送られてきたわよ。」

全てではないが、177支部のパソコンには能力開発を受けた人の脳波パターンが送られてきている。

優は全て調べ終わったのだが、該当の脳波パターンは見つからない。次に能力開発を受けていない大人の検索を始める。

データは、淡い希望を持って色々な病院にハッキングを仕掛けることによって発見した。

「なんで脳波パターンは書庫に登録されていないのよ…めんどろっつたらありゃしない。」

美琴はぐちる。

「そうですよー。」

こういうときに役に立たないんですからハイテクって…。」

佐天も呟く。

「一応検挙する場合には役に立つのですわよ？」

予想ですが、脳波パターンは結構長く、容量を取ったのではないのでしょうか。

書庫は200万人以上のデータを扱っているんですの。

ちよつとでも軽くしようとは思うはずですわ。」

白井の予想は実は当たっていたりする。

200万人以上の脳波を全て書庫にデータ化しておいて置くとする
と書庫が馬鹿みたいに重くなり

ジャッジメントで未だにご健在な旧式なパソコンでは書庫を開くの
に平均14分52秒もかかるというシュミレーションが、ツリーダ
イアグラムで結果として出たため、書庫への脳波の記載はされてい
ないのだ。

「それにしてもヒットしないわねえ…。」

パソコンを操作し、幻想御手使用者とデータを比べている固法が呟
く。

「そうですわね。」

ところで、上条さんは何を？」

支部の初春がいつもいるパソコンの前に陣取った優を見て佐天は声
をかける。

「ん？見つけた。
ヒットする人をね。」

優は、パソコンを操作して書庫に接続する。
この書庫に入るためにはIDやパスワードが必要なのだが…いまさ
らだろう。

「…木山先生じゃない。」

近くで優のすることを見ていた美琴が言う。

「私が調べた結果ではこの幻想御手の製作者の脳波パターンは木山
先生がヒットした。
それに…。」

優はパソコンを操作し、新たなウィンドウを開く。
そしてある論文を開く。

「これは…『共感性について』ですの？」

優の後ろに来た白井がその論文の題名を読み上げる。

「そこじゃなくて…この論文の製作者を見て。」

「木山春生…。」

「もしかして…。」

また後ろに来ていた佐天が呟く。

「私の憶測だけど、木山春生は知ってて私達に協力した。
私達は得た情報を全て製作者本人に渡してしまっていたってことよ
…。」

こちらの情報はつつぬけであるということを意味する。

「『初春^{さん}が!!』」

美琴と白井が声を上げる。

「初春さんがどうしたの?」

事情をあまり理解できていない固法が言う。

「その木山先生のところに行くって…。」

美琴は固法へ説明を白井はSFチックな携帯を取り出し初春に連絡
を始める。

だが、なぜか繋がらない。

「初春に電話は混線したらいけないから任すとして…上条さん!!」

佐天は何かを思い立ったように優を呼ぶ。

「な、なに?」

急に呼ばれた優はちよつとびびりながらも佐天に聞く。

「木山先生の研究所の監視カメラって見れます?」

無理なら路上にあるカメラでもいいので。」

佐天は初春の無事を確認したいのだろう。

後ろでは電話が繋がらなかったため固法が木山の身柄確保の要請をアンチスキルに出している。

「んーちよつと待つて。」

優はキーボードを叩き出し数秒後ディスプレイに4つの監視カメラの映像を出す。

「あつ初春!!！」

佐天が指を指したのは駐車場の監視カメラだ。

「これって…木山先生の車じゃん!!！」

そこには木山に担がれて車に乗せられている初春の姿がある。

初春が胸ポケットに入れていたペン型スタンガンがなくなっている所を見ると、

抵抗をしようとしたところ気絶させられたのだろう。

そしてそのまま車は法廷速度を軽く破り駐車場から飛び出していく。

優は監視カメラの映像を切り替えながら車を追う。

「なら私がここからレポートで!!！」

白井が動き出そうとするが美琴が白井の肩を思い切り掴む。

「っツ!!！」

白井の体が跳ね上がる。

「そんな体で動こうっての？」

美琴は白井に言う。

「お姉さま気が付いていらしたのですか？」

「当たり前でしょ？」

あんたは私の後輩なんだからこういう時ぐらいお姉さまに頼んなさい。

優！―レポート行けるわよね！―」

美琴は白井の頭を小突くと優に声をかける。

「行けるけど…なんで白井さん言ってくれなかったんですか！―！
怪我ぐらい…。」

優は白井に愚痴る。

「私だって上条さんばかりに頼ってばかりでは強くなれませんか…」

せめて自分で負った傷ぐらい自分で治さなくては…。」

白井は言う。

優は白井をじと目で見るが今は治している時間がない。

初春は気絶をしているだろうが、何をされるか分からない状態なのだ。

一分も無駄にしていられない。

「上条さん！！私も連れて行ってください！！」

佐天も声を上げ、優は頷く。

優は元々連れて行くつもりだ。

なんだかいやな予感がしているのだ。

佐天のエアロハンドは攻撃力ではそこまでもないが防御力はあるのだ。

「じゃあ固法さんに白井さん。

バックアップお願いします。

自動追尾プログラムを使っていますので映像は勝手に切り替わりますのでナビゲートお願いします。

横にある地図で光っている点が監視カメラのある位置です。」

そういつて優は一度ディスプレイを見て大体の予想を付けてから美琴と佐天を連れてレポートで現場に急行した。

幻想御手 ？

「ん…ここは…。」

初春はエンジン音が響く車の中で目を覚ました。

「起きたかい？

それにしても驚いたな。

君みたいなジャッジメントがあんなペン状のスタンガンを持っているとは…。

上条とかいう少女の製作物かい？」

初春の隣から声が聞こえる。

初春は先ほど資料形式の共感性のを読んでいるところを見つかり、押さえ込まれようとされたため、優製作のスタンガンで応戦。しかしスタンガンの電撃は出たはずなのに木山は倒れない。

なので初春はもう一度電撃を放つが効かず、終わりに、何をされたかも分からぬまま

気絶し、能力を封じる手錠をさせて車に押し込められたのだ。

「木山先生…。」

初春が言葉を木山にかけが…。

「ところで…以前から気になっていたんだが…
その頭の花はなんだい？」

木山にさえぎられる。

「君の能力に関係があるのかな？」

「お答えする義務はありません。」

そんなことよりレベルアップを使って何をするつもりなんですか。どうしてこんなことをしてんですか。

眠っている人たちはどうなるんです?!」

初春は木山の質問に答えるでもなく矢継ぎ早に質問を投げつける。

「矢継ぎ早だな。」

こっちの質問には答えてくれないのに。」

「誰かの能力を引き上げてぬか喜びさせて何が面白いんですか!! 私達を助けてくれたあの人だって…。」

まだお礼も言っていないのに…。」

初春は落ち込んだ顔をする。

「ふん。」

他人の能力に興味はないよ。」

木山は目を細める。

「私の目的はもっと大きなものだ。」

「幻想御手の正体には気が付いているのだろうか？
あの上条とか言う子のおかげで。」

木山は流れ行く景色を睨みながら言う。

「脳波の巨大なネットワークですか？」

「ああ。もつとも脳波を繋げるためにA I M拡散力場を媒介としたものだ。

複数の脳に演算を割り振ることによって高度な演算を可能とする。」

「どうして…。」

「あるシュミレーションを行うためにツリーダイアグラムの使用申請をしたんだが。

どういうわけか却下されてね。

代わりになる演算装置が必要になったんだ。」

「そんなことのために能力者を…！」

「1万人ほど集まった十分代用してくれるはずだ。」

初春は木山を睨みつける。

「そんな怖い顔をしないでくれ。
もうすぐ全てが終わる。
そうすればみんな開放する。」

そういいながら木山はハンドルから片手を放し、ポケットから音楽プレイヤーとメモリーを取り出す。

「幻想御手をアンインストールする治療用プログラムだ。
君に預ける。」

木山はその取り出したものを全て初春に渡す。

「後遺症はない。
すべて元にもどり誰も犠牲にはならない。」

「信用できません！！
臨床研究が十分でないものを安全ではないといわれても気休めにも
ならないじゃないですか！！」

初春は木山に叫ぶ。

「手厳しいな。
ならあの子に調査を頼むといい。
あの子なら解析に1時間もかからないだろう。」

木山は優の能力を調べたのだろう。

すると車に設置されているモニターが音を上げる。

「もう踏み込まれたのか。」

君との連絡が途絶えてから動き出したにしては早すぎるな。
別ルートでたどり着いたか。

所定の手続きを踏まずに機材を起動させるとセキリティーが作動するようにプログラムしてあった。

これで幻想御手に関するデータは全て失われた。
その使用者を起こせるのは君の持つそれだけだ。」

初春は木山の言葉を聞き、渡されたものを見る。

「大切にしまえ。」

しばらく無言の車内が続き次の瞬間車は甲高いスキール音を響かせながら停まる。

『木山春生だな。』

車の外から拡声器を通した声が車内に響く。

「アンチスキルか…上から命令があったときだけは動きの早い奴らだな。」

木山はハンドルにもたれ掛かり言う。

『幻想御手頒布の被疑者として拘留する。
直ちに降車せよ。』

「どうするんです。
年貢の納め時みたいですよ。」

初春は木山に言うが木山は余裕そうだ。

「幻想御手は人間の脳を使った演算機器を作るためのプログラムだ。だが、使用者にある副産物をもたらしてくれるんだよ。」

木山は降車しながら初春に言う。

「面白いものを見せてやろう。」

シュン

高速道の上に優達はテレポートで現れた。

「一体なにが…。」

美琴は声を上げる。

そこには、アンチスキルの車両は横倒しになり、アンチスキルの人たちのほとんどは倒れている。

「白井さん!!」

一体何が起こったんですか!!」

佐天は、来る途中、優が作ったジャッジメントで使用されている小型無線機で支部にいる白井に聞く。

『…木山春生が能力を使ってアンチスキルと交戦しましたの…。しかも複数の能力を使って…。』

今の木山は実現不可能といわれた幻の存在。
上条さんとは違う、多重能力者…『デュアルスキル多重能力』ですわ。』

白井の言葉に優達は言葉を失う。

「あつ初春!!」

佐天は青い車の中で気を失っている初春を見つけ駆け寄る。
優は周りを警戒しながら車に近寄る。

「しっかりして!!」

美琴は初春にドアごしに声をかける。

優は扉が開かなかったため、ドアを消す。

「息はあるからただ気絶しただけみたい。」

優は初春の様子を見る。

傷はない。息もある。ただ気絶しているだけだ。

「安心しろ。」

戦闘の余波を受けて気絶しているだけだ。
命に別状はない。」

後方から白衣のはためく音と共に木山の声が聞こえてきた。

「御坂美琴、学園都市に7人しかないレベル5。
流石の君も私のような相手と戦ったことはあるまい。」

木山は言う。

「君に1万の脳を統べる私を止められるかな。」

「止められるかな…ですって…。
当たり前でしょ!!」

美琴は木山に突っ込んでいく。
優はこの場に居ては危険だと判断したのか車に手をつく。

「佐天さん!!とりあえず逃げるよ!!
ここだと危ない!!」

急に行動を始めた2人に呆然としていた佐天に優は声をかける。

「危険なのは分かりますけど、何で車まで!!」

佐天は聞いてくる。

「引火してどかんとか私がいやだから。」

そういつて初春を抱える感じで乗り込んだ佐天を見た後、安全地帯までレポートで車を持って行く。

優が車をのけた後その場所の近くで爆発が起こる。

「佐天さんは初春の周りをしっかりと守ってあげて。私は美琴の方に行つて来る。」

優は走り、美琴のあとを追った。

幻想御手 ？（後書き）

アニメ見てて思ったんですが…なんで初春の気絶している車のそばで戦闘なんて出来るんでしょうね…。

余波などで車のガソリントankに引火、そのままカーンという結末が思いついてしまいました。

ちなみに木山にスタンガンが効かなかったのは美琴と同じ理由だと思ってください。

幻想御手 ？

「驚いたわ。」

本当にいくつも能力が使えるのね。

デュアルスキル
多重能力だなんて楽しませてくれるじゃない!!」

美琴は木山に言う。

「私のは理論上不可能とされているあれとは方式が違う。
マルチスキル
いわば…多才能力だ。」

木山は美琴に向かって真空の矢を飛ばす。

「呼び方なんてどうでもいいわよ!!」

こっちがやることには変わりはないんだから!!」

美琴は電撃を木山に向かって放つ。

が、木山は誘電力場を作り美琴の電撃を防ぐ。

「あり?」

「どうした? 複数の能力を同時に使うことと踏んでいたのかっ!!」

木山は上空から降ってきた火の矢に電撃、氷の矢、真空の矢をアスファルトの粘性を操作して壁を作り出し防御する。

「やっぱり同時に攻撃系の能力使うと威力落ちるかあ…。」

上空から優が風に舞うように降りてくる。

「き、君の能力は情報系だったはずだ！！
そんな攻撃系の能力ではないはずだ！！」

木山は、慌てて優に向かって言い返す。

「ふふふ。

さあどうかしら…案外あなたとよく似た状況だったりするかもしれないわよ？」

優は木山の次の行動を見ながら言う。

もちろん優は自分の能力を使って演算能力を向上&多重能力の情報連結を行っているため、

木山の使うような他人の脳を使った演算能力の向上などしていない。

「くそっ！！」

木山は高速道の一部を優と美琴を巻き込んで崩す。

「美琴！！」

優はテレポートで美琴に近づき、美琴を抱えて、空中に風を操作して浮かぶ。

（捨て身の攻撃？

追い詰められたにはおかしすぎる。）

優は脳内で考える。

優は美琴を連れたまま降りる。

「まさか本物の多重能力者がいるとはな。学会に発表したら表彰物だ。」

木山は言うが。

「残念ね…ここら一体の監視カメラはすべて私の制御下よ？人工衛星のカメラもね。」

多重能力者がいたなんて証拠はどこにもない。学会に発表なんて証拠がなければ意味ないでしょ？」

優は木山に言い放つ。

「出来ればおとなしくして欲しい。私はあることを調べたいだけなんだ。」

本物の多重能力者とレベル5を2人相手にするには分が悪すぎる。すぐに人質は解放する。

誰も犠牲にはしない。」

「ふざけるな！！」

てめえのおかげでな1万人ほどの人間が昏睡状態になってんだ！！人の心をもてあそんでおいて、誰も犠牲にはしない？

寝言は寝て言うんだな！！

何を調べたいかなんて俺には関係ねえ！！

研究所同士の衝突も、上層部で渦巻く陰謀や策略なんかも関係ねえ！！！！

たすけてえ奴を助けたいだけなんだ！！！！

優が切れた。

優の周りには、空気が渦巻き、電流が迸る。

「多重能力者も所詮は中学生か…。」

「…木原幻生…。」

優は木山を調べていると出てきた情報を口にする。

「どこでそれを…！」

木山は驚く。

「…暴走能力の法則解析用暴走実験。

AIM拡散力場制御実験と称して、被疑者のAIM拡散力場を刺激し暴走の条件を探るためのもの…。」

学園都市の統括理事会が隠蔽しようとしている昔の実験だ。

ためえもその中のチームの一員だったよな。

実験の内容は全く知らされていないかった。

いや嘘の実験内容を教えられていた、

被験者であるチャイルドエラーを教育する先生としてな…。」

俺が知っているのはここまでだ。」

優はリスクを覚悟でアンダーラインをハッキングし、映像データが残っていたため

そこから得た情報を話す。

だが、アンダーラインの管理者であるアレクスターには全く気が付かれることはなかった。

初春は気が付くとそばに佐天がいた。

「初春！！気が付いた？」

佐天が初春に声をかける。

「な、なんでここに佐天さんが…。」

「私だけじゃないよ。」

御坂さんや上条さんだって。

あっそうそう。」

佐天はつけていた無線機を初春に渡す。

「はい？」

『初春！！無事ですよ！！』

初春が無線機を耳に装着すると白井の声が響いた。

「し、白井さん！？」

『大丈夫ですよ！！』

怪我は！！』

「あ、ありません。」

無線機の向こう側で息を吐く音が聞こえてきた。

「あの子達は今なお眠り続けている！！」

私達はあの子達を使い捨てのモルモットにしたんだ！！」

穴の開いた道路から木山の叫び声が聞こえてくる。

佐天と初春はその穴に近づき覗き込む。

そして佐天と初春は佐天の能力を使ってその穴から降りる。

話しに夢中になっている優達は気が付いていない。

「でも、そんなことがあったんならアンチスキルに通報して。」

美琴は正論を言うが。

「23回。」

あの子達の回復手段を探るためそして事故の原因を究明するシミュレーションを行うために
ツリーダイアグラムの使用を申請した回数だ。
ツリーダイアグラムの演算能力を持ってすればあの子達を助けられるはずだった。

もう一度太陽の下を走らせてやることも出来ただろう。
だが却下された！！23回ともすべて！！」

木山は叫ぶ。

「え…。」

美琴は声をあげる。

「統括理事会がぐるになってるからアンチスキルが動くはずがないのよ…。」

優が美琴に言う。

優の口調はもう元に戻っている。

「だからってこんなやりかた！！」

「君に何が分かる！！」

あの子達を救うためなら私は何だってする！！

この街のすべてを敵に回してもやめるわけにはいかないんだ！！」

木山は叫び、急に頭を押さえて苦しみだす。

「ち、ちよっと大丈夫！？」

優は声を上げ、木山に近づく。

美琴、佐天、初春も近づく。

ちなみにここでやっと佐天達に優と美琴は気が付いた。

「ね、ネットワークの暴走…。」

木山が倒れ頭からもやのようなものが出る。

「…何この情報の塊…どこから手をつけたら…。」

優も匙を投げるような情報の密集体となり、胎児が現れ、奇声をあげた。

幻想猛獣（AIMバースト）

177支部の中でキーボードを叩く音が響く。

「駄目ですわ…どのカメラも死んでしまっていますの…！
電話も通じない。」

白井は立ち上がり、扉に向かう。

「待ちなさい…！」

すると固法に腕を掴まれる。

「お姉さまをほうって置けませんわ…！っ…！」

白井は固法に言う。

が、白井は肩を押さえる。

「その怪我で何が出来るって言うの…！」

「でも…！」

「御坂さんや上条さんを信じなさい。」

固法は白井に言う。

「彼女達ならきつと…。」

「胎児……？」
メタモルフォーゼ
肉体変化……こんな能力聞いたことない。」

美琴は言うが、また胎児は奇声をあげる。
すると周りに衝撃波が発生し、瓦礫を吹き飛ばす。

「なっ。」

「や、やばい!!」

「ひっ。」

「『バリア情報連結』」

優は驚いている美琴、佐天、初春の前に踊りでるとバリアを作り出す。

このバリアに触れたものはすべて光の粒子となって消え去っていく。
勿論人間は消せないように設定してある。
それでも、壁として認識されるようになっている。

「ふん!!」

美琴は向かってきた瓦礫がすべて優によって消されてからバリアの
範囲外に出て、
胎児に向かって電撃を放つ。

「ひい!!」

確かに美琴の電撃は効いた、だが即再生され逆に肥大化してしまっ
たではないか。

「なにあれ…大きくなってる…。」

「御坂さん!!」

佐天は胎児が生成した氷の塊が向かってくることに気が付き美琴に言う。

ゴウ!!

前に出ていた美琴と胎児の間に巨大な竜巻が発生し、その氷の塊はすべて強風によって軌道を失い
竜巻の中でそれぞれがぶつかり合い粉碎する。

「佐天さんありがとう!!
助かったわ。」

美琴が優の未だに張つてあるバリアの後ろに戻ってくる。

「あれ…次が来ない…?」

優は次に備えて3方向にバリアを張ろうとしていたのだが、次が来ないことに疑問を持つ。

「闇雲に暴れているようにしか…。」

佐天がその胎児を見て言う。

「まるで何かに苦しんでいるみたい…。」

「おいなんだよこりゃ!!」

「どっかの生物兵器か!？」

負傷した隊員を安全な地帯に連れて行ったあと無事なメンバーで再編成し、木山を拘束するために動いていたアンチスキルがその胎児を見つけ声を上げる。

「動けるものだけでもやるしかないじゃんよ!!
実弾の使用を許可する!!

撃て!!」

この場に居る隊員の中で一番の上官にあたる黄泉川が命令すると各隊員の銃から発砲が始まる。

だが、胎児から伸びた触手がアンチスキル達をなぎ払う。

「な、なんか大きくなってる!？」

気弱そうなアンチスキルの隊員が声を上げた。

「はっはっはっはっ…

凄いな…。

まさかあんな化け物が生まれるとは…学会に発表すれば表彰物だ。
もはやネットワークは私の手を離れ、あの子達を取り戻すことも回
復させることも叶わなくなっただか…。」

木山は高速道の支柱にもたれ掛かり呟く。

「おしまいだな…。」

木山は顔を伏せる。

「あきらめないでください!!」

そんな木山に声がかかる。

「はあ…この付近の情報を発するカメラや携帯は使用不可。無線機もあの化け物のおかげで電波を阻害されて外部との連絡は取れないか…。」

おもしろいじゃないの…。」

優は木山に声をかけた初春の横で能力で空間ディスプレイを作り出し回りの情報を調べている。

別に空間ディスプレイを作り出す必要性はないのだが、視覚化しておいたほうが周りの人にも見やすいという利点があるのだ。

「木山先生。

あれが何だか分かりますか？」

佐天はいつでも竜巻を発生させて防御できるように周りの警戒をしながら木山に聞く。

「おそらくAIM拡散力場の集合体だろう。

そつだな、仮に『幻想猛獣（AIMバースト）』とでも呼んでおこうか。

幻想御手のネットワークによって束ねられた1万人のAIM拡散力場。

それらが触媒となって産まれた潜在意識の怪物。

言い換えればあれは1万人の子供達の思念の塊だ。」

木山は優達に説明をする。

「どんどんA I Mバーストに使用者達の負の思念が集まっているみたいね…。

それと同時にどんどん肥大していく。

ここからは私の予想んだけど…あいつ…半端ないほどの自己再生能力が備わっているわよ。

それに私の情報操作で、消せないほどの1万人の思念の集合体、あれを私が能力で消すには1万人のそれぞれの集まってくる情報を一つ一つ削っていくぐらいしかない。」

今回は優の情報操作で一発解決というわけには行かないみたいだ。

「じゃ、じゃあどうしたら…!」

佐天が万事尽きたように言う。

「どうしたらあれを止めることが出来るの?」

美琴が最後の希望をかけて木山に聞く。

「それを私に聞くのかい。

今の私が何を言っても君達は信 y :。」

木山が言い終わる前に木山の前に初春が手を突き出す。

「私の手錠、木山先生が外してくれたんですね。」

初春が言う。

確かに美琴や優、佐天が能力で無理やりこじ開けたわけでもなく、手錠は外れていたのだ。

「ふん。ただの気まぐれだ。

まさかそんなことで私を信用するの？」

木山は一度初春に視線を向けるがすぐにそらす。

「それに…。」

初春が木山を真正面から見上げる形をとる。

「子供達を助けるために木山先生が嘘をつくはずがありません。」

初春は木山に言う。

「聞いてたの…。」

美琴が言う。

「後ろに下りたんですけど誰も気付いていなかったんですね…。ちなみに私も聞いていましたよ。」

周囲を警戒している佐天も言う。

「あれは幻想御手のネットワークが産み出した怪物だ。ネットワークを破壊すれば止められるかもしれない。」

木山が言うつと初春はポケットの中を探る。
そしてチップを取り出すと、

「幻想御手の治療用プログラム!!」

「試してみる価値はある。」

木山も初春の取り出したチップを見て言う。

「じゃ、じゃあ…優!!」

この治療用プログラムを学園都市中に!!」

美琴は優に言うが…。

「う、ごめん。美琴…今、外との通信が取れる程度には周囲の情報
の操作権をAIMバーストから取り返したんだけど…現状維持が精
一杯…。」

優の額から汗が流れる。

優はAIMバーストから通信ネットワークを取り返したのだが、す
ぐにAIMバーストがその通信ネットワークを侵食しようとしてく
るため、それを退けるので手一杯なのだ。

優の増幅した演算能力を持ってしても現状維持が精一杯なほど、1
万人のネットワークを介した演算能力は脅威的なのだ。

美琴が優の汗を見て、これ以上の情報を操作させるのは危険だと判
断したのか、

周りを見渡し、高速道の上にアンチスキルの車両を見つけ、幻想猛
獣を見る。

「じゃあ、あいつは私がなんとかするから初春さんはそれを持ってアンチスキルのところに。」

佐天さんは初春さんの護衛をお願い。

優はそのまま通信権の掌握をしないさ。」

美琴達は行動を始めた。

幻想猛獣（AIMバースト）（後書き）

感想ありがとうございます。

何度が言われてきた「周りの人たちから伝わってしまうのではないか」というような感想をいただきましたが………ええご都合主義ですよ！！

思いついたのが「優による記憶操作」というのを思いつきました。でもいまさらですが倫理的に問題があるかなあ…と思いついて…て、ていとくんは哀れですけど…。

ほ、他に考えても思いつかなかったわけじゃ…（ry
思いつきませんでした…（´・ω・`）

感想ありがとうございます。

これからも頑張って書いていきたいと思いますので、今後ともこの駄文をよろしく願います。

幻想猛獣（AIMバースト） ？

「ほんとに根拠もなく人を信用する人間が困る。」

駆け出した美琴と初春、佐天を見て、
木山は言っていることは裏腹に微笑みながら呟く。

「それが若さゆえの過ちってわけじゃないの？」

近くで周りの通信ネットワークを幻想猛獣の侵食から防ぎながら優が言う。

「ふっ。」

で、どうなんだい。
状況は。」

木山は優の言葉に軽く笑うと優に聞く。

すると優は木山の前に空間ディスプレイを作り出す。

確かに演算能力はネットワークを守るために使っているが、最大限ではないのだ。

自己防衛用の演算能力は残している。

その一部をその空間ディスプレイの処理にまわす。

「そのデータのようには幻想猛獣（AIMバースト）は、最初の状態から馬鹿みたいに肥大化を進めている。

攻撃が通つてもすぐに再生してしまうし、しかもこの幻想猛獣にはアンチスキルの攻撃には目にもくれない。

進行方向には原子力実験炉がある。最悪の状況よ。」

優は木山に現在の状況を説明する。

「ふむ…アンチスキルの銃が効いていないみたいだな。」

木山はこの付近の監視カメラの映像を映し出されている空間ディスプレイのないのウィンドウを見ながら言う。

「効いていないわけじゃないけど、当たったそばから再生してしまっている。」

一発でかいのを当てないと、見向きもしないでしょうね。」

優は言う。

「どうするんだい？」

君も御坂君のように行ったほうがよかったんじゃないのか？」

木山は言う。

「レベル5（美琴）をなめないほうが良いわよ？」

あっそうそう言い忘れてたけど私、多重能力者じゃないわよ？」

優は木山に昔といってもここ最近だが、初春、佐天、白井に説明したものを説明する。

「能力検査では力を抜いていたのかい？」

木山は優の説明を聞き、納得した後、優に聞く。

「まあね。」

あなたも知っているでしょう？」

特力研。
」

優は以前アクセラレータのいた研究所を調べて、絶対能力進化を廃止させるための材料集めをしていた頃見つけたある研究所の名前を出す。

「ああ。
」

「隊長!!」

顔に絆創膏をはったアンチスキルの眼鏡の女性、鉄装綴里てつそうづりは幻想猛獣の攻撃によつて

吹き飛ばされた隊長である黄泉川愛穂よみかわあいほに叫ぶ。

「い、いや!!」

来ないで!!」

鉄装は幻想猛獣の触手が向かってくるのを見て慌てて銃を三点バーストで引き金を目を瞑って引く。

それでいて、触手に当たるのだから、強運の持ち主だといえるだろう。

だが、その強運も長くは続かない。

カチツカチツカチツ

鉄装は引き金を引くが弾は出ない。
弾が切れたのだ。

触手は鉄装に再生しながら伸び、触手の先端に手と目が作られる。

「い、いや…。」

触手は鉄装の目の前まで迫る。

そして、急に鉄装の体に鈍い痛みが走るが、幻想猛獣によつての攻撃をさけることが出来たが銃を置いてきてしまう。

「なにぼやつとしてんのよ!!」

死んでも知らないわよ!!」

鉄装の吹き飛ばされた所には常盤台中学の制服を着た少女、美琴がいた。

「あなただれ!!」

一般人がこんなところで何してるの!!」

鉄装はアンチスキルにとっては正しい発言をするが、目の前にいる美琴こそがこの時点で使える最大火力保持者なのだ。

「まったくいつもこいつも一般人一般人って…。」

美琴が愚痴る。

「とにかくここからすぐに逃げなきゃ!!」

美琴は迫り来る触手に気が付き鉄装を抱えて、逃げる。

先ほどまで美琴達がいたところは触手によつてへこまされた。そして美琴は振り返ると同時に、触手に向かって電撃を放つ。

「逃げるのはそっち!!」

あいつはこっちが攻撃しなきゃよつてこないんだから。」

「それでも…撤退するわけにはいかないじゃないじゃん…。」

先ほど吹き飛ばされた黄泉川が美琴の後に言う。

「あれがなんだか分かるか？」

原子力実験炉じゃん。」

黄泉川は幻想猛獣が進む先にある施設を呼び指す。

「なにやってるのあの子達!!」

鉄装が下から階段で登ってくる初春と佐天を見つけて叫ぶ。

美琴は電磁石の要領で壁を登ってきたのに対して、二人は階段であがってきているのだ。

佐天の能力を使わないわけがある。

佐天はまだ能力を使い出して数日しかたっていないため、移動と対抗策である幻想御手インストールプログラムを狙ってくるであろう幻想猛獣の攻撃の防御を同時に行うほどは熟練していないからである。

階段を使っておけば、佐天は能力で防御だけを行うことが出来るのだ。

「あれは!!木山の人質になっていた子と…前の銀行強盗の時の子じゃんよ。」

この混乱で逃げ遅れてるじゃん。」

「違う。」

初春さんは人質でも逃げ遅れてるんでもない。

佐天さんだって無能力者でもない。

頼みがあるの。」

美琴はアンチスキル2人をお願い事をする。

「あんたの相手はこの私よ!!」

美琴が幻想猛獣と向かい合う。

幻想猛獣は頭上に光弾こうだんを作り出す。

発射…。

光弾は一拳に別れ、一発は初春と佐天が登る階段に直撃するコースを辿るが、

初春と佐天がいるであろう場所から巨大な竜巻が発生し、その光弾の軌道をずらす。

「佐天さんありがとうございます。」

初春は自分を守ってくれた佐天に言う。

「そんなことは後でしょ？あの人を助けるために……」

佐天は路地裏でスキルアウトに襲われていたとき助けてくれた女の人を思い出す。

「はい!!」

初春達は無事だった階段をまた登りだす。

そして高速道の上にたどり着くが、そこにまた光弾が直撃する。
今回は佐天が気を緩めていたためか、能力の発動が間に合わない。

大きく、土煙をあげる。

「大丈夫？」

聞こえてきた声に2人は振り向く。

「まったく、最近の若いのは無茶するじゃん!!」

そこには盾を構えた黄泉川とその黄泉川を支える形で立っている鉄装だ。

「治療プログラムは？」

「無事です。」

初春は手の中に無事にあるチップに目をやり答える。

「援護するじゃん。」

音が周辺に響きだす。

幻想猛獣が光弾を作り出したのだ。

「くそつまた！！」

黄泉川は声をあげる。

その黄泉川の横に佐天が立つ。

「収束…収束…収束…。」

佐天は手を幻想猛獣に向けて、手に竜巻を発生させ、それをどんどん細く細く、

そして鋭くさせていく。

それはさながら、一本の槍のようだ。

「『エアスピア風の槍』！！」

そして佐天は幻想猛獣に向かって発射する。

光弾は先に美琴の電撃で壊れてしまったため、急遽、胴体に標準を変える。

そのエアスピアは少しずれ胴体の中心から右にずれた所に着弾し、そこにそこそこ大きな風穴をあける。

「佐天さんそれ…。」

初春は始めてみる佐天の攻撃用能力に言葉を失う。

「私の今持っている最高火力なんだけど…あまり効いてないねー。」

幻想猛獣はもう再生をはじめ、あと数秒で完全再生をするだろう。
佐天は先ほど優が木山に打ち込んだ真空の矢を見て、この能力の使用方法を思いついたみたいだ。
ちなみに前に優が言っていた空力使用エアロハンドの中で一番演算が難しいといわれている能力を佐天は使っているのだが、この時点では気が付くものはいない。

美琴は先ほどの佐天のエアスピアに驚きつつも、声を張り上げる。

「…しかしてんじゃないわよ。」

あんたの相手はこの私だって言っただでしょ？

みつともなく泣き叫んでないで、

まっすぐ私に向かって来なさい！！」

幻想猛獣 完

学園都市中に不可解な音楽がところどころに設置されたスピーカーから流れる。

「これは…治療用プログラム!？」

優は防衛していた通信用ネットワークから幻想猛獣の侵食がなくなったことで

この流れる音楽の正体を知る。

木山は美琴が戦いだしてからどこかに消えた。

一応は、監視カメラで追っているため危険になることはないだろう。

優は通信用ネットワークから手を引く。

それでも、幻想猛獣の侵食はない。

「初春さん達やったんだ…。」

優は空間ディスプレイに映し出される高速道で

停まっているアンチスキルの車両の中に知り合いの黄泉川と一緒にいる初春の姿を確認する。

佐天は車両の外で警戒中だ。

美琴もこの音楽に気が付き、再生が止まったのを確認し、幻想猛獣に高圧電流を流し、
黒こげに焼き尽くす。

「終わった…。」

優は一つ息を吐き空間ディスプレイを消すために光の屈折率などを

元に戻すために情報の操作を始めようとすると、

『気を抜くな!!』

監視カメラからの音声が優に聞こえてきた。

「え？」

『まだ終わっていない!!』

木山の声で優は幻想猛獣をスキャン始める。

(これは… AIM拡散力場を纏める核？
しかも2つが共鳴しあってこの巨体を維持してる…。)

この幻想猛獣には AIM拡散力場を纏める核が2つ、
1つは右胸に、もう1つは左胸にある。

『なんでこんなところに!!
ひっ。』

美琴が木山に向かって叫ぶが、幻想猛獣は急に動き出し美琴が声をあげる。

『ネットワークの破壊には成功しても
あれは AIM拡散力場の1万人の思念の塊。
普通の生物の常識は通用しない!!』

『話が違っじゃない!!
だったらどうしろって!!』

優は美琴の付けている無線機に通信を入れる。
くる途中に渡しておいた物だ。

「美琴！！」

『優、何かいい方法はないの！！』

美琴が無線機を通して叫ぶ。

「AIM拡散力場を纏めるための核が2つある。
それを破壊すれば……。」

『ふたつ？』

なんで1個じゃないのよ！！』

「分からないけど、そこまで幻想猛獣が大きくなったのにはこの2
つの核が共鳴しあってる。」

片方が破壊されれば、共鳴自体がなくなるだろうけど、幻想猛獣が
倒れる理由にはならない。」

『じゃ、じゃあ……。』

「私が出る。」

美琴は右側にある核を破壊して。
私は左側をやる。」

優は目に光を持たせて言う。

もちろん無線機なので美琴に表情までは送信されていない。

『分かった。』

プツッ

急に美琴からの音声途切れた。

優は慌てて監視カメラの映像を見る。

『巻き込まれるわよ。』

美琴は木山に言う。

『かまう物か。』

私にはあれを産み出した責任がある。』

優は、空間ディスプレイを急いで消し、テレポートの演算を始める。

「あんたがよくてもあんたの教え子はどうすんの？

回復したときその子達が見たいのはあんたの顔じゃないの。

こんなやり方しないなら私も協力する。

そう簡単にあきらめないで。」

美琴が言い終わるちよつと前頃に木山の後ろに優が現れる。

「そう。」

私も協力するし、あの子達を目覚めさせるのに手がないことはない。
「

優は木山に言う。

助けたい子がいるといえは冥土^{ヘンキャンセラ}帰しは病床を貸してくれるだろう。

むしろ目覚めさせるのにも協力をしてくれるだろう。

あの人は、根からの医者なのだから。

「それにね…。」

美琴に向かって幻想猛獣は、触手を伸ばしてくる。

触手は美琴に触れる瞬間、高電圧の電撃に見舞われた。

「あいつに巻き込まれるんじゃない…。」

「私達に巻き込まれるっていつてんの!!」

そう言って、優と美琴は幻想猛獣に電流を流し出す。

かたや、学園都市の頂点、7人しかいない超能力者（レベル5）の
第三位、発電系能力者の頂点に立つ最強の電撃使い、エレクトロマスター御坂美琴。

学園都市のランク付けでは強能力者（レベル3）というあまりはつきりとはしないが、

柵川中学でのエース、データオペレーション情報操作、上条優。

2人が最大出力とは行かずとも2人合わせて約16億ボルトもの電流を幻想猛獣の発生させた

誘電力場に強引に捻じ込み電気抵抗の熱で幻想猛獣の表面を消し飛ばしていく。

体表を消し飛ばされた幻想猛獣は奇声をあげ、数本の腕を1つにまとめ、優達を殴りにくるが、

美琴が電気で砂鉄を操り、その腕を切りとばす。

幻想猛獣は能力で氷の塊を作り出し射出するが、

優が作り出した白銀に煌く炎の竜によって全て溶かされる。

2人とも先ほど、木山と戦ったときとは全く違う火力の攻撃を繰り返す。

「…。」

木山が2人の光景を見て、啞然としている。

「頑張りたかったんだよね…。」

美琴は幻想猛獣から聞こえてくる声に言う。

幻想猛獣はその巨体を持って2人をつぶしに来るが、

ピイイイイン！！

美琴がゲームセンターのコインを指ではじく。

キュゴツ！！

優の手の中で、空気が収縮 & a m p ; 圧縮されていき、それは白い輝きを持つ。

一方通行が使ったときのような大きさではない。

大まかな原理は同じなのだが、優の場合は周りの情報を操作し、より高密度なプラズマの球体を作り出し、構成える。

「こんなところでよくよしてないで自分に嘘を付かないで…もう一度！！」

美琴は自身の代名詞である超電磁砲を…

「挫折を感じるくらいならまだまだ道は残っている。
そこで道を踏み外したらなにも残らない…。
踏み外したら、引きずり戻してやるしかないよなあ!!」

優は物体の情報を消滅させること、以外での最大火力である『電離
スミウム
気体光砲』を…

同時に撃つ!!

美琴の超電磁砲は一直線に右胸にある核を打ち抜き。
優の電離気体光砲も左側にある核を回りの幻想猛獣の肉体を抉り取りながら打ち抜く。

核はそれぞれの能力によって粉碎された。

「これが…レベル5とレベル3…。」

木山は肉体に風穴が2箇所開き、そこからどんどん消えていく幻想
猛獣を見ながら呟く。

一応言っておくが、普通レベル3ではこんな風穴は開けることは出来ない。

「や、やったあ…。」

初春は消え去った幻想猛獣を見て気が抜けたのか、後ろに倒れる。

「ふ、2人とも凄いですね…。」

佐天も言う。

アンチスキルの2人もこの光景を見て心なしかうれしそうだ。

「あの…。」

美琴はアンチスキルの車両に乗り込もうとする木山に声をかける。

「どうするの子供達は…?」

美琴は顔を伏せながら木山に聞く。

「もちろん諦めるつもりはない。

もう一度やり直すさ。」

刑務所だろうと世界の果てだろうと私の頭脳はここにあるのだから。

」

木山の言葉をきき、優達は微笑む。

「ただし、今後も手段を選ぶつもりはない。

気に入らなければその時はまた邪魔しに来たまえ。」

木山は振り返り車両にのり、連れて行かれた。

「やれやれ。懲りない先生だわ。」

美琴は言う。

「まあそれがいいんじゃないの?

私あの先生結構好きよ?」

優が言う。

勿論恋愛的な意味ではない。

「それに上条さんがなにかしでかしそうですねー。」

佐天が優の顔を覗きながら言う。

優は目をそらす。

佐天は顔を覗くために動く。

優は逃げる。

キキー！！

車が甲高いブレーキ音を鳴らせて止まる。

「おねえええさまああああ。」

その後部座席から飛び出してきた百合n…白井黒子は美琴に飛びつく。

そしてそのまま後ろに倒れる。

「黒子は心配しましたのよ。」

心を痛めておりましたのよ。

お髪に乱れが！！お肌に無数の擦り傷が！！」

白井は美琴の上に乗りがかって美琴に言う。

（あー…治してあげれるほど演算能力戻ってないなあ…。）

優は美琴の傷を治そうと思ったのだが、先ほどの幻想猛獣との情報戦に戦闘と演算のし過ぎで頭が少々痛いのである。

「ひっひっひ!!」

どうやら電撃を放つ体力も残っていない御様子。

ここは黒子が隅々まで、見て、さすって、癒してあげますの!!」

白井は狂ったように言う。

「あっそうですわ。」

が、何かを思い出したかのように初春と佐天、優に向かって声をあげる。

「先ほど病院から連絡がありましたの、
幻想御手の使用者達が次々と意識を取り戻していると。
あなた達のおかげですわ。」

優達は顔を見合わせて微笑んだ。

接触したようです

「ほら入りなさいって。」

優は1人の少女を連れて自室に帰ってくる。

「えーと…おじゃまします…。」

その少女は控えめに入ってくる。

「あはは。」

やっぱり質素でも女の子の部屋って入り辛い？」

優はその少女…ミサカに向かって言う。

「当たり前だろ…俺は女と付き合ったことすらねえんだから。」

「まあまあそれはおいおい慣れていくしかないねえ！。
かある薫君？」

「今は薫だ…。
かあり」

ミサカでは他のミサカたちをかぶる為、ミサカ改め、薫と呼ぶようにした。

なぜ優の部屋にミサ…ごほん、薫がいるかというと幻想猛獣との戦いが終わり、病院に戻ったが、優は初春達を助けた人とは面識がないため、初春たちと別れ

薫のいる病室に行くと、薫は起きていた。

それから事情説明と、今置かれている状況を話していると、

薫が転生者？憑依者？ということが発覚、優も転生者であるということをお教えたのだ。

ちなみに薫かおりという名前は前世の名前、薫かおるの読みを変えただけである。

優は転生してから年月がたっているため前世のことなど覚えてすら居ないのだが、

薫はまだ年月が浅い為、色々覚えていた。

だが、『とある魔術（科学）の禁書目録（超電磁砲）』は薫は少ししか知らないし、

優が介入を果たしているため原作知識などは役に立たない。

絶対能力進化の実験は優が関係している研究所の全ての情報を持っているため、

この情報をアンチスキルに匿名で送りつけたり、インターネットの掲示板に匿名で書き込むことにより

摘発されるように手配しているため、優がGOサインを出せば色々な違法研究や非人道的研究の内容が表沙汰になる。

流石に表沙汰になったものは学園都市上層部ももみ消すことは出来ないだろう。

そして研究は中止になるといった計画が…一方通行考案で行われていたりする。

優は一方通行から教えられた研究所をしらみつぶしにハッキングをしたり進入したりして情報を集めているだけなのだ。

だがその場合一方通行がこの実験に参加していることが知れ渡ってしまう。

優は一方通行にこの情報を隠したほうがいいのではないかと言っているのだが、

一方通行はそれを良しとはしない。

悪党なりの美学というものがあるのだろうか。

「それにしてもなんで俺を…。」

薫は優に向かって言う。

「んーなんでかなあ…。」

優は言う。

もちろん、優は理由がある。

それははっきり言ってしまうと同郷心だ。

「とりあえずお風呂入ってきたら？
寝ている間に汗かいただろうし。」

優は風呂に行き、蛇口をひねるが、水が出ない。

「…え…。」

優は思い出した。

「今日は水道の検査のために断水なんだっ…。」

優は冷蔵庫に張ってある紙を見る。

「いや俺は入らなくても…。」

薫は言うが優が拒否する。

「汗かいたのにお風呂に入らないなんて…汚いよ？」

銭湯行こう銭湯。」

優は前世から毎日風呂には入る人種だったのだ。

「で、でも…。」

薫は顔を真っ赤にしている。

「あー大丈夫、大丈夫。」

今はあなたも女の子だから問題ないって。」

優は薫に言いながら、銭湯に行く準備をする。

「いや、俺が気にするんだって…。」

薫の言葉は優には伝わらなかった。

「あつそうそう。」

「これ飲んでおく?」

そういつて優は薬箱から一錠のカプセルを取り出す。

「これは?」

薫は優の手のひらで転がるカプセルを見る。

「これはねえ…」

秘密日に助けけるシスターズを外の世界に出してあげるために作った。

A P T X 4 6 4 9 (アポトキシンよろしく)!!。」「

優の言葉に薫は言葉を失う。

どう見てもあるアニメ & amp; 漫画のパクリである。

「しかもこれは、本家とは違ってただ小さくなるだけの冥土帰し公認の薬。
^フンキャンセラー

小さくなると同時に怪我は回復。

ちなみにこっちの黒いのは逆に大きくなる薬。」

優の情報操作と冥土帰しの総大作である。

「…。」

御坂美琴とか別のシスターズにあったときの予防策か?」

薫は思ったことを優に聞く。

「そういうこと。」

そういつて優は小型の薬箱を渡す。

そのまま、薫はその薬箱から薬を取り出し、水で流し込むと体が煙をあげて小さくなる。

大きさ的には小1程度だろうか。

体が小さくなるときには体には痛みは走らないようになっている。

優の情報操作の賜物だろう。

副作用といたら能力が使えなくなることぐらいだ。

「よし。銭湯銭湯。」

優は久しぶりの銭湯に浮き気味である。

昔に、佐天と初春と一緒に入りに行ったつきりである。

流石に優の他の寮の部屋に比べると大きい風呂でも3人は無理だったのだ。

薫に優は昔の服を着せてから銭湯に向かいだした。

優達は銭湯に向かって歩いていくのだが、
優にとっては、目の前に見覚えのあるつんつん頭の男性と

「…修道服？」

シスターの少女がいる。
そして少女はつんつん頭の男性…上条当麻に噛み付き走り去って
いく。

「…ねえ…薫？」

「なんだ？」

優は横でその光景に目を点にしている薫に声をかける。

「シスターの攻撃って…噛み付きなの？」

「知るか。」

薫はぶった切ってくれた。

「お兄ちゃん!!」

優は当麻に声をかける。

当麻は噛み付かれた腕を冷やしながら振り向く。

「おお優じゃねえか。
今から銭湯か？」

当麻は優達の持っている荷物を見て聞いてきた。

「うん。」

「一つ聞いてもいい？」

「ああ。」

「今のシスターって…誰？」

「インデックス禁書目録って名乗ってたな。」

「こっちの子は？」

当麻は優の質問に答え、優の隣にいる薫に目を向ける。

「かおり薫です。」

薫も答える。

「なんかビリビリに似てるけど…親戚とかか？」

「他人の空似だよ。」

「お兄ちゃんも銭湯？」

優は話題をそらしながら、当麻に聞く。

「ああ。」

そう言つて3人は横断歩道を渡ろうとすると、急に周りの車の音や騒音が消え去る。

「なに？」

優は即座に周りの情報を調べる。

（…なにこれ…見たことない…。
科学じゃない何か…。魔術？）

見たこともない情報の羅列しか発見することが出来ない。

だが、この空間には電磁波は侵入しているし外との通信が完全に途絶えたわけではなさそうだ。

カッカッカッカッ

後ろから靴音が響いてくる。

優と当麻、少し遅れて薫も振り向く。

「ルーン。」

人払いのルーンを刻んでいるだけですよ。」

異様に露出の高い女性がいる。

「てめえは…。」

「かんざきかおり神裂火織…と申します。」

その女性は名乗った。

接触したようです（後書き）

本当は…優と薫の病室でのやり取りを書くつもりでしたが…
間違って消してしまったんですよ！！

4000文字が…ちくせう…。

無理やり感が否めませんが…ええ。

薫の幼児化にはちゃんと理由があるはずですが…多分。

無視されたら誰でもむかつきますよね？

「神裂火織と申します。」

出来ればもう一つの名前は語りたくないのですが。」

露出の高い女性は当麻に向かって言う。

優達には目にもくれない。

「もう一つ？」

当麻は神裂と名乗った女性に向かって聞く。

「魔法名ですよ。」

神裂は当麻に向かっていう。

(…やっぱり魔術師関係かあ…。)

優は神裂や当麻に見えないようにため息を吐く。

優の隣にいる薫には見えてしまっているが、その薫も心底めんどくさそうな顔をしている。

「あいつと同じ魔術結社の…。」

当麻のつぶやきが優たちに聞こえてくる。

「率直に言います。」

魔法名を名乗る前に彼女を保護したいのですが。」

「いやだといったら。」

まああたりまえだろう。

得体の知らない襲ってきた人物に少女を渡せといってきたのだから。

「名乗ってから彼女を保護するまで。」

そういつて神裂は刀が入っているであろう鞘を握る。

シュン！！

そんな風きり音がすると、近くにあった風力発電の羽が切れ遊歩道に突き刺さる。

「もう一度問います。」

魔法名を名乗る前に彼女を保護したいのですが。」

「何いつてやがる。」

てめえみてえな……」

当麻は神裂の言葉に言い返すが、声は振るえ足はも震えている。

「何度でも問います。」

すると神裂は刀に触れる。

とアスファルトに2筋の痕が刻まれる。

当麻には当たっていないのだが、とことん無視されている優達には関係なく襲い掛かってきたため、

「『バリア情報連結』」

優がバリアを作り出しその攻撃を受け止めるが、その拍子に光の粒子が現れた。

（衝撃派かと思ったけど…これは物質か…情報の量的に細いピアノ線？）

優はバリアによって消滅させられたワイヤーを分析する。

「なっ！！」

いまさら優達がいるのに気がついたのだろうか神裂が攻撃を無効化されたことに声を上げる。

今まで当麻の近くにいたというのに、とことん無視しているのが悪い。

神裂は1つの目標のためには周りをあまり見ない傾向があるようだ。

「私の七閃^{ななせん}を防いだと！！」

神裂は驚いている。

神裂の七閃は刀を鞘内で僅かにずらす動作の影で操る七本の鋼糸で目標を切り裂くという、

相手の意表をついて攻撃する技であり、身体能力の魔術強化により、道路や街灯、街路樹などを

容易く切断するほどの威力を発揮するもののだが、魔術に見せかけ物理攻撃なため、

技を理解していないと防ぐことすらままならない必殺と言ってもいい技である。

それを苦もなく優は防いでしまったのだ。

「…襲ってきたんだから襲われる覚悟はあるわよね？」

優は身を守るために一方通行で反射の演算をし、一気に神裂の元に駆ける。
アクセラレータ

その時に一方通行の能力を使い推進力を増幅させているので、普通の人間では絶対に出せないような速度だ。
だが神裂はそれに反応してみせる。

「七閃！！」

神裂はもう一度七閃を放つが逆に神裂に向かってその攻撃が跳ね返ってくる。

神裂はその自分が放ったはずの七閃をよける。

戦闘の意欲をそぐ為に外したはずなのだが、予想以上に優の速度が速く、鋼線の軌道上に優が現れたのだ。

「無駄無駄無駄！！」

優は神裂に向かって拳を繰り出すが、その拳は少々周りの学生より喧嘩慣れ（慣れたくて慣れたわけじゃない）した程度の拳だ。

簡単にかわされ、神裂に至近距離での七閃をもう一度受けるが、それは神裂にまた反射される。

「1つ言うぞ！！」

すぐに実力行使に出るような奴の言葉なんか信じれるか！！」

そういつて優はもう一度、拳を神裂に向かって振り下ろす。
が、もちろんよけられる。

優もそれをわかっていたためか、拳から電撃は进り、神裂に直撃す

る。

「な、なにを…。」

神裂は体の制御がきかなくなりその場に倒れこむ。

「人間の体の制御はね。

電気信号で行われているの。

どんなに強靱な体をしていてもその電気信号を乱されたら身動きが
できないってわけ。」

優は地面にへたり込んだ神裂の刀を奪い取り、近寄ってきた薫に渡
しておく。

そして神裂の手足を情報連結によって作り出した、ジャツジメント
やアンチスキルが使う手錠をはめて
行動を不能にする。

「くっ…。」

神裂は声を上げる。

この程度の手錠なら神裂は余裕で破壊できるのだが、優の電撃のお
かげで体の制御がきかない。

「それにしても頑丈ね…。」

一応像が気絶するぐらいの電流は流したつもりだったんだけど気絶
すらないなんて。」

優は神裂の頑丈さに呆れている。

「えーと…優さん？なに仕留めちゃってこれてるのでしょうか？」

当麻が聞いてくる。

「んーこうでもしないと出て来そうにないからね…
わかってるんでしょ！！
出てきなさい！！」

優はビルの陰に向かって叫ぶ。
だが反応はない。

バチンッ

「もう一発行くわよ。」

優はビルの影の前にある街灯に電撃を放つ。
エレクトロマスター
なにかと美琴の使う電撃使いは使い勝手がいいのだ。

「やめてくれないか…
僕がこの空間を維持しているんだ。」

そういつてビルの陰から身長2mほどの煙草を加えた男が出てくる。
真っ黒い服を着ているため、服は見にくいだが、髪が真っ赤なためそれが目立っている。

「さて…なぜあの禁書目録インデックスという少女を狙うのか教えてもらおうか。」

薫が先ほど優が渡した刀を神裂ののど元に突きつける。

「…インデックスと同じ『必要悪の教会』ネセサリウスだなんて笑えるな。」

優達は神裂と男…ステイルと名乗った男を脅…げふんO H A N
A S H Iして情報を聞き出した。

情報に嘘がないかは優が能力を使って記憶を覗いたので問題はない。

「それに完全記憶能力で記憶が埋まるだなんて馬鹿馬鹿しい。」

優が神裂とステイルを笑いながら言う。

「人間の脳はそんなにちやっちくねえよ。」

記憶ってものは思い出す頻度が減るほどに思い出せなくなるんだ。
記憶がないがイコールで記憶が消去されていくって意味じゃねえんだよ。」

薫がどこから得たかわからない知識を言う。

「ば、馬鹿な!!」

ステイルが言う。

口にあった煙草はいつのまにかなくなっている。

煙草の煙が嫌いな優が消し飛ばしたのだ。

ついでに隠し持っていた煙草もすべて分解してしまった。

「あなた達…どうせ魔術は科学よりも進んでいると自己判断して、科学方面からの完全記憶能力の研究についてまったく調べもしなかったんでしょ？」

優の言葉にステイルと神裂に暗い影が落ちる。

「で、でも!!」

彼女は記憶を消す前は苦しんで…。」

神裂は前回消したときのインデックスの様子を思い出しながら言う。

「どうせ、教会の枷かなんかじゃないの？」

優はステイル達の記憶を覗いて教会のいままでしてきた内容を思い出しながら言う。

「そ、そんな。」

「一度調べてみるんだな。」

薫は神裂に言う。

「じゃ、じゃあ…。」

インデックスは記憶を消さなくてもいいんだな。」

当麻はいままで色々と分析してきた優に言う。

「その枷というものははずせばね。」

優は当麻に言った。

インデックス接触

「あーもう終わり!!」

優は声を上げる。

「とつとインデックスを調べてしまえばいいんでしょ!!」

優はめんどくさくなったのだ。

ステイル達の自己懺悔というものを聞くのに。

「優さん」

薫は優に声をかけ、神裂に刀を返す。

「とりあえず…あのビルでいつか…」

そういつて優はそのあたりのビルの屋上に座標を指定し、ムーブポイント座標移動で
当麻たちを連れてレポートする。

いつまでもあの場所にいると、帰宅民の邪魔になってしまう。

「『人払いルーン解析…解析完了…人払いルーン情報の連結を解除』

」

どのような魔術か判明してしまえば優の能力は使い放題できるため、
人払いのルーンを解析と解呪を行う。

「ば、僕の結界が!?!」

ステイルが驚いているが優達はとうじない。

「さて…

『空間ディスプレイ情報連結…

学園都市ネットワーク接続…

監視カメラハッキング開始…

完了…

インデックス

禁書目録発見』」

優は空間ディスプレイを作り出すと学園都市中にある監視カメラの映像からインデックスを見つけ出し映し出す。

「なっ！！」

科学の街に住んでいるはずの当麻がまず声を上げる。

さすがの空間ディスプレイは学園都市でも実験段階であり、実用化にはなっていないので

珍しいのである。

魔術組はすまし顔である。

空間ディスプレイを作り出すような魔術があるのだろうか。

「…銭湯に入ろうとしてるし…お兄ちゃん

インデックスってお金持ってるの？」

優は当麻に聞く。

「し、しらねえ」

当麻は知らないみたいだ。

ステイルと神裂にも視線を向ける。

「…僕に聞かないでくれ…」

「日本のお金を持っているかはわかりません」

2人とも知らないみたいだ。

「…ここまでせつかくきたけどやっぱり解散!!」

そういつて優はどこかに隠し持っていた風呂の道具を取り出すと、
薫の手を握る。

「じゃあ私はインデックスを見ておくから」

そういつて優と薫はテレポートで消えていった。
が、次の瞬間戻ってくる。

「出たらどこに連れて行ったらいい？」

「ど、どうしよう…。未曾有の大ピンチかも」

インデックスは銭湯の番台の前で危機に陥っていた。

そう、日本のお金がなかったのだ。

この銭湯は、先にお金を払うタイプの銭湯である。

インデックスは魔術師から逃げている間にこの銭湯の位置を把握していたのだ。

完全記憶能力は伊達ではない。

「どうしたの？」

その困っているインデックスに声をかける人物が現れた。

「誰…」

インデックスはその声をきき振り返る。

そこにはポニーテールの少女と小さな少女がいた。

「私？上条優」

声をかけた人物とは先ほど魔術師2人と戦っていた優である。もちろん横にいるのは薫である。

「とうまと一緒？」

インデックスは言う。

「ん？とうまつて上条当麻？なら私のお兄ちゃんだよ」

優は白々しくも言う。

「へーとうまに妹がいたなんて…」

インデックスは優を見ている。

「で、どうしたの？困っているように見えただけだよ。」

優はインデックスが困っている理由を知っているのに聞く。聞く前から知っているのと可笑いという理由からだ。

「私日本のお金もってないんだよ」

インデックスは顔を伏せながら言う。

「よし。じゃあ私が奢ってあげよう。」

優がいうとインデックスの顔に笑みが浮かぶ。

「ほんとー!!」

「それでも私お金持ってるんだから。」

あまり使っていない奨学金のおかげである。

「ほら薫も行くよ。」

そういつて優はインデックスと薫を連れて銭湯に入っていく。
といつてもインデックスと優の身長は似たり寄ったりなのだが。

「こんにちわー」

小萌先生いますかー？」

優は銭湯から出ると事前に聞いていた当麻がいるところと教えられた小萌の家にとどり着く。

年期の入った木造アパートで…はつきり言つとこの学園都市ではぼろい。

だが優は結構こういう木造の家とかは好きなので別に嫌悪感はない。

優が扉を叩くと、当麻が出てきた。

「あれ？お兄ちゃん小萌先生は？」

「ついさっき出かけて行つたよ」

（…飲みに行つたかな…）

優は小萌の酒好きに少々呆れる。

「とうまー優が奢ってくれたんだよー！」

銭湯のような安いもの奢つたとは言えないだろうが…。

ちなみに行つた銭湯の料金は大人200円、子供（中学生まで）100円と安いのだ。

寮に風呂がない学生が利用するため、安く設定されている。

「酒くさ…。」

薫も付いてきており、小萌の部屋からビールの臭いをかぎつける。

「じゃあ私は送り届けたし、帰るね
じゃあ」

そういつてインデックスを当麻に渡すとそさくさと引き返す。
銭湯を出たところからある視線が気になるのだ。

「そろそろ出てきたら？
魔術師さん？」

優は少し大きめに閉鎖空間を作り出す。
薫も隣にいる。

「なんだか君に勝てる気がしないよ……」

そういつて物陰から出てきたのは長身の男：ステイルだ。

「んー私は大して戦闘能力は持ってないんだけど？」

先ほど神裂と戦ったときも自分の能力を使っただけが結局別系統
の能力なのだ。

優の情報操作はどっちかというと防衛重視型ともいえる。
データオペレーション

「それよりも…君に連絡があつてきた。
あの子の次の記憶消去のタイムリミットは3日後だ」

それを言うただけに優をつけてきたのだろうか。

「ふん。」

そんなの知ってるし、枷の位置も把握した。
今解析中。

あんたたちみたいに記憶を消さずに解決する方法を見つけ出すわよ」

優はステイルに向かって言う。

インデックスと接触したのは、困っているのを助けたのも理由なのだが

大きな理由はインデックスにかけられているであろう魔術的枷を見
つけ出し解析することだったのだ。

結果、枷の位置は口の中と断定し、その術式をすべて優は解析して
いるのだ。

ほとんど何がなにだかわからないが、ついでにインデックスが持つ
10万3000冊の魔動書の内容も

すべて優の持つメモリーに保存しているためそれと照合していつて
いる。

魔動書が優を侵食しようとしてくるが、優の能力の前には手も足も
出ない。

「それに…あの人の右手もある。

いざとなればその魔術的枷を消してしまえばいい。」

薫も優の後に続いて言う。

あの人とは当麻のことである。

「ふん」

ステイルは鼻で笑うと歩き去っていった。

自動書記は手ごわい…

優は不敵に自分の寮の自室で笑みを浮かべる。

ガチャ

扉が開き薫がコーヒーを入れたカップを持って入ってくる。

「…優さん？」

怖い笑みが…。」

薫は優の微笑みを見て若干引く。

「ごめんごめん」

優は平謝りし、薫の持ってきたコーヒーを飲み干す。

現在はインデックスの記憶を消すタイムリミットの当日の午前3時である。

優の解析能力を持ってしても、ここまで時間がかかってしまうのだ。もともと優には魔術の知識などないに等しい状態からはじめたため、インデックスから読み取った

魔動書の効果を判別し、その効果からそれぞれの術式を解析したのだ。

十分に早いといえるだろう。

「で？何かわかったのか？」

薫が優に聞く。

「さっぱりわかりません!!」

ドテッ

優は薫にはつきりという。

薫は思い切り転んだ。

「はつきり言っな!!」

薫はすぐに起き上がり優に叫ぶ。

「だって…」

優曰く、インデックスの記憶にある魔動書には記憶を圧迫するような記述はひとつとしてなかった。

それに似たようなものすら一つもなかったのだ。

これは教会が意図してその文献を外していた可能性が高いということだ。

「じゃあ…」

「お兄ちゃんの右手に頼るしかないね。」

たとえ今から別の文献などを使って、調べたとしてもタイムリミットには間に合わないだろう。

「今日は遅いし一旦寝るわ…」

優はそういつて寝室のベッドに倒れこむ。

食事などは一人暮らしの経験があるという薫のおかげで食べていた

ためお腹が空いているというわけではないのだ。

ここ数日優は徹夜で作業をしていたため、昼過ぎまで熟睡をしていた。

「ごめん！！
お兄ちゃん！！」

優は小萌の家に出向き、当麻に謝る。
部屋には小萌はおらず、ステイルと神裂もいる。

インデックスは枷の影響なのだろう寝込んでしまっている。

「大丈夫だ。

解決法がわかったただけでも何とかなる。

俺はインデックスを地獄の底から引き戻してやらねえといけねえんだ」

当麻は右手を握る。

「でもわかった事なら…」

優は空間ディスプレイを作り出し、インデックスの口の中に刻まれているルーンを表示する。

「こ、これは…！」

ステイルがそのルーンを見て声を上げる。

「何かわかるの？」

優は声を上げたステイルに聞く。

「ああ…これは古代のルーンだ。
だが、昔に見たものと少し違う…」

流石は若きルーンを極めた天才魔術師、
これは古代でも禁術とされているこの古代のルーンであるのだ。

「インデックスの記憶のなかの魔動書の中によく似た記述があった」

優は空間ディスプレイにその魔動書の中身を表示する。

この魔動書には見ただけで廃人となる呪いとも言える物が付いているがそれは優によって強制的に排除されている。

「簡単にいったら…別人格を形成して自動防衛システムという感じがしらね…」

優はわかったことを言う。

「それを俺が破壊しちゃえば…」

「そういうこと、じゃあとうとうインデックスを助けてしまいましたよ」

優は荒い息で呼吸をしているインデックスの額に手を置く。
するとインデックスは静かな寝息を立て始めた。

「よし！！じゃあ行くぞ！！」

当麻は手をインデックスの口の中にあるルーンに当てると、
当麻は一気に吹き飛ばされた。

「なに！？」

ステイルが声をあげ、神裂が構える。

インデックスから黒いオーラが漂い不気味に浮き上がる。
目にルーンが描かれ、一気に当麻に襲い掛かる。

「ッ『バリア情報連結』」

優がぎりぎりでバリアを生成することでなんとか無事に済む。

「警告。」

第三章第二節、第一から第三までの全結界の貫通を確認。
再生準備失敗。

自動再生は不可能。

現状10万3000冊の書庫の保護のため侵入者の迎撃を優先しま
す。

書庫内の10万3000冊により結界を貫通した術式を逆算。失敗。
該当する魔術は発見できず。

対侵入者用のローカルウェポンを組み上げます」

インデックスが機械的に説明口調でなにかを言う。

「…やばいんじゃないの…！」

優の隣にいた薫が、薬のケースを取り出しカプセルを1つ飲んで元の大きさに戻る。

これで能力はレベル3程度だが、電撃を放つことが出来る。

横では急に大きくなった薫に当麻たちが目を見開いているが、答えている余裕はない。

薫はインデックスに向かって十分気絶する電撃を放つ。

が、インデックスの前に形成されたバリアによって霧散してしまう。

「…やっぱり効かないか…！」

薫は優の後ろに隠れる。

防御面ではここにいるどの人間よりも優が一番優れているからだ。

「バリア形成終了。

侵入者に対してもっとも有効である魔術の組み合わせに成功しました。」

これより特定魔術『聖ジョージの聖域』を発動。

侵入者を破壊します」

インデックスが空中にルーンを刻み、空間に亀裂が走る。

そして枷を破壊した当麻に向かって光線を放ってくる。

美琴の超電磁砲よりも明るく輝いている。

それを当麻はその右手に宿る『イマジンブレイカー幻想殺し』によって受け止める。
当麻の右手で無効化できるのなら…

「アンチスキルシールド
『A S S 情報連結』」

優のA S Sでも無効化できるということだ。
優は余波を全てそのA S Sで無効化していく。

「な、なんであの子が…」

ステイルと神裂はインデックスが魔術を使ったことに驚きを隠せないようだ。

「そんなもん決まってるだろうが!!」

インデックスが魔術を使えないなんて教会が嘘をついていただけだろうが!!」

当麻が聖ジョージの聖域の本元を右手で無効化しながらその右手を左手で抑える。

「あの枷を全部お兄ちゃんの手で消せると思ったのに!!
まさか何重にも結界を張っていただなんて!!」

優は教会の陰湿さに驚きを通り越して呆れすら感じてくる。

「聖ジョージの聖域は侵入者に対して効果が見られません。
他の術式に切り替え、侵入者の破壊を継続します」

すると、その聖ジョージの聖域はさらに明るさを増し、当麻を押し出す。

当麻の右手の骨が折れる音がする。

「Fortiss931!!」

ステイルがルーンを書いた紙を部屋に張りまくり、当麻の背中を支える。

「あの子の記憶を消せば、とりあえず命を助けることが出来る。僕はそのためなら誰だって殺す。

いくらでも壊す。そう決めたんだ。

ずっと…前に…」

ステイルの独白が始まる。

「とりあえずだな!!」

そんなつまんねえことはどうでもいい!!

てめえはインデックスを助けたいんだろうが!!

てめえらずっと待ってたんだろ!! インデックスの記憶を消さずにする。

インデックスの敵に回らなくてもすむ。

そんな誰もが笑って誰もが望む最高なハッピーエンドって奴を!!」

当麻の手から血が吹き出る。

「ずっと待ち焦がれてたんだろ!!」

こんな展開を!! 何のためにここまで歯を食いしばって来たんだ!!

てめえはその手でたった一人の女の子を助けてみせるって誓ったん

じゃなかったのかよ!!

お前らだって主人公の方がいいだろ!!

脇役なんかで満足してんじゃねえ!!

命をかけてたった一人の女の子を守りたいんじゃないのか!!

だったらそれは全然終わってねえ!!

はじまってすらねえ!!

ちよつとぐらい長いプロローグで絶望してんじゃねえよ！！
手を伸ばせば届くんだ！！
いい加減に始めようぜ魔術師！！」

当麻の右手をぶれる。
もう持たないだろう。

「Salvere000…」

神裂が魔法名を名乗り刀の柄を握るとインデックスの足元の畳が持ち上がり、
インデックスの姿勢が変わる。
そのため当麻に向けられていた、聖ジョージの聖域は屋根を突き破り、雲すら突き破った。

突き破られた屋根から羽が落ちてくる。

「なにこれ…」

優はその綺麗な羽を見て言う。

「こ、これは…『^{ドラゴンプレス}竜王の殺息』！！
伝説にある聖ジョージのドラゴンの一撃と同意です」

神裂が声を上げる。

「それにたった一枚でも触れてしまえば大変なことに！！」

だが、それを防ぐまもなくインデックスが体勢を立て直し、当麻に攻撃を仕掛けてくる。

「『A S S 情報連結』！！

いっってお兄ちゃん！！」

優がA S Sを展開、そして当麻に叫ぶ。

「まずは！！

そのふざけた幻想を！！

ぶち殺す！！」

当麻はインデックスに走りよりインデックスの額に触れるとA S Sに降り注いでいた攻撃がとまる。

「けい…こく…最…終…章…ゼロ…首輪…致命的な破壊…再生不可…」

インデックスが倒れるがその上から白く輝く羽が舞い降りてくる。当麻は周りに振る羽を無視してインデックスを抱き上げる。

「能力者！！」

「逃げなさい！！」

ステイルと神裂が当麻に向かって叫んでいるがまるで当麻には聞こえていないみたいだ。
だが…

バチッ
バチッ

二筋の電撃がその羽に向かって撃ちだされる。
その電撃によってその羽は完全に消滅する。
その後次々に電撃が羽を襲い、消滅させていく。

「お兄ちゃん!!」

「当麻!!」

優と薫である。

その電撃によって周りの状況に気が付いた当麻は急いで
その次々と襲い来る羽を迎撃していく電撃を避けながら屋根の残っ
ている所に
インデックスを抱きかかえてつれてきた。

優の開発。絶対防衛??

「で?どうなったの?」

優は隣にいる神裂に向かって聞く。

ここは当麻が入院している病院の近く、高層ビルの屋上である。

当麻はたいした怪我ではないと言っていたのだが、自動書記の聖ジョージの聖域の攻撃によって

当麻の右手は信じられないほど深い傷が出来、血が流れ出ていたのだ。

優はもちろん当麻の傷を治そうと能力を使ったのだが、

当麻の幻想殺しによってその効力は無効化され、仕方なく従来通りの止血をしてから

この冥土歸しのいる病院まで連れてくると、当麻は診察を受け、治療を受けたが、

1日で完治するような傷でもなく、様子見というわけで入院を余儀なくされたのだ。

屋上には、優と神裂しかない。

「イギリス正教はインデックスを早急に連れ帰るように言ってきました。

しかし、私たちを騙していたことの理由を請求したら、現状維持と言われました」

神裂はインデックスのこれからの立ち位置を優に説明する。

「まあそうだろうねえ…優秀な駒がいなくなったらどうしようもないし…」

優は言う。

「ですので、あなたにインデックスをお願いしようかと…」

神裂は言うが、

「んー私よりもお兄ちゃんに懐いてるんじゃないかな…」

そついつて優は当麻の病室を指差す。

そこには当麻が眠るベッドに乗りかかり、一緒に眠っているインデックスの姿がある。

「しかし、彼は男性ですので…」

神裂もその当麻とインデックスの光景を微笑みを浮かべながら見る。

「大丈夫だと思うけど？」

当麻にはそんな度胸はないだろう。

「あなたがそこまで言うのなら…」

神裂は優の言葉に従うことにしたようだ。

「で？あなた達は今からどうする？」

インデックスの身の振り方はわかったのだが、神裂とステイルはどうするの。

今まで騙してきた『必要悪の教会』ネセサリウスを脱退するのか否か。

「私たちは…ネセサリウスをやめる訳にはいけません」

神裂は言う。

「なぜ？いい加減見切りをつけた方がいいと思うけど？」

神裂なら天草式十字凄教あまくさしきじゅうじせいきょうに戻ることも出来るだろう。

ステイルも十分にフリーの魔術師としてやって行くこともできるだろうし、

まだ2人とも若い、働き口などいくらでもあるだろう。

「そつにはいけません。

あの子は自分に魔術をかけたのが教会だとは知りません。

あの子はネセサリウスをやめることはしないでしょ。

あの子を守るためにはネセサリウスに所属しつつ、あの子の護衛をすることなのです」

神裂が言うのも一理ある。

同じ組織にいたほうが情報は入ってくるし、インデックスを襲ってくる外部の組織の情報も多く集めることが出来る。

「あなたがいいならそれでいいんだけど…

1つだけ言わせてもらおうよ？」

優は神裂に鋭い視線を向ける。

「なんでしょう」

神裂も優に視線を向ける。

「インデックスを守るために自分たちの命を粗末にしないこと。これは絶対」

この2人は絶対にインデックスを守るために自分たちの命をすぐに差し出してしまうことだろう。

「しかし…」

神裂は優に何かを言おうとする。

「命をかけないと助けられない場合がある。とでも言いたいわけ？」

優は神裂の言葉を予想して言う。

「ええ」

神裂は頷く。

「それに、あの絶対的な防御力を誇る歩く教会はもうないのです。体を張ってでもあの子を守らなくては…」

そういう神裂の前に優が小さなチェーンの連結で作られた見た目シンプルなネックレスを見せる。

小さな人工の宝石が付けられている。

「これは私が作った防御用のネックレス」

そういつて神裂の手にそのネックレスを乗せる。

それは見た目よりも軽く何も持っていないように感じる。

だがそんなことより、神裂はこのネックレスを持つと違和感を感じた。

「なんででしょうか…周りの風が止まっているように感じます」

ワイヤーを使う関係上、風を読む必要がある神裂は無風状態になったことを優に報告する。

優は上空に指を向けている。

ネックレスを見ていたため下げていた頭を優の指先をたどって行くとそこには先が鋭い氷の矢が目の前まで迫っていた。

「な、なんですか!」

優は神裂の声を聞きその氷を消す。

すると神裂は周りの強いビル風を感じた。

「これは、攻撃されていると自動的に防御用の結界を張るもの。

攻撃の手段、たとえば私が今作った氷の矢とか魔術の効果範囲が半径1m以内に入ると

周りの全てのベクトルが変わるもので、全て打ち返される代物」

アクセラレータ

要するに、一方通行の反射を少々劣化させたものを組み込んだのだ。演算装置は優が今まで助けてきたミサカ達でネットワークを形成させ、

その演算能力を使っている。

ちなみにそのネットワークの上位個体は薫である。

といっても薫は直接ネットワークに接続しているわけではなく、優が作り出した今神裂が持っているシルバー製の同型ネットワークを介してネットワークに接続できるようになっている。

このネットワークは優がネットワーク自体を丸々作り変えたわけではなく、

付いている宝石内にICチップが埋め込まれているため、これは科学（能力ではない）の産物なのである。

そのため、効率を上げるために同機種を2つ作り片方は実験用としてミサ力達がいじっているのである。

ちなみにここにいない薫はそのミサ力達と一緒に子供の体型でいる。

「…」

神裂は優のしたことに驚きを隠せない。

なにせ、これ1つで全ての攻撃が防御でき、なおかつ攻撃を返す事が出来るのだ。

使用しない場合でもデザイン的にもいけるだろう。

それにこれは科学の産物であるため当麻の右手で破壊されることはない。

「まあ本当は別の人のために作ってたんだけど…必要なくなっちゃったからね…」

優はつぶやく。

実はこのネットワークは、佐天に渡すつもりだったのだが、

佐天が能力を身に着けたため必要がなくなってしまったのである。

「これを…あの子に？」

神裂はそのネックレスをじつくりと見る。

「まあね。」

これでインデックスがあゝの安全ピンだらけの服から普通の服を着てくれると嬉しいんだけどね」

インデックスの歩く教会はこの学園都市では目立つのだ。

なるべく目立たずに過ごしたい優にとっては悩みの種なのだ。

ちなみに歩く教会には効力がまったくないため、どんな服を着てもいいと思うのである。

それにしてもあんなに大きな安全ピンどこから持ってきたのだろうか。

「そうですね」

神裂は微笑んだ。

水着選び

「…水着のモデル？」

優は夏休みに入ったため私服でエプロンをつけ朝食を作っているところだ。

『うん、後輩に頼まれちゃってね。』

一緒にどうか？ってどうやらバイト代も出るみたいなのよ』

電話先の美琴が言ってくる。

「いやねえ…別にモデルをやるのは問題ないのよ？問題は…」

優は自分の胸を見る。

「貧乳でもそのモデルがつとまるかってか？」

隣で同様に、朝食を一緒に作っていた薫が優に言う。

「…私は体のプロポーションがいいとはいえないんだけど？」

優は電話口にそっぴいながら薫のこめかみを両方からぐりぐりと押さえつける。

「いだい！！いだい！！」

頭が割れるようにいだい！！」

叫んでいる薫を無視して、優は美琴の反応を待つ。

『何かすごい音が聞こえるんだけど…
でも大丈夫みたいよ。
私でも大丈夫みたいだし』

美琴はこちらの音に気が付いているがどうやら流すことにしたようだ。

「んー他には誰が来るの？」

『私と黒子と後輩2人、佐天さんに初春さんは来るそうよ』

なら、と優は美琴に行くと云ったのだった。

「「わあー」」

佐天と初春が水着の会社のビルに入ってますあげた声である。

「なんか企業って感じ!!」

「なんだかわくわくしちゃいますねー!!」

佐天と初春がはしゃいでいる。

「お友達まで呼んでいただいてありがとうございます」

「いやいや大勢でやったほうが楽しいからね」

後ろでは美琴とその後輩が話している。

「でも、大丈夫なんですか？
私たちが水着のモデルなんて」

「大丈夫ですわ。
どんな幼児体型でも科学の力でちょちょっと修正してくれるはずですよ」

初春の質問に白井が答える。

「ひどいです、白井さん」

初春は涙を流しながら周りを見ると美琴の隣に立っている優とその横にいる子供が目に入る。

「そういえば、上条さん。
その子どうしたんですか？」

初春は気になり優に聞く。

「ん？ああ薫？
この子は私が今預かっている子なんだけどね。
さすがに一人で留守番つてのもかわいそうかなと思ってつれてきたの」

そういつて優は子供…薫を初春達の前にだす。

「…かみじょうつかある上条薫です」

薫の苗字はいざというときに親戚を名乗りやすいように上条にしている。

「可愛い子ですねー」

佐天がそういつて薫の頭をなでる。

「でも薫ちゃんって御坂さんに似ていませんか？」

初春が気が付くが、

「他人の空似よ。

この子は私の親戚の子でね。

私に預けてきたの」

優はいかにもそれが真実のように言う。

もちろん嘘八百なわけなのだが。

「お待たせしました」

そういつて奥から店員が出てきた。

「あの人は？」

佐天が水泳部員の一人に聞く。

「メーカーの担当者ですよ」

「今日はよろしく願いますね。

あら？後の2人は？」

担当者は周りを見渡す。

「まあ白井さん？」

すると声が聞こえてきたため、その方向を全員が見るとそこには固法こんぷみつこと婚后光子こんごうみつこがいた。

「大勢ぞろぞろと社会見学か何かかしら？」

「婚后光子……」

「固法先輩も」

白井は 婚后の登場に気はめいり、初春は固法の登場に驚く。

「あなたこそなんですか？
その格好。」

休みの日も制服で外出するという校則お忘れですか？」

白井は婚后に言う。

婚后は常盤台の制服ではなく、着物なのだ。

「今日の私は常盤台の生徒ではありませんの。
一人のモデルとして参上したのですわ」

婚后は扇子を広げる。

「…もう少し明るい色の扇子にしたらいいと思うんだけどなあ…」

優は小さくその婚後の扇子を見て言う。

「落着いた色のほうがお嬢様っぽくみえるっていう見栄なんじゃないか？」

着物は明るい色だろ？」

隣にいる薫が優の言葉を聞いて感想を言う。

実はここまで薫を連れてくるのは大変だったのだ。

薫が嫌がったのである。

どうやら男の尊厳やなんらやとか言っていたが、今は女なのだからそんな関係ないといって

優が無理やりつれてきたのだ。

薫は現在あきらめに入っている。

「どれでも好きな水着を選んでくださいね」

そういつて担当者は消えていった。
さっそく皆は水着を選び始める。

優はある水着の前で固まっていた。

（誰がこんなの着るの…）

優の目線の先には細い紐に布をつけただけのような黒ビキニがあった。

シャツ

試着室のあく音が聞こえ薫が出てきて、優の隣まで来る。

薫が選んだ水着は…

「なんで旧スク水が置いてあるんだよ…」

旧スク水であった。

優はその薫を見てからもう一度水着を選ぶ。

「これでいいか」

そういつて優は水着を持って試着室に入る。

「佐天さん、上条さんが水着を持って入っていききましたよ」

初春が隣で水着を選んでいる佐天に言う。

「どんなんだろうね」

佐天は優が出てくるのを待っている。

シャッ

優が着替えて試着室から出てくる。

「ぶっな、なんで…」

佐天は優を見て少し笑う。

「た、確かに似合っていますけど…」

優の水着は黒色の水着…はつきり言うと先ほど薫が着ていた旧スク水である。

しかし問題は水着ではない。

「『ゆづ』って書いてある水着が何でここにおいてあるんですか！！」

優の胸元には名前の文字を書くスペースがあり、そこにはひらがなで「ゆづ」と書かれていたのだ。

「…」

優は薫の隣に行き、水着を選んでいるほかの人たちを眺める。

「どう？貧乳はステータスだ！！希少価値だ！！ってコンセプトで選んでみたんだけど…」

胸のない優にはこの言葉は的確であろう。

「ああ…似合ってはいるが…そのネームはどこから持ってきた？」

薫も気にはなるみたいだ。

「お待たせしましたわ」

そういつて白井が試着室から出てくる。

「んー大人しめのデザインしかなくて今1つなんですけど…
まあ既製品の水着ですとこんなものですわね」

白井は先ほど優が見て固まった水着を着ているのだ。

「あれほど羞恥心がないのもどうかと思うけどな」

薫はきわどすぎる水着を着た白井から目を逸らしながら優に言う。

「あはは」

優は笑うだけだった。

「あーら皆さんその程度ですよ？」

婚后の声が聞こえたためそちらに向くと蛇を抱えた婚后がいた。婚后の水着は赤の水着なのだが、そんなものよりも蛇に目が行ってしまいそれどころではない。

「これこそがオーディエンスが求める究極な水着モデルですわ」

そんな婚后の声どころではなく初春以外は一気に婚后から逃げる。優も薫も逃げたというのに初春だけは残ったのだ。

「わあー怖くないですよー」

初春はその蛇に手を伸ばそうとする。

「はやくどこかにしまってくださいー!!」

佐天が婚后に向かって叫ぶ。

「どういたしまして？
こんなに可愛いのに」

そういつて婚后は近寄ってくる。

「…『情報連結』!!」

優はいろいろな工程を無視して一気にその蛇の周りの温度を下げる。すると蛇は一気に力を失い、眠る。蛇は変温動物なので、極端な暑さ、寒さの環境下では休眠を行うのだ。

「優…助かったわ…」

美琴が言ってくるが、優は爬虫類系は大の苦手であるのだ。ほぼ自分のためだといってもいい。

「ちょっときついわねー」

今度は固法が試着室から出てくる。

それを見た薫は鼻血を出しながら倒れて気絶してしまった。

「え?」

優はその薫を見ると指先には赤い文字で『爆乳…』とかかかれているため無事なのだろう。

「ちょっときついけどこれ以上サイズないし仕方ないか」

固法ははち切れんばかりの水着を抑えながら言う。

「まさかここまで着やせしているとは…」

優の眩きは誰も返す事が出来なかったのだった。

水着選び（後書き）

本当は一話にまとめたかったんですが…
眠気に負けました…。

とりあえず書けたところまであげます。

触れる立体映像！？

「何もないですね。

ここで撮影するんですか？」

初春が担当者に連れてこられた部屋を見て言う。

担当者は初春に微笑むとリモコンを手にして操作をする。

すると殺風景な真っ白い部屋から南国リゾート地の海の景色になる。
次は中華街だ。

「このスタジオは色々なシチュエーションを作り出せるんですよ」

そっぴいながら担当者はどんどん景色を変えていく。

最終的に南国リゾートにする。

「わあ！！すごい！！触れるんだ！！」

佐天は木に触る。

「学園都市の最新技術です」

担当者は佐天に言う。

「ふーん。

部屋中にナノマシンを散布して、その形状を変えているって感じが
しら？」

優は地面になっっている砂を手に取りながら言う。

「ええ。」

よくわかりましたね。

もちろんそのナノマシンは人体にはまったくの無害ですので」

担当者は優の言葉に言う。

「ほおーすげえな」

薫も砂を手を取っている。

「あつてもカメラマンってやっぱり男の人ですかね？」

初春が声を上げる。

「そういえばそうですわね」

「分かっているとはいえ、ちょっとね…」

初春の言葉に美琴の後輩と固法が言う。

「まったくこれだから素人は。」

モデルは見られることでより美しく輝くんですよ」

婚后はいう。

「全て自動撮影です。」

カメラが視界に入るとはまずありませんので自然体でお願いしますね」

担当者が言う。

岸では婚後がおかしな行動を始めた。
それを美琴は見ながら、

「自然体って言うてもあれは違うわよねえ……」

眩いた。

「お姉さま。

私たちもやりますわよ!!」

白井が美琴に声をかける。

「やるって何を？」

美琴は白井のほうを見ると目を光らせ、オイルを持っている白井が指をくねくねとさせながら美琴に近づいてくる。

「もちろん、自然体でサンオイルの塗りあいっこですよ」

美琴はその白井を見て顔を引きつらせ逃げる。

「またそれか!!」

やらないっての!!」

美琴は白井から逃げる。

「お姉さま、待ってくださいですよ」

白井は美琴を追いかける。

「なるほど、あれが自然体ね」

固法が言う。

「…まあいつも通りかな」

優は笑いながら行動を開始する。

「ほら！！薫勝負！！」

優は海に能力でポールを立てその間のスピードを薫と競って遊んでいる。

「体の大きさを考えてくれよ…」

薫は優に言っているが優と互角に泳いでいるのだから文句は言う必要はないだろう。

残りのメンバーは砂浜でバレーをしたりしている。

初春が埋められた。

などと色々遊んでいると、シチュエーションが変更され、ホテルのプールになる。

「んーおいしい」

優は先ほどまで泳いでいて疲れたためビーチパラソルの下でオレングジューズを飲んでいる。

次は停止したクーラーの上だ。

「…動かしていいの？」

そういつて優はクーラーの操舵室に入り、操舵を始める。

「したことがある？」

美琴が聞いてくる。

他の皆はビーチの椅子でくつろいでいる。

「いやない。」

前からやってみたかったのよねー」

そういつて優は適度な速度を出して沖に向かって進む。

「うまいじゃないの」

美琴がほめてくる。

「まあ裏技を使っただけだね」

優は操舵方法など全然知らない。

そしてこのクルーザーは電子制御だ。

「直接制御してる？」

美琴が気がついたのか言う。

「その通り」

優は舵から手を離すが、クルーザーはしっかりと沖に向かって進む。

そして安心しきった瞬間、雪山に水着のまま景色が変わる。

吹雪も再現してあって本格的だ。

「なにこれさぶっ！！」

佐天が声を上げる。

「景色が変わるとそれに合わせて気温も変わるみたいですね……」

初春は腕を抱える。

「そ、そこまでやる必要がある！？」

美琴が急に抱きつきにきた白井を押さえながら言う。

「ここで自然体でって言われても…」

美琴の後輩が言う。

「…『結界情報連結』」

優はなぜかいない婚后以外の周りを気温調節をした結界を張る。
これでは周りに比べたら暖かい空間の完成である。

「あつ 暖かい…」

初春が声を上げる。

「とりあえず凍死はしたくないからね。
ところで…婚后さんはどこ？」

優は初春に言いながら周りを見渡す。

「おほほほほ。私はモデル。
いついかなる場合も私はモデル」

婚后は言いながらも震えている。

「無理するからですの…」

白井は優の作った結界のなかで呆れながら婚后に向かって言う。

また景色が変わる。

「あつつうううう!!」

婚后が跳ね上がるが他は優の作り出した快適空間にいるため問題はない。

（これは…システムの問題かな？）

優はそう思うとすぐにナノマシンにアクセスを開始、すぐに情報を掌握すると、

一気に機能停止までもっていく。

『すみません…調整しますのでこちらの景色をお楽しみください』

そういつて優がシステムから手を離すと一気に景色が変わり、キャンプ地になる。

そこには色々なものが置かれている。

「すみません。カメラのシステムにエラーが出てしまって…すぐに調整しますのでしばらくくつろいでいてください」

担当者は一礼して去っていく。

「自由について…」

「あっそうそうその材料は本物ですので使ってくれてかまいませんので」

最後に店員は優達に行ってから部屋から出て行った。

触れる立体映像！？（後書き）

はい… 2話で終わらせませんでした！！

最新技術は勝手なイメージです。

あなたのカレーはどんな味？

「ご自由についてどうします？」

佐天が飯ごうを持ち上げながら言う。

「んーこのシチュエーションにこの手の食材。
カレーしかないでしょー!!」

固法が材料を見て言った。

「じゃあご飯とカレーの担当に分かれましょうか」

固法がこの場を仕切る。

「じゃあ私カレーやります!!」

「私もおー」

佐天と初春が手を上げる。

「じゃあご飯やりましょうか」

美琴が言う。

「じゃあお姉さまがやるなら私も」

白井は美琴についていくみたいだ。

「まったくカレーなんてそんな庶民の食べ物」

婚后は意地を張ったように言う。

「えーおいしいじゃないですか!」

佐天が婚后に言う。

「実は作れないんじゃないですか?」

白井が婚后を細目でにらみながら言う。

「なっ!」

どうやら図星だったみたいだ。

「ねえ…インドカレーとか面白そうじゃない?」

優は周りの様子を軽く見ながら隣の薫に言う。

「材料的には出来そうだが…キャンプ地で作るようなもんじゃないだろ」

薫も目線ほどの高さにある材料を見ながら言う。

「シーフードカレーは？」

優は材料の中にあつた魚をつつきながら言う。

「山の中で食べるものか？」

などと優と薫がどのようなカレーを作るかで意見を言い合っている

と、
どうやら周りの役割も決まったようだ。

どンドン玉ねぎの皮を婚后と美琴の後輩2人は剥いていく…剥いていく…剥いて…

「ちょっとまったー!!」

優はその光景を初めは見ていたのだがついには突っ込んでしまう。

「どうかしましたか？」

後輩の1人が聞く。

「そんなに剥いたら食べるところが無くなっちゃうでしょう!!
玉ねぎは茶色い皮だけ剥けばいいの!!」

婚后と後輩2人が持っている玉ねぎは大きめの白い向日葵の種にしか見えない。

「そうなんですか」

「それに…玉ねぎだけじゃなくてキャベツも表面の汚いのだけ剥けばいいからな」

薫も加わり、3人に対して食材の講義が始まる。

「やっぱり人参はいちよう切りですよね」

初春は人参と包丁を持ち佐天に言う。

「え？カレーのときは乱切りじゃないの？」

佐天はジャガイモを切りながら言う。

「いちよう切りのほうが可愛いと思うんですけど。
火の通りも早いし」

「初春分かってないなあー。」

カレーの野菜は大きすぎる小さすぎずが基本でしょ？」

佐天が包丁を振りながら言う。

「うちのカレーは野菜を細かく切ってルーと一体化させて食べるんです！！」

初春は佐天に言う。

「いやいやいや！！」

細かくなんてありえない！！

ジャガイモだって面取りして見栄えよくするほうが大事じゃん！！」

佐天も負けずに初春に言い返す。

「見栄えよりも味が大事なんです！！」

「味だっておいしいもん！！」

佐天と初春はにらみ合い…

「ねえ野菜はおっきいほうがいいですよね？」

「細かくですよね？」

対面にいる人たちに聞くことにした。

そこには3人が包丁を持って何かを真剣に切っている。

「…なんで大根の桂むき？」

「うん。結構包丁の扱いにも慣れてきたかな」

優は3人の桂むきの様子を見て言う。

「で、大根って何に使った？」

薫が優に聞く。

「……………春巻きにしようか…」

優は少し考えていう。

「今考えたろ」

薫に言われてしまった。

「よし3人ともそれじゃあ色々と教えていくよ」

そういつて優はトマトを手を持つ。

「どうするんですの？」

婚後が聞いてくる。

「このトマトどうやってむきます？」

優は3人に海老を渡していく。

「皮なのでこれを使って…」

2人はピーラーを持って、1人は包丁で皮むきに挑む。

「む、難しいです…」

包丁の1人があきらめる。

「「まったく剥けませんの…」」

ピーラー組もあきらめた。

「トマトは火であぶって皮が破けだしたら火を消してから皮を剥く
の。」

そしたら簡単に剥けるのよ」

そういつて優は指先から炎を出しトマトをあぶる。

すると数秒で皮がプチプチと破けたので、炎を消し皮を剥くと簡単に綺麗に剥くことが出来る。

「す、すごいですわ」

「そんな技があるなんて…」

「…」

婚后は自分の無知にショックでも受けているのだろうか…

まだまだ優と薫の料理小技集は3人に向かって続けられた。

「「「「できたー!!」」」」

全員が声を上げる。

ちなみに表記ですが10人ほどになると流石に長くなるので省略しました。

「チキンカレーです」

佐天と初春が声をそろえて言う。

「私たちはシーフードカレーですわ」

婚後も言う。

優は色々教えた後、カレー作りを教えていったものがこれである。包丁の持ち方すら危なかった3人が作ったものにしては大作であるだろう。

「で…こちらの春巻きのトマトソース和えはどうしたんですの？」

白井が一品変わっている料理を見て言う。

「あははー教えてたら色々材料つかっちゃってねー。もったいないと思って作っちゃいました」

優は白井に向かって言う。

こちらは優と薫が手早く作ってしまったものである。

「……では、いただきます」

皆が声を上げて食べ始める。

「んーおいしー」

細かい野菜も味がでていいねえー」

佐天が初春に言う。

「大きいのもおいしいです」

初春は佐天に微笑みながら言う。

「これもなかなかおいしいですわね」

白井がシーフードカレーを食べて言う。と落ち込んでいた婚後の顔に微笑みが戻る。

「あつこの大根の春巻きってどうかなーって思ってたけど結構いけるじゃないの」

美琴が春巻きのトマトソース和えを食べて言う。

「んーあまりものの材料で作ったとは思えせんわね…」

白井も言う。

「フランス料理に出てきそうなんですけど…なんていうか母親の味って感じがしますよね。ねえお母さん？」

佐天が優に向かって言う。

「同年代に向かってお母さんはやめて欲しいんだけど…」

確かに優は前世もあわせると佐天達の両親の年齢ぐらいにはなる。

だが、女性という年齢はまだ中学生なのだからお母さんはやめて欲しいのであった。

徹夜はつらいよ

「んー」

優は自分の寮のそのまた自分の部屋でパソコンを見ている。

この前新たな同居人である薫が来たため、一気に模様替えをしたのである。

リビングなどは変わっていないのだが、寝室にしていた部屋と優の趣味の部屋だったところを

寝室にしていた部屋を薫の部屋、優の趣味の部屋だったところを優の部屋にしたのだ。

元々家族4人が住むような部屋だったためそれぞれの部屋の大きさは大きいので生活には問題ない部屋の大きさになっている。

「見つけた」

優は口角を吊り上げながら呟く。

優は携帯で電話をかけながら部屋のベランダから出る。

「計画実行するけど…そっちの準備は大丈夫？」

優は電話がかかるなり言うが相手もそれを予想していたのか了解の意思を伝えてきたため

優は目的地に向かってテレポートと風を自在に操って飛んでいく。

優が出て行った部屋のパソコンの画面には、『暴走能力の法則解析用誘爆実験』の被害者達の名前と

その現在所在地の地図が示されており、優の姿が部屋から見る事が出来なくなると、そのデータは自動的に暗号化され、パソコンの

電源が落ちた。

優は目的地である医療機関という名の研究所の上空に滞空し、マントとサングラスを身に着ける。
サングラスはいざというときの閃光などの対処のためだ。

「さて…行きましょうか…」

優は研究所の警備装置を全てダウンさせる。

学園都市の研究所のほとんどは電力に頼った警備装置のため、簡単に落とすことが出来るのだ。

優はテレポーター対策の装置も落としたため問題なくテレポートで研究所に進入する。

優は現在、『暴走能力の法則解析用誘爆実験』の被害者を冥土帰しにいる病院に移す作業を行っている。

被害者は皆、病院に入れられることもなく、それぞれ別々の研究所に移されていたのだ。

最初は正攻法で行こうと冥土帰しから各研究所への打診を行ったのだが、ことごとく却下。

アンチスキルに研究所の違法研究内容も全て暴露したのだが、それぞれの研究所は学園都市でも重要とされている研究所のためか、上層部によって握りつぶされてしまった。

一部のアンチスキルは動こうとしたのだが、上層部によって無駄な任務を言い渡されてしまい、動くことが出来なかったのだ。

そのため、仕方なく…本当に仕方なく誘拐という形になってしまいが、優が連れ出すことにしたのだ。

もちろん研究員に悟られないように関係している全ての記憶を消す作業も同時に行う。

犯罪者に人権は必要ないという感じでどんどん記憶処理をしていく。流石に優も人命を奪いたくはないため、夜中に残っている研究員を記憶処理のあと、研究機器のある施設から離れたところにテレポートさせておく。

今回、優が進入する研究所は、全て『漏電による火災』という事になるように仕組むつもりである。

研究資料も全てその火災によって消し飛ばしてしまおうという計画である。

それぞれの研究所は第10学区に集まっているため1回1回病院に送っていくと時間がかかる。

その間に別の研究所に連絡が行き、警戒レベルが上がってしまうのを防ぐためでもある。

そのため、優と冥土帰しが思いついたのは…

（まさかこつちでも運転するなんてね…
しかも救急車を）

病院の救急車を使うことであった。

優の情報操作によって病院のミサカの部屋と同様に内部を広くしている。

軽く10人は乗せることが出来る。

ちなみに運転するのは他でもない優である。

この世界と前世の車の運転方法は変わらないのが救いであった。流石に誘拐ともいえるこの計画には運転手は雇えないのだ。

ようやく最後の研究所である。

（もう太陽が昇ってきてるじゃない…）

優は昇りだしてきた太陽を拝みながら最後の1人えださき枝先ばんり絆理を研究所から連れ出し、細工を行う。

「うし。」

結局徹夜かあ…」

優は愚痴りながらも病院に向かって救急車をすべる様に動かした。た。

何事もなく病院に収容した後、優は徒歩で家路についていた。時間的には昼になりかけの朝である。

優に甲高い音が聞こえてくると頭に小さな痛みが走る。

（なにこの音…）

なんだか知らないが、演算能力を阻害する音のようだ。

一旦、優は音が聞こえない場所まで下がる。

（やっぱり音で演算能力を阻害するみたいね…。
音を聞こえなくしていけば大丈夫か？）

そう思いながら優は周囲の音波を測定。

音とは波で出来ているためその波を解析してそれだけを消すように能力（一方通行）を使ってしまえば…

「はい。音が聞こえなくなつたと」

優は1人さびしく呟いてから音波を見ながらその音が大きくなっている場所に進んでいく。

どうやら少し先に見える紫のバンがその音の発信源のようだ。

ここまでくると普通有能力者は倒れこむほどの頭痛をとまなうのだが、音を特定し反射している優には関係がない。

「へっへっへっへ」

頭が痛いつてか？」

路地から男の声が聞こえる。

（最近頻発してる能力者狩り？）

優はそう思うとまずバンの周りを警戒していた男をまず蹴り飛ばす。スカートを穿いているのだが研究所に進入する関係上、下に短パンを穿いているため別に気にはしない。

ズボンでも良かっただろうと思うのは気のせいである。気にしては駄目なのである。

「誰だ!!」

優が路地を見ると常盤台の制服の女子が頭を抑えながらこちらを少し見る。

「上条さん...?」

常盤台の制服の女子... 婚後は倒れこんだ。

「...私の友達に手を出してただで済むと思ってんのか? あゝあ?」

優はその婚後を見ると男たちをにらむ。

「けっここで頭痛がしないんだから無能力者だ。

俺たちに勝とうなんて百年はえーぜ!!

やれ!!」

リーダー格の男が声をあげスキルアウトの人たちが襲ってくるが...

バチバチッ

上手に焼けました。

「なつてめえここで能力が使えるのか!!

野郎共撤退だ!!」

リーダー格が戦略的撤退を行おうとするが。

「女の子に手をあげたのは許せねえな」

男の声とともにそのリーダー格の男は意識を失った。

徹夜はつらいよ（後書き）

無免許？私有地ならいいんですよ？

私有地じゃない？ちっちゃいことは気にするな、わかて（ry

赤信号皆で渡れば怖くない？

「このところ頻発していたスキルアウトによる能力者狩りもどうやらこれで打ち止めですわね」

優の通報によってやってきた白井が現場を見ている。

「まさか婚后光子を狙うとは。

どれだけ計画を組もうともレベル0のはぐれもの達がレベル4の能力者になうはずがないと

この連中が骨身にしてみて……」

「それがちよつと違うみたいなの。

被害者である婚后さんが言うには自分はなぜか上手く能力使えなかった

そこに上条さんが現れて助けてくれたみた……い……」

固法は白井に言いながら運ばれていくスキルアウトを見て一瞬言葉を詰まらす。

「固法先輩？」

「いや、初春さんの聞き取り上手く言ってるかなあ？」

固法は初春の方を向く。

「まあ上手くいってると思いますよ」

急に白井の横にアンチスキルによる事情聴取を終わらせた優が現れ

る。

「っ！！　びつくりさせないでくださいまし」

白井は急に現れた優に驚く。

「あはは。ごめんごめん」

優は軽く謝ると

「そうそうアンチスキルの人たちにも言ったんだけど婚后さんを助けたのは私だけじゃないよ」

白井と固法にリーダー格が逃げようとしたときに現れた男性の情報を話す。

人がいなければ空間ディスプレイなどを作り出して見せるのだが、流石にここは人がいすぎる。

「黒い革ジャンを持った背中に蜘蛛の刺青をしている男性ですの？」

「声をかける前に逃げられちゃいましたけどね…」

婚后を介抱する必要がなければすぐにでも追いかけていたのだが…。

「ビッグスパイダー？」

「それが能力者狩りを行っていた組織の名前なんですか？」

白井と初春はそのビッグスパイダーの話をしてくれた固法に向かって聞いている。

「そのビッグスパイダーはスキルアウトの中でもちよつとは名のしれた組織なの。」

かつてはそれなりのプライドを持って一線はわきまえてたんだけど

最近は単なる無法者の集団になってしまった」

固法は入れたココアを椅子に座る白井と初春と優の前におく。
ちなみにここは風紀委員177支部である。

優はいるのは人がいないこの支部で空間ディスプレイを用いた情報提供を行っていたためである。

「スキルアウトのプライドといわれても所詮はひがんだ烏合の衆」

白井は自信満々にいうが、

「そうとも限らないんだけどね？」

優は口を挟む。

「上条さんもスキルアウトに知り合いとかいるんですか？」

初春が聞いてくる。

幻想御手の時に路地で襲われたときに助けてくれたスキルアウトの女性と初春は結構良好な関係を持っているらしい。

「んーいないけど…何グループかの目的というか行動理念とかなら知ってるけどね」

「どういったものなんですの？」

「人を助けることを行動理念としているスキルアウトの集団もいるし、

この街を良くしていこうとするスキルアウトの集団もいる。
能力がないとか言われて劣等のレッテルを貼られた人たちが集まれば

自分の事のためにしか能力を使わない馬鹿な能力者ではなく、他人のために行動を起こす事が出来るって
いう風に集まった集団もいる」

この善意を働こうとするスキルアウトの集団はどこからか当麻の噂を聞きつけ、

当麻に影響されたものたちの集まりである。

「いまどきそんなスキルアウトもいるのですわね」

どうやら白井のスキルアウトに対するイメージが少々変更されたみたいだ。

「それにしてもレベル0がなんで能力者狩りなんか…」

美琴がファミレスの窓から外を見ながら言う。

ここ先ほど優達がいた177支部ではなく、美琴と佐天も呼び、これから遊ぼうという考えで集まっているのである。

「多勢に無勢。

いかに優秀な能力者といえど大勢の人間を相手にするのは難しいんです。

どこぞの誰かさんとは違ってさまざまな能力を行使なんて出来ませんので」

白井は珈琲を飲んでいる優を見る。

「それにビッグスパイダーという組織は闇ルートから非合法的な武器

を手に入れているという情報もあります」

初春が先ほど調べた情報を話す。

「ふうーんいつそのことそいつら私に絡んできてくれないかなー？」

美琴も冗談で言ったのだろぅが冗談には聞こえない。

「お姉さま。

絡んで欲しいなら黒子がいつでも絡みますのお」

白井が美琴に抱きつく。

「それでその婚后さんを襲ったスキルアウトの連中ってみんな捕ま
ったんだよね？」

佐天がいつもの光景を無視して初春と優に聞く。

「上条さんが言うには逃げようとしていた人たちを一撃で殴って逃
走したようです」

「通りすがりの正義のヒーローって感じだね」

佐天は軽く言うが、

「とんでもない！！」

アンチスキルでもジャッジメントでもないのに能力を行使するなん
て言語同断！！

れっきとした犯罪者ですわ！！」

「…私は？」

白井の言葉に美琴は顔を背け、優は聞く。

「上条さんにも本当は色々言いたいのですが、今回は人助けをして頂いたということで見なかった事にしております。」

白井は優に向かって言うのであった。

「またビッグスパイダーが？」

177支部に遊びに来ていた美琴が言う。
もちろん177支部は遊びに来るところではないのだが、固法もあきらめている。

密かにジャッジメント以外が持ち込んだ私物も充実していたりする。

美琴の持ち込んだマグカップにその他お茶菓子。

優の持ち込んだマグカップにノートパソコン、文庫本。

佐天の持ち込んだマグカップに携帯の充電器やお菓子。

そのほかにも色々とある。

「今週に入って3件め連中ピッチをあげてきておりますわ」

白井がノートパソコンに映し出される被害者のデータを見ている。

「やっぱりここは私がどかんと」

美琴が言うが、

「お姉さま。」

お姉さまのどかんは被害が大きくなりすぎますの。

上条さんや佐天さんに任せたほうが被害が小さくてすみますわ」

白井によって断られた。

「どうやらビッグパイダーが勢力の伸ばしてきたのは2年前ぐらいからみたい」

優は支部のソファーに座りノートパソコンで調べた内容を言う。

「武器を手にして犯罪行為を繰り返すようになったのもちようどその頃」

初春は小型の情報端末で調べた情報を話す。

「ふーん。」

武器を手に入れて調子付けだしたって事？」

ソファアーに座り1人ココアを飲んでいる佐天が言う。

「でも物資の流通は嚴重に管理されてるし非合法なものなんて当然シャットアウトされてるはずじゃない？」

「蛇の道は蛇といいますから…」

「連中にその道を作って上げた奴が他にいるのかもね。優は何かない？」

美琴は情報に精通している優に振る。

「確かに学園都市の物資の流通は嚴重に管理されてるけど、まったく穴がないわけじゃなくてね

この学園都市ではたまに外の法律では際どいものも研究されていてそのための実験試料などは

結構、検査をパスして入ってこれるものがあるの。

それに学園都市には独自の軍があるじゃない？」

あの装備の研究などのために色々外から武器を持ち込む必要があるみたい」

「じゃあどこかの研究所か軍が関係しているって所かしら」

大蜘蛛のボスは黒妻ではなく蛇谷

「あの…それからもう一つビッグスパイダーのリーダーが分かりました。」

名前は黒妻綿流。くろつまわたる

かなりあくどい男のようです。

仲間も平気で裏切るような奴らしいですね。

グループから抜けるなんて言おうものなら背中から撃ちかねない男だと言われています」

どこかの掲示板にでもあったのだろうその情報を初春は白井に伝える。

「ふーん…つまり、最低の男というわけですね」

優は固法の異変に気が付く、だが今はまだ聞かない。

「あつそういえばその人背中に蜘蛛の刺青いれているみたいですよ」

固法が一気に悲しむような顔をする。

「確か婚后さんを助けたのも…」

「背中に蜘蛛の刺青していたけど…そのビッグスパイダーのリーダー、

黒妻って人とは違うんじゃないかな？

仮に黒妻が殴り飛ばしたのだったらあの殴り飛ばされた人達は黒妻の顔は知っているはず。

でも全くあの男たちは殴り飛ばした男を知らない様子だった」

優は現場にいた記憶を探り自分の考えを伝える。

「上条さんが言うのならビッグスパイダーのリーダー黒妻と乱入者は別物ということですね」

「えっと彼らは第10学区の通称ストレンジと呼ばれる地域を根城にしています」

白井が何かを考え始め、

「乗り込むの？」

「管轄外ではありませんけど、第7学区内で発生した事件の調査だといえは筋は通りますの」

美琴にどう行動に出るか伝える。

「ごめん。」

私今日中に報告書まとめなくちゃいけないくて」

固法はどこか安心したような表情をしているが悲しそうな表情も見え隠れしている。

「それじゃ行くわよ!」

美琴は白井を連れて行ってしまった。

白井が嬉しそうだったのは気のせいだとしておこう。

「で？」

固法さん？もしかしてビッグスパイダーに知り合いがいたりするんじゃないの？」

初春と佐天が支部から出て行った後、優は固法に聞く。
朝の婚後が襲われた現場から感じていたことである。

「…分かつちゃった？」

「そりゃあねえ…あの子達には分からなかったんじゃないのかな？」

優は前世もあわせると固法を娘に持っけていてもおかしくないくらいの人生経験を持ち合わせているのだ。

十数年の人生経験しか持ち合わせていない美琴達とは少し違う。

それから固法は優に昔の事を話し出す。

昔自分がビッグスパイダーに所属していたこと。

その当時のビッグスパイダーのリーダーは黒妻綿流だったが、その黒妻自身は2年前に起きた事件により重症を負って入院し、死亡しているといわれているということだ。

「…固法さん。黒妻さんって…」

優は空間ディスプレイを作り出しあの人を映し出す。

「この人ですよね？」

固法は何も言わずに頷いた。

優はパソコンで、固法がいう蜘蛛の刺青の男、黒妻が今どこにいるのかを衛星の画像によって調べ始める。

黒妻がビッグスパイダーのリーダーでこの事件の裏だと思い込んでいる白井たちを理論で論破するには

証拠が必要なのだ。

優の能力を持つてすると学園都市中の監視カメラから1人を見つけ出すなど30分で事足りる。

しかし、監視カメラが配備されていない地域がある……いや監視カメラがすべて破壊されている地域がある。

第10学区のストレンジだ。

黒妻がビッグスパイダーのリーダーでこの事件の裏だと思い込んでいる白井たちを理論で論破するには

証拠が必要なのだ。

このときばかりは固法もハッキングには目を瞑った。

愛した人の罪が晴れるならという希望もあったのだろう。

だが、黒妻を見つける前に美琴と白井を見つけた。

ストレンジにはいくと言っていたのだが、男を1人引き連れているある建物の前に止まり中から皮ジャンにリーゼントの男が出てくる。多分この男が今のビッグスパイダーのボスと名乗っている黒妻に扮した誰かなのだろう。

「固法さん。この人に見覚えは？」

優は固法を呼びその衛星画像を見せる。

「蛇谷君!？」

固法はその映像を見て叫ぶのであった。

「ジャッジメントですの」

白井が言つと周りの男たちは小言を言い出す。

「ああ、ジャッジメントだあ？」

「一体何のようだよ」

革ジャンのリーゼントの男が廃ビルから出てきながら言う。

「黒妻綿流ですわね。」

能力者を対象とした暴行事件の首謀者として拘束します」

「ほおー拘束ねえ…」

わりいがおままごとに付き合ってやる暇はねえんだ。
「帰るな」

「言ってくれるわね」

美琴が男をにらみながら呟く。

「親切で言っただけなのに分かんねえなら体で分からせてやる」

とたん周りの男達が距離をつめてくる。

美琴も構えるが、

「お姉さま。この程度の連中、私1人で十分ですの」

白井が抑える。

「十分かどうか俺らの実力見てからにしろよな！」

すると急に頭に響くような高音が回りに響きだす。

白井は持っていた鉄棒を落とし、耳を押さえる。

美琴も耳を押さえる。

「なんなのこれ!!」

「頭に直接響く見たいですの」

「どうした？」

男が言うと白井はテレポートしようとするが演算が狂いテレポートすることが出来ない。

「どうしたお嬢ちゃん

1人で十分じゃなかったのかっ!!」

白井は男の蹴りを食らって吹き飛ばされる。

「黒子!!」

美琴は電撃を放つが、それは威力も小さくコントロールも全くきかない。

「そ、そんな!!」

狙いも威力もまるで…」

「ふっ。

能力をコントロールできねえか。

お前はもちろんしらねえだろうが、これはキャパシティダウンってシステムでな

詳しいことはしらねえが、音で脳の演算能力を混乱させるんだつてよ。

まっ俺たちスキルアウトにはただの甲高い音にしか聞こえないんだがな」

男は自信満々に言う。

「こんなもの一体どこで…」

「ふん。」

黒妻さん許してくださいっていうんなら考えてやってもっ」

男の目の前をキャパシティダウンをいじっていた1人が吹き飛ばされる。

「はあはあはあ…」

人の名前を勝手に使っているのか？

な^{へびたにつく}あ蛇谷次雄よお？」

男…蛇谷が声が聞こえてきたほうを見るとそこには風にスカートをなびかせて、

蛇谷を見据える少女…上条優がそこにいた。

大蜘蛛のボスは黒妻ではなく蛇谷（後書き）

実は…現在熱が37.0度あります。

風邪ひきましたね…

というか丸1日記憶が飛んでいるんですけど…

頑張れ！！黒妻

「誰だ！！」

蛇谷は突然現れた優に声を上げる。

「はあはあ…まったく美琴達も何も準備せずに行くんだから…」

優は蛇谷の声に答えずキャパシティダウンを調べる。

そして優は外に繋がっていたプラグを抜く。

このプラグ以外は全てダミーであったのだ。

優の息があがっているのは美琴と白井が構えてから支部をテレポ―トで飛び出してきたのだ。

高速演算はそれに比例して体力も奪っていく。

「優！！」

「上条さん！！」

美琴と白井は優を見ると声をあげる。

まだ演算能力が回復していないのだろう。

能力が発現する様子はない。

優は蛇谷を見た後回りの男たちを見る。

「へえ…警棒に木刀、拳銃に竹やり！？」

ついつい優は目に入った竹やりを見て声を上げてしまう。

確かに竹やりは第二次世界大戦の日本では本土決戦に備えた国民義勇隊の主要装備の1つとされていたが、この学園都市では廃れてし

まった装備でもある。

しかも槍といっても一度使つと貫通力が鈍り使い捨てになりどころかというと長手鈍器として使ったほうが使えるといった簡易武器である。

「おうおう。

今朝の嬢ちゃんじゃねえか」

優が回りを見ていると後ろから声をかけられた。

「えーと…黒妻さんであってますよね？」

優は振り向き黒妻に向かって言う。

「まあな」

「く、黒妻さん…」

蛇谷は黒妻を見て呟く。

「黒妻さんどうしたんすか！！」

周りの男たちが蛇谷を黒妻と呼ぶ。

「へー今は黒妻って言うのか。

ああ嬢ちゃんこれもっててくれる」

黒妻は優にムサシノ牛乳を渡すと目の前の男たちを見る。

「え？あ、はい」

優は何も言えずにムサシノ牛乳を受け取る。

「蛇谷、久しぶりだな」

「う、嘘だ！！あんた死んだはずだ！！」

あれだけのことがあつて生きてるはずがねえんだ！！」

蛇谷がおびえている。

「じゃあ幽霊つてことでいいや」

「幽霊…」

幽霊だったら墓の下に戻したら！！

おら！！やっちまえ！！

相手はたった一人だ！！こっちには武器だつてあるだろうが！！」

蛇谷は狂ったように指令を与える。

「蛇谷…お前変わったな」

そして戦闘が開始する。

黒妻は一気に男たちの中に駆け込み無手であるにもかかわらず武器を持つ男たちをどんどん無力化していく。

殴る、蹴るといった単純な攻撃がほとんどなのだが、そのどの攻撃も男たちを無力化するにはもったいないほどの威力を持っている。

「こ、こいつらがどうなってもいいのか！！」

1人の男が集まった優達に拳銃を向けるが、一瞬光ったものが見え
るとその拳銃は綺麗に真っ二つに切れる。

「あっ!？」

男は一度拳銃に視線を向け、優達に視線を戻すと優が手に光り輝く
剣を持っている。

「あー…黒妻さん避けてくださいね」

優は電撃を黒妻を避け、男たちに放つ。

黒妻に声をかけたのは念のためだ。

美琴に頼んでもよかったがまだ演算能力が狂っていると思われるた
め、下手に電撃を使わずと過大威力になってしまいかもしれないか
らだ。

「う、うわああああ!!」

蛇谷が叫び声をあげて逃げていこうとするが…

バチンッ!!

優の電撃で気絶させられる。

もちろんそれに続いて逃げようとした男たちも一緒に。

「嬢ちゃん強いんだな」

黒妻が優に向かって言う。

この場で能力を使ったのは優だけなのでここにいる美琴と白井の能力は黒妻は知らないのだ。

「まあ…そうそう美琴、白井さん大丈夫？」

「まだ力が入らない感じなんだけど…なんとか…」

優は美琴のスクリーンを開始。

だが、異常はない。

精神的に力が入らないのだろう。

「あの男黒妻じゃないの？」

美琴が黒妻に聞く。

「昔は蛇谷って言ったんだけどなあ……
今は黒妻って呼ばれてるらしい」

「蛇谷が黒妻って呼ばれたのはちょうど2年前。
だいたい黒妻さんが入院したときかな」

優は黒妻にムサシノ牛乳を返しながら補足説明をする。

「ほうそこまで調べたのか」

「黒妻さんが入院したあの病院。
私の知り合いがいましてね……ちょっとカルテを調べてもらったんですよ」

あの病院とは冥土返しのある病院だったのだ。

黒妻綿流は全身火傷の瀕死の状態で病院に運ばれてきた。

人間の体表面積の20%もの皮膚が火傷を負うと合併症などにより、
死亡する確率が高くなるのだが、

黒妻は全体表面積の73%火傷を負ってしまったのだ。

それを冥土返しは完全に治してしまった。

ちなみにカルテを調べたのは病院にミサカシスターズとともにいる
薫だったりする。

名誉のために言っておくが冥土返しは医者というからには秘密主義
者であり、他人のカルテなど流出はさせない。

薫が無理やり能力ハッキングを行った結果である。

「先輩!!」

後ろから固法の声が聞こえてくる。

「久しぶりだな。美偉^{みい}」

黒妻が振り返るとそこにはジャッジメントの腕章をした固法がいる。

「先輩!!」

なんで…なんで何の連絡もくれなかったんです!!

私…てつきり…」

黒妻は固法のつけている腕章を見つめるとそれに気が付いた固法はその腕章を押さえる。

「ふん。すぐに消えるさ」

黒妻は消えていなくなろうとするが…

黒妻が行こうとする方向からアンチスキルの車両の音が聞こえてくる。

だが、ここに来てから誰も携帯などは使っていない。

ならば誰か…それは…

「黄泉川先生遅かったなあ…どうせ上がうるさかったんだろうけど

…」

優である。

能力でメールを送信することぐらい可能なのである。

「優！！一体どういうこと！！」

美琴が聞いてくる。

「だってこうでもしないと黒妻さん逃げちゃうじゃない。
今回は黒妻さんは何もしていないただの一般人」

優は美琴達に言う。

「どういうことだ？嬢ちゃん」

「つまり、この事件には黒妻さんは関係のないその場に居合わせた
ただの固法さんの彼氏ってこと…でっ…」

固法は優の口をふさぐが一步遅かったようだ。
固法の顔が赤くなる。

「な、なななななんで！！」

「固法先輩って…」

「その顔を見れば一目瞭然ですわよ。固法先輩…」

美琴と白井は優の口を押さえている固法を見て小さく笑うのであつた。

「と、とにかく。」

黒妻さんは表の舞台に戻ってきてください。

ビッグスパイダーは黒妻さんが前の組織のように戻っていきなさい。

こんな能力者を襲うような組織じゃなかったんでしょ？」

ようやく、固法の手が離れた優が口を開く。

「難しいことを言ってくれるじゃねえか」

嫌味を優にいう黒妻だがその顔は目標が出来、なにやら楽しそうな顔である。

アンチスキルの車両がビルの前で止まり、銃で武装したアンチスキルが出てくるが、

いつも行動する数より少ない。

相手が能力者でないからだろうか。

「まーた優は事件に首を突っ込んでたんじゃん」

出てきた黄泉川は優に愚痴を言う。

「そうですよ!!」

一般人は首を突っ込んだじゃ駄目です」

横に現れた鉄装も言う。

「あははー

多分それは無理な要求ですねー

今回もいつも通りお願いしますね」

優は笑いながら黄泉川と鉄装に言うと、2人はあきらめた顔をするのであった。

ちなみにいつも通りとは、アンチスキルが制圧したという事にするのである。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8699o/>

とある魔術と情報操作(データオペレーション)

2011年10月22日13時40分発行